

関西外国語大学大学院外国語学研究科

博士学位申請論文 令和2年度

あだ名についての日中比較研究
—言語・文化を中心に—

関西外国語大学大学院

外国語学研究科 言語文化専攻

917302 劉巍

目次

第1章 序論.....	1
1.1 研究の背景及び目的.....	1
1.2 論文の構成.....	4
第2章 先行研究と問題点.....	6
2.1 あだ名・ニックネームに関する分類研究.....	6
2.2 あだ名・ニックネームに関する心理学研究.....	6
2.3 あだ名・ニックネームに関する認知言語学研究.....	8
2.4 あだ名・ニックネームに関する比較研究.....	9
2.5 問題点.....	9
第3章 日中あだ名の定義及び由来.....	10
3.1 日本における定義と由来.....	10
3.1.1 日本における「あだ名」の定義と由来.....	10
3.1.2 江戸時代における一般庶民のあだ名.....	12
3.1.3 幕末期における大名のあだ名.....	13
3.1.4 現代日本におけるあだ名.....	14
3.2 中国における定義と由来.....	15
3.2.1 中国における「外号」の定義と由来.....	15
3.2.2 古代中国におけるあだ名.....	17
3.2.3 賛美を持つ美称と罵りを込めたあだ名.....	19
3.2.4 現代中国におけるあだ名.....	21
第4章 あだ名のつけ方.....	22
4.1 見た目からつけられたあだ名.....	22
4.1.1 日本語の「キノコ」「ヘルメット」や中国語の「蘑菇」「锅盖」など.....	27
4.1.2 日本語の「電信柱」「ごぼう」や中国語の「电线杆子」「竹竿」など.....	31
4.1.3 日本語の「メロンパン」「大福」や中国語の「餅」「馒头」など.....	35

4.2	性格からつけられたあだ名.....	38
4.2.1	日本語の「干物」と中国語の「话癆」.....	42
4.2.2	日本語の「缶詰」と中国語の「榆木脑袋」／「一根筋」.....	44
4.3	しぐさの特徴からつけられたあだ名.....	46
4.3.1	日本語の「放送局」と中国語の「大喇叭」.....	48
4.3.2	日本語の「寝太郎」と中国語の「觉主」.....	51
4.4	好み・優れた点からつけられたあだ名.....	52
4.5	本名から変形したあだ名.....	53
4.6	雰囲気からつけられたあだ名.....	56
4.7	身につける物からつけられたあだ名.....	57
4.8	職業・家業・身分・環境・役割からつけられたあだ名.....	57
4.9	出来事からつけられたあだ名.....	58
4.10	失言・口癖・独特の口調からつけられたあだ名.....	59
4.11	年齢・生年・性別・出身地からつけられたあだ名.....	61
4.12	歴史上の人物や典故から付けられたあだ名.....	62
4.13	親族・長幼関係から付けられたあだ名.....	63
第5章	動物のイメージに基づいてつけられたあだ名.....	66
5.1	動物のイメージに因む人のあだ名.....	66
5.2	日中の「狐」と「狸」のイメージとあだ名.....	75
5.2.1	あだ名としての日本語の「狸」と中国語の「狐狸」.....	76
5.2.2	動物としての日本の「狸」と中国の「貉」.....	78
5.2.3	あだ名としての中国語の「狐狸」と日本語の「狐」.....	79
5.2.4	あだ名と文化背景の関わり.....	84
5.2.5	結び.....	90
5.3	日中の「虎」のイメージとあだ名.....	91
5.3.1	あだ名としての日中の「虎」.....	92
5.3.2	日本語の「大虎」と中国語の「醉猫」.....	101
5.3.3	日中文化におけるの「虎」.....	103
5.3.4	結び.....	106

5.4 日中の「犬」のイメージとあだ名.....	107
5.4.1 あだ名としての日中の「犬」.....	108
5.4.2 日中文化におけるの「犬」.....	117
5.4.3 結び.....	121
第6章 あだ名と社会問題.....	123
第7章 結語.....	130
参考文献.....	135
日本語参考文献.....	135
中国語参考文献.....	138
コーパスの資料.....	141
インターネットの資料.....	142

第1章 序論

1.1 研究の背景及び目的

「今日は学校に行ってみんなにあだ名をつけてやった。校長は狸、教頭は赤シャツ、英語の教師はうらなり、数学は山嵐、画学はのだいこ。今に色々な事をかいてやる。さやうなら。」

(『坊ちゃん』 夏目漱石)

夏目漱石の小説『坊ちゃん』の一節である。松山に赴任した坊ちゃんは、自分を可愛がってくれた清に、はじめて手紙を出した。その手紙に、こう書いたのである。以下、「狸」「赤シャツ」「うらなり」「山嵐」「のだいこ」といったあだ名で、『坊ちゃん』の話は展開していく。

「那官人生的豹头环眼，燕颌虎须，八尺长短身材，三十四五年纪。」

(『水滸伝』 施耐庵)

(筆者訳：あの人は豹のような頭にどんぐりまなこ、燕のようなおとがい(顎)に虎ひげをたくわえている。身のたけ八尺であり、三十四、五歳くらいである。)

「黒熊般一身粗肉，鉄牛似遍体頑皮。交加一字赤黄眉，双眼赤丝乱系。怒发浑如鉄刷，狰狞好似俊猊。天蓬恶煞下云梯。」

(『水滸伝』 施耐庵)

(筆者訳：黒熊のような粗い肌で、鉄の牛のように大きな体をしている。赤く黄色い眉毛、両眼が赤く充血していた。髪が鉄のたわしのように逆立つほど怒っている。凶暴な顔は獅子と似ている。凶悪な神が天から降りてきたようである。)

中国の四大奇書のひとつ『水滸伝』の登場人物の描写である。豹のような(丸い)頭という特徴があるため、林沖は「豹子頭」と呼ばれる。これに対して、李逵は自身の剽悍さとその怪力、色の黒さからよく「黒旋風」や「鉄牛」とも呼ばれる。108名の豪傑もそれぞれ独自のあだ名を持っている。

有名な小説家魯迅はあだ名に興味津々のようだ。小説の登場人物である「阿Q（名前の頭文字がQだから）」、「豆腐西施（美人であり、豆腐の店を営むから）」、「孔乙己（「上大人孔乙己」からとった言葉）」などの呼び方はあだ名である。現実生活でも周りの人にあだ名を付ける。例えば、弟に「馋人（子供の時代、弟がお父さんに自分のことを告げ口したから）」と付け、泣き虫の女に「四条（涙と鼻水が出た様子から）」を付け、自分の奥さんのことを「小刺猬（可愛がる言い方で、ハリネズミという）」「害马（「害群之馬」の略。自分の属する集団に害を及ぼす人）」と言われたことがあるから）」と呼んでいた。日本の場合も、中国と同じく文学作品の中でよく使われる。例えば、夏目漱石の小説『吾輩は猫である』の登場人物「白」「黒」「三毛子」といった猫の名前や牡蠣先生（書齋に入ったきり出てこないの、まるで殻に守られた牡蠣のように見える）、鼻子（大きな鼻があるから）などである。そのほか、アニメの作品中の人物にもあだ名が付けられている。例えば、『ドラえもん』の「ジャイアン」は、本名の剛田武より「ジャイアン」の方がよく知られている。他には、『スラムダンク』での「ゴリラ男」、「メガネ君」など。本名は忘れてしまっても、あだ名だけは覚えていることも、決して珍しくない。あだ名は、その人物の特徴を象徴していることが多く、本名よりも覚えやすく忘れにくいいためである。

このように、あだ名は、文学作品やアニメ作品の登場人物名としてよく用いられている。また、日常生活を顧みても、よく使われることに気づく。例えば、日本の野球界では、清原和博を「番長」と呼び、松井秀喜を「ゴジラ」と呼び、高橋由伸を「ウルフ」と呼び、佐々木主浩を「大魔神」と呼んでいる。芸能界では、深田恭子を「深キョン」と呼び、新垣結衣を「ガッキー」と呼び、黒柳徹子を「トットちゃん」と呼んでいる。さらに一般社会では「猿」「ちび」などのあだ名もよく耳にする。一方、中国のスポーツ界では郎平を「鉄榔頭（ハンマー）」と呼び、張怡寧を「大魔王（魔王）」と呼び、姚明を「小巨人（巨人）」と呼んでいる。芸能界では、張国榮（レスリー・チャン）を「哥哥（お兄さん）」と呼び、巩俐（コン・リー）を「巩皇（女皇帝）」と呼び、洪金宝（サモ・ハン・キンポー）を「大哥大（兄貴）」と呼んでいる。一般社会にも「大眼兒（目が大きな人）」「老大（ボス）」「戲精（注目を集めるために、自分ではない他人を演じたり、余計な演技をしたりする人）」など色々なあだ名がある。あだ名は、われわれが日常行う名づけ行為の典型的なものである。有名人から身近にいる人々まで、様々なあだ名を持っている。

日本においてユニークな方法を取り入れて社内の空気を変えた会社がある。その中に役職や年齢など関係なくお互いにあだ名で呼び合う方法が取られている会社が少なくない。

2019年にベースメントアップス株式会社が269名の社会人を対象として「職場での呼び方についての調査」を実施した。調査の結果によると、「苗字」と回答した人が全体の74%で最多だった。とはいえ、全体の16%の人が「あだ名」と回答したためフラットな会社では社員同士の呼び方を自由にして、あだ名で呼び合うようにしていることもあると分かった。あだ名で呼ぶことのメリットと言えば、社員同士の距離を縮めることである。部下の中には、上司を役職名で呼ぶと距離感を感じて、コミュニケーションを取りにくいと思う人がいる。職場が堅苦しい雰囲気だったら、部下は上司に気を遣い過ぎて自分の意見が言えなくなったり、萎縮して仕事にチャレンジできなくなったりしてしまう。しかし、役職や年齢にかかわらずあだ名で呼びあうと堅苦しさが少なくなり、自然と話がしやすくなる。その結果、職場で人間関係が上手いき、仕事を円滑に進めやすくなる。つまり、職場全体の雰囲気が良くなり、働きやすい職場になると考えられる。

中国では、学校や職場で、あだ名をつけるのはよくある現象である。特に学生時代には誰でも人にあだ名を付けられた経験があるだろう。さらに、学生が学校の先生にあだ名を付けるもの珍しいことではない。鄧・劉(2016)では中学校の学生を対象として授業の先生にあだ名を付けることについて調査を行った。調査の結果、50%以上の学生が先生にあだ名を付けた経験があることが分かった。この中であだ名によって友好的な教師と生徒の関係を築けると思う学生が39%を占め、先生にあだ名を付けるのが普通なことだと思う学生も31%を占めている。これに対して、わずか26%の学生は先生にあだ名を付けるのは失礼なことだと思っている。その他、4%の学生は状況によって違うと思っている。この調査の結果は中国におけるあだ名の使用状況の真実を反映していると言える。先生へのあだ名がこれほど多いという結果から考えると、学生同士でのあだ名はより一層使用頻度が高いのではないだろうか。実際に中学校だけではなく、小学校、高校、大学も含め、さらに社会の隅々まであだ名は使われている。

あだ名(外号)は日常的な呼称の一つとして、「本名より覚えやすい」や「距離感を縮め、人と親密感を増す」などのメリットが多くの人に認められている。その他、あだ名は人物の個性を際立たせるため、文学作品でも活躍している。

一方で、欠点や弱点に基づいてあだ名(外号)を付ける時もある。

森岡・山口(1985:201)の記述によると、あだ名は、本来、本人のいない蔭で言うものである。本人に知られずに密かにあだ名をつけては、仲間うちであるいは一人で、楽しんだり、憂さを晴らしたりするものである。したがって、元来は、本人の前で言うべき性質

のものではない言葉である。

あだ名は、その人物の欠点や弱点を容赦なく指摘していることが多いので、目の前で言われると、本人は深く傷つくことがある。例えば、日本のあだ名「ちび」や「河童」、「デブ」、中国のあだ名「大象腿（象のような太い足）」「秃驴（禿げのロバ）」「蒜头鼻（獅子鼻）」などである。

そのため、一部のあだ名は嘲笑、皮肉、罵声などの侮辱的な面が存在する。その結果、近年ではあだ名といじめ問題が関連付けられるようになった。

学校や職場、生活の中で広く使われるあだ名と文学作品の中で活用されているあだ名、そして、あだ名が引き起こしたいじめ問題などを考察すると、あだ名には確かに二面性が存在していると分かる。

本論文は、まず日中両国のあだ名の定義を分析し、あだ名に対する認識の違いを探り出す。文学作品及び日常生活での実例を挙げ、これまでのあだ名に関する研究を踏まえ、日中両言語にある様々なあだ名を分類し、考察したいと思う。同じ特徴を持つ人にあだ名をつけると、日本語と中国語はどのような類似点と相違点があるのか、同じ意味のあだ名が、日中両国でどのような人を表すのか、研究したいと思う。日中両国のあだ名を比較する上で、両言語に反映される日中両国の認知的・文化的共通性と独自性を明らかにしていく。また、たくさんのあだ名から動物のイメージに因むあだ名を絞り、主に狸、狐、虎、犬を中心としての日中両国のあだ名について分析する。最後に、あだ名によって起こったいじめ問題にも触れていこうと思う。

1.2 論文の構成

本論文は以下の部分で構成されている。

第1章では、本論文の研究背景及び目的を説明する。

第2章では、あだ名に関する先行研究と成果の流れを紹介し、問題点や残された課題を指摘する。また本論文で研究する課題を紹介し、構成を説明する。

第3章から第5章までは、本論文の中心部分である。収集したデータをもとに、中国人と日本人のあだ名の由来と名づけの動機を説明し、あだ名の特徴によって付け方を分類し、それぞれの付け方を代表するあだ名を典型例としていくつか出して分析する。日中両国のあだ名にある文化的・認知的異同を考察していく。

第3章は日中両国のあだ名の定義及び由来を考察する。なお、日中両国において古代か

ら現代まで、百姓から上層階級までのあだ名の具体例をいくつか挙げ、日中両国ではあだ名に対して定義上の共通点と相違点を探っていく。

第4章は身体の特徴、性格、しぐさ、好み、雰囲気、能力など13点の名付け方をまとめ、同じ特徴を持つ人にあだ名をつけると、日本語と中国語はどのような類似点と相違点があるのか、同じ意味のあだ名が、日中両国でどのような人を表すのか、研究したいと思う。

第5章は範囲を狭め、動物のイメージに基づいてつけられたあだ名だけを考察し、動物の特徴と人のあだ名の関係を明らかにする。ここでは、代表的な動物である中国の狐と日本の狸及び日中両国の虎、犬の文化上の比較を通して、あだ名として使う時の共通点と相違点を分析する。

第6章では、日中両国の現況に基づきあだ名によって起こった社会問題にも触れていき、いじめ問題を論じていく。

第7章では、本論文で考察した日中のあだ名に関する成果を整理して示し、今後は異なる時代におけるあだ名の相違点・共通点と変化を探究しいと思う。なお、食べ物、植物などのイメージに関わるあだ名など残された研究課題を提示する。

本論文は主に日中両国におけるあだ名の由来及び名付け動機の考察→名付け方の種類の分類及び分析→代表的な動物と関わるあだ名の考察→あだ名によって起こった社会問題の分析という構成で、考察を行う。

第2章 先行研究と問題点

2.1 あだ名・ニックネームに関する分類研究

あだ名（外号）・ニックネームに関する分類研究は、日本では比較的多く、赤尾（1986）と森岡・山口（1985）が代表として挙げられる。赤尾（1986）は、自らの小学校、中学校時代のクラスメートが使用していたあだ名や呼び名について、姓や名をそのまま、姓や名の一部、姓や名の変形や読み替え、姓の一部プラス名の一部、有名商品・有名人物などの引っ掛け、名前と関係なく作られたの7カテゴリーを述べた。森岡・山口（1985）は日本人のあだ名を大きく本名もじり名系統のあだ名、特徴名系統のあだ名、本名特徴融合名系統のあだ名という三つの系統に分けている。その中で、特徴名系統のあだ名を以下の特徴に詳しく分けている。身体的特徴、しぐさ・表情・行動の特徴、雰囲気、能力、性格、嗜好・好み、失言・口癖・独特の口調・話題、身につける物・持ち物、年齢・生年・性別・出身地、職業・家業・環境・役割、その人に対する他人の発言・呼び方という分類である。日本と比べ、中国における日常生活のあだ名に関する研究はかなり少ないが、文学作品で出てきたあだ名について分析する研究がいくつかある。張（2006）では、『水滸伝』の人物のあだ名について分析した。体形の特徴に因むあだ名25個、能力に因むあだ名36個、性格に因むあだ名12個、出身・職業に因むあだ名6個があることを述べた。張（2019）では、汪曾祺の小説に登場した人物のあだ名を容貌、技術能力、性格の3つに分類し、分析した。賈（1989）では、趙樹里が小説に登場する人物にあだ名をつける理由を分析し、名前の振り、出来事、性格の特徴についての総括、類似点の4つに分類した。なお、あだ名について、「人物の性格を際立たせる」、「人物の善し悪しが鮮明」、「ユーモアに富む」「鮮明な印象を伝える」という作用を述べた。

2.2 あだ名・ニックネームに関する心理学研究

あだ名を分類する上で、あだ名をつける心理を分析する研究もなされている。

三好（1999）では、自分が呼ばれているニックネームに対して好きか嫌いかというニックネームの好悪感情やその理由を記述した。

田所・松田（2014）の研究ではニックネームを小学時代、中学時代、高校時代、大学時代に分け、どのようなニックネームがあるのかを質問紙を用いて調査した。次に、それが誰に命名されたのか、呼んでいる人は誰か、付いた理由、由来は何かを分析した。また、ニック

ネームに対する感情がどのようなものか評価してもらい、命名者、呼称者、ニックネームの理由・由来別に分析した。その結果、いずれの年代においてもニックネームの命名者、呼称者は友人が多いこと、名前を振ったニックネームが多いこと、大学時代は先輩が命名者であるニックネームの評価が高いこと等が明らかになった。

淡野・前田（2007）は、大学生 141 名を対象にアンケートを実施した。調査の結果、ニックネームの由来のカテゴリーとして、名前を振る、ちゃん付け、有名人の名前、くん・さん付け、容姿、ニックネームから派生、心理特性、漢字の読みを変える、役職、物、出身地、不明の 12 カテゴリーに分類された。また、感情値からは、名前を振る、ちゃん付け、くん・さん付けが有名人より有意に高く、また、ちゃん付けは容姿より有意に高いと述べた。

大野木（1996）では夏目漱石の小説『坊ちゃん』に登場する人物のあだ名について、そのようなあだ名をつけた理由を分析した。大野木（1997）と大野木（1998）ではあだ名をつけた理由から心理感情を探り始めた。また女子学生と教師を対象として事態調査した。分類した上であだ名の持ち主の受容過程及び自己評価を分析した。

大野木（2018）では、大野木(2015a)に行われた実態調査の結果に基づいて、心理学的な観点から少し新たに検討を加え、あだ名を 6 類に分類することを試みていた。Ⅰ類は人物評的な意味の少ない呼称であり、音の響きの良さも含み、姓（名字）の短縮や変形、名前の短縮や変形、姓と名前の短縮や変形というあだ名である。Ⅱ類は身体的特徴の指摘あるいは身体的特徴の見立てであり、外見にちなむあだ名である。Ⅲ類は、衣服などの装いの特徴の指摘あるいは衣服などの装いの特徴の見立てである。Ⅳ類はⅡ類の変えにくい身体的特徴と区別され、自分の意志や気持ちで外見を変えることが容易な特徴と関係している。Ⅴ類は、行動特徴・エピソードの指摘あるいは行動特徴・エピソードの見立てである。Ⅵ類は性格的特徴の指摘、性格的特徴の見立てである。最後のⅦ類は、上記の複合的なものである。また、身体的欠陥を指摘したりするあだ名の使用は差別的で不適切であると考えている。このようなあだ名や呼称の使用は差別や偏見、あるいはステレオタイプ認知の具体的な心理学的テーマとして位置づけることができると述べている。

中国では心理学に関わるあだ名研究は日本と比べるとかなり少ない上に、その多くは学生が教員にあだ名をつける心理の探究である。学生と教員の友好関係を築くための有効な方法を検討している。楊（2009）では、学生の心理について二つの意見を提出した。一つ目は教員との親密感と信頼感があるため、つけたあだ名。例えば、「老大（ボス）」、「～姐（あねご）」など。もう一つ目は、教員に対して不満な感情を持ち、揶揄するためにつけたあだ

名。一つ目であれば、良好な学生と教員の関係を保つことができる。二つ目であれば、教員は学生の気持ちを重視し、学生とのやり取りを見直す必要があると述べた。賀(2009)では、悪いあだ名をつけた学生に対して、自尊心を傷つけないように「激励する」、「手本を打ち立てる」、「責任意識を養成する」という手段で教育を行う必要があるという観点を述べた。王(2008)では、心理学の原理に基づいて、逆刺激法を採用して学生のあだ名をつける動機を改善できると論じた。あだ名の乱用という問題には効果的な抑止作用を果たした。

2.3 あだ名・ニックネームに関する認知言語学研究

河上(1992)は、76個のニックネームを取り上げ、近接性と類似性、メトニミーとメタファーについて論考した。結果として、メトニミーとメタファーのメカニズムは、特にメトニミーのメカニズムは、ニックネームの如きごく卑近な言語現象にも関与し、その根幹の部分で生産的な機能を果たしていると述べている。このうちメタファーによるものは、客観的に誰がみてもそれと認められる類似性に基づくものである。すなわち、本来記述機能が中心のメタファーも、客観性の高い類似性の場合には指示機能に役立つことがわかる。メタファーとメトニミーが時々複合して作用し、場合によってはそれに短縮して、その他の言葉遊びがからみ、複雑な組み合わせの例も挙げられた。さらに、類似性+近接性の生成過程があるが、逆に近接性+類似性の生成過程は認知的に不自然であるとも論述されている。

緒方(2011)では、比喩表現(メタファー・シミリ・メトニミー・シネドキシ)をカテゴリーの観点から考察した。結論は、比喩とは置き換え表現の一種であり、別々のものを同じとみなして(同一化)、より目立つ方に表現を置き換えたものと見なした(焦点推移)。

緒方(2013)では、カテゴリー分析による命名プロセスについての研究の中、あだ名の例をいくつか取り上げた。あだ名の中で基本パターンと複合パターンがあることを明らかにした。基本パターンではカテゴリーが1つ場合、「縦の焦点推移」のうち「下への焦点推移」のみが存在する。特性とラベルが同一化し、特性に焦点推移し、連動推移によりラベルが特性と同じになり、あだ名となる。複数カテゴリーの場合、「縦の焦点推移」と「横の焦点推移」二つ種類がある。つまり、あだ名の命名プロセスではカテゴリーの数、焦点推移の仕方によりヴァリエーションが生じ、さらには複合的なパターンもある。

周(1989)は中国のあだ名の比喩表現を分析し、以下の三点を提示した。一つ目は、あだ名にはメタファー表現とメトニミー表現両方があること。二つ目は、あだ名とつけられた人の中に類似点があること。これはメタファー表現を持つあだ名であるかどうかの判断基準

でもある。三つ目は、メタファー表現を持つあだ名の作用は人の特徴が際立つこと。

以上、現時点では、あだ名・ニックネームに関する言語学研究は日本側で一定の研究成果が見られるが、中国ではこの方面の研究はまだ本格的にはなされていない。

2.4 あだ名・ニックネームに関する比較研究

清海（2010）では、日本語と英語のニックネームを比較した。英語のニックネームは正式名を短縮したものと接尾辞が付くものの2種類に分かれるようである。-ie/-yの2種類の接尾辞が挙げられているが、日本語の愛称を形成する接辞（接尾辞と接頭辞）は25種類あり、その中で接尾辞の「～ちゃん」が一番多く使われていると述べた。また、「～くん」は主に男性に使用されるが英語の-ieは主に女性に使用されるとも記述した。

今までの先行研究では日本語と英語を対象にした研究があるが、日本語と中国語の比較研究はほとんどない。

2.5 問題点

以上の先行研究から、日中両国ともにあだ名に関する研究が心理学、社会学、認知言語学などの領域からなされていることが分かる。しかし、文化的観点からは日中両国のあだ名についての比較研究はほとんどない。例えば、大野木（2018）の中で、「身体的欠陥を指摘したりするあだ名の使用は差別的で不適切である」と論じられている。日本社会では確かに身体的欠陥に基づいてあだ名を付けることは少ない。しかしながら、中国では身体的欠陥に基づいてあだ名を付けることはよくある。ここに日中両国間において大きな差異が存在している。そのため、あだ名に関する日中比較研究は非常に有意義なことである。

第3章 日中あだ名の定義及び由来

3.1 日本における定義と由来

3.1.1 日本における「あだ名」の定義と由来

日本国語大辞典では、「あだ名」についての解釈が以下のように述べられている。

本名とは別に他人を親しんで、また、あざける気持ちから、その容姿、性質、くせ、挙動などの特徴によって付けた名である。

(『日本国語大辞典 第二版』 2000：299)

「あだ名」は「あざ名」と混じって成立した言葉である。「あだ名」はもともと「徒名」と表記され、古く平安時代から用いられていた。「徒名」は「浮き名」「濡れ衣」「色好みの評判」などを意味していた。

一方、「あざ名」は「字」と表記され、本来は中国で男子が成人後につける別名のことである。この「字」が日本でも用いられるようになると、転じて現在の「あだ名」の意で使われるようになった。もともとあった「徒名(あだ名)」は「字(あざ名)」と音が似ていたため、混同されて現在の「あだ名」になったと考えられている。

また、けなしたり悪く言ったりする意味の「仇名(あだ名)」を語源とする説や、「あだ」は「あだしびと(他人)」のことで、「あだ名」は他人がつけた呼び名の意、とする説などもある。

本論文では、あだ名は本名とは別に、親しみを込めたり、あざけったりして容姿、性質、挙動などの特徴から付けられた呼び方と定義する。

古典原文：

「公世の二位のせうとに、良覚僧正と聞えしは、極て腹あしき人なりけり。坊の傍に、大きな榎の木がありければ、人、「榎木僧正」とぞ言ひける。この名しかるべからずとて、かの木をきられにけり。その根のありければ、「きりくひの僧正」と言ひけり。いよいよ腹立ちて、きりくひを掘り捨てたりければ、その跡大きな堀にてありければ、「堀池僧正」とぞ言ひける。」

(『徒然草』)

現代語訳：

良覚僧正という人はとてもおこりっぽい人なの。住んでいる家の近くに大きな榎があったので、世間の人「榎木僧正」とよんだら、おこって榎を切ってしまった。木の根がのこっていたので、こんどは「きりくいの僧正」とあだ名をつけられると、僧正はますますおこって切り株をほりおこして捨ててしまった。すると、その切り株の穴が大きな堀のようだったので、世間の人「堀池の僧正」とよんだんだって。

(嵐山 2013 : 47)

『徒然草』は、吉田兼好が書いたとされる随筆である。清少納言『枕草子』、鴨長明『方丈記』とならび日本三大随筆の一つと評価されている。吉田兼好を作者とするのが僧・正徹(後述)以来、定説になっている(ただし正徹は100年ほど後の人物であり、吉田兼好が書いたとする明確な証拠はない)。国文学者橋純一(1951)は、鎌倉時代末期、1330年8月から1331年9月頃にまとめられたとし、これが長く有力説とされてきた。本文中に、「あだ名」という言葉はなかったが、内容から見ればあだ名という意識は鎌倉時代末期に既に存在していると思う。

「此十四五年此方、頭に毛のなきを、年寄のきんかつぶり、蠅すべりなど、仇名(あだ名)を云うて、若き人達笑ふ」

(『慶長見聞集』)

「あの子はナ此中江戸から登りなはって、どふすべいかふすべいと、まだ詞が直らぬさかいで、有る名は呼ばいで、江戸兵衛様(さん)と仇名(アダナ)計(ばかり)呼わいな」

(杉本 1987:57 浄瑠璃『神霊矢口渡』の対話部分)

『慶長見聞集』は、江戸時代初期に三浦浄心によって書かれた仮名草子形式の随筆である。歴史をさかのぼると、江戸の文学作品の中で「あだ名」という言葉はもう使われている。「きんかつぶり」、「はへすべり」という言葉は人のあだ名として髪の毛がないという特徴を表す。金柑のように赤く光った頭、ハエがすべってとまれないような頭を喩えている。

『神霊矢口渡』は江戸で作られた文楽作品である。作品の中に、「江戸兵衛様」というあ

だ名が出てくる。江戸時代には「兵衛」のつくあだ名が多い。お酒のみの人を飲兵衛と
いったり、エッチな人を助兵衛（すけべえ）、といったりする。

3.1.2 江戸時代における一般庶民のあだ名

江戸時代に「ぐずろ兵衛」や「土左衛門」、「石部金吉」「虚田万八」などユニークなあだ
名がたくさんあった。

エッチな人のことを「スケベ」と言うが、これは江戸時代にそういった人のことを「助兵
衛」と呼んでいたことから来ている。「助平」と書くこともある。このあだ名の由来には、
さまざまな説がある。実際に「助兵衛」という人物がいたという説もあるが、「女好きな人」
のことを「好き兵衛」と呼ぶようになり、それがなまって「助兵衛」になったという説が一
番有力である。

江戸時代の人、極端に何か执着する人のことを「～兵衛」というように、「兵衛」を
つけて呼ぶことが多かった。例えば、「飲兵衛」はお酒を飲むことが好きな人を指す、「ぐず
ろ兵衛」はぐずぐずしている人を指す。

また、田舎者が「権兵衛」や「八兵衛」と呼ばれることが多かった。百姓に多い名前
だったため百姓の代名詞として使われていた。ドラマ『水戸黄門』の登場人物「うっかり八
兵衛」は、町人の出身であるため名字がなく、軽口を叩いて反省する際に発する口癖が「こ
いつはうっかりだ」なので「うっかり八兵衛」と呼ばれている。

江戸時代には「兵衛」だけではなく「左衛門」のつくあだ名もたくさんある。当時は、ど
ちらも一般の名前に多く使われていたものなので、あだ名にもそのまま使われることが多
かった。

「左衛門」のつくあだ名で誰でも知っているのが、「土左衛門」である。成瀬川土左衛門
は、享保年間に活躍した、陸奥の国（現在の宮城県加美郡加美町あたり）出身の力士である。
山東京伝が著した『近世奇跡考』巻之一には、「案るに江戸の方言に 溺死の者を土左衛門と
云は成瀬川肥大の者ゆゑに水死して渾身暴皮ふとりたるを土左衛門の如しと戯るひしがつ
ひに方言となりしと云」と述べている。水死体の腐敗が進みガスがたまって膨れ上がった姿
が成瀬川に似ていたために「土左衛門」と呼ばれた。

「土左衛門」という呼び名は、水死体だけではなく太った人にもあだ名として用いられて
いた。河竹黙阿弥によって脚本が書かれ、1860（安政7）年に初演された『三人吉三廓初買』
という歌舞伎には、土左衛門伝吉という太った登場人物がでてきている。溺死者のことを

「土左衛門」と言うのは、膨らんだ死体を成瀬川の体型に見立ててのことであるが、伝吉も太っていたために「土左衛門」とあだ名されるようになったのである。

「左衛門」のつく言葉といえば、「鼻左衛門（かかあざえもん）」という呼び方が思い出される。これは、気が強くて男勝りの女房を、戯れて男の名のように名づけたあだ名である。女性に対するあだ名に左衛門をつける呼び方は、気の強い女性に対する皮肉を込めた表現だと考えられる。

江戸時代に使われた渾名は「～兵衛」や「～左衛門」だけではなく、他に面白いあだ名も存在している。江戸時代の『浮世草子』の一つである『世間妾形気（せけんでかけかたぎ）』に、「いまだ四十に足らぬ人物なれども物堅きこと石部金吉にて、忠義専らの武士」とあり、また、歌舞伎の『五大力恋緘一幕』に、「菊野さんは評判の石部金吉、これ迄方々のお客が、色々と言うてぢやけれど、其方は大嫌でござります」とある。堅物で融通が利かない人のことが「石部金吉」と呼ばれている。石と金という二つのかたいものになぞらえて、人の頭の固さを表している。さらに、極端な堅物を指す「石部金吉金兜」という呼び方もある。

3.1.3 幕末期における大名のあだ名

幕末期に至るまで、親しい間柄の大名たちが互いに使ったあだ名（いわゆる雅号や戯号と呼ばれるもの）があった。福井藩の歴史に詳しい福井県立図書館の司書、長野栄俊の取材では、以下のように述べている。

福井藩とその藩主だった松平家（水戸・尾張・紀州の御三家に次ぐ大名）に関する史料「松平文庫」には、当時の手紙の写し 42 冊・2500 通以上が保管されていて、その中で、旧福井藩主の松平春嶽が 1863～67 年に大名たちとやりとりした手紙にあだ名が記載されている。

松平春嶽は、幕末から明治時代初期にかけての大名であり、越前国福井藩 16 代藩主であった。松平春嶽は、自分の鼻が高いことを自虐して「鼻」「鼻高」「鋭鼻」「鼻公」という署名を使い、徳川慶喜や宇和島藩（愛媛県）の伊達宗城からの手紙には、宛名として「鼻」の字が使われている。

また、その伊達宗城は面長だったとされていて、松平春嶽からの手紙には、宛名に「長面」の文字があった。頑固だった徳川慶喜は、自分の署名に「剛」と記し、松平春嶽も徳川慶喜への手紙の宛名に「剛」の字を入れた。

そのようなあだ名は、容姿だけでなく、その時々政治状況にも影響を受けるようである。

松平春嶽は幕末期、敵対していた攘夷派から「朝敵」と批判されていた。松平春嶽はそれを逆手にとり、同じ読みで「暢迪」「長笛」などと署名したこともあった。

長野の調査によれば、松平文庫にある春嶽と慶喜の手紙には、1864年までは頻繁にあだ名が出てきたのに、翌年からは手紙の数が減り、あだ名も出てこなくなった。あの時期は尊王攘夷派「水戸天狗党」の処分をめぐる二人の間の溝が深まり始めたころに重なると言い、政治上の温度差によって亀裂が生じ、あだ名が消えた可能性があると推測された。

(『朝日新聞』南有紀 2018)

3.1.4 現代日本におけるあだ名

現代に至るまで、あだ名を付ける現象はますます広く行き渡っている。田所・松田勇(2014)の調査によると、小学、中学、高校、大学であだ名を持つ人の比率はほぼ70%以上に達している。身体的特徴や性格、しぐさ、能力、好みなどに基づき色々な名付け方がある。例えば、2014年マイナビニュースによる学生時代のあだ名アンケートでは、前歯が大きいので「ビーバー」と呼ばれ、メガネにアインシュタインみたいな髪形なので「ハカセ」と呼ばれ、名字のあべをもじって「べちょ」と呼ばれる。2015年に実施した先生につけたあだ名について「高校生実態把握調査」インターネット調査では、萩原という先生はドラえもんのように大きかったので「はぎえもん」と呼ばれ、音楽の女の先生は、髪は茶髪の巻き髪、服はピンクのかわいい系なので「メルヘン」と呼ばれ、顔が『天空の城ラピュタ』の登場人物に似ているので「ムスカ」と呼ばれる。2016年に実施した「日本全国サラリーマン実態調査」では、一番出社が遅いので「社長」というあだ名で呼ばれ、新成人だが見た目が老けているので「おとうさん」と呼ばれ、趣味のハイキングの「ハイ」とプラモデルの「モ」を取って「ハイモ」と呼ばれる。その他、小説やアニメ作品の中であだ名は大活躍している。例えば、小説『サラバ!』の登場人物「ご神木」や『坊ちゃん』の登場人物「山嵐」「赤シャツ」、アニメ『ちびまる子ちゃん』の登場人物「はまじ」、アニメ『キテレツ大百科』の登場人物「ブタゴリラ」など。あだ名は日常生活では人との距離感を縮め、親密感を増す手段として扱われ、文学作品やアニメでは人物の特徴を極立たせるために使われる。

しかし、あだ名には親しみを込めるだけでなく、あざけりを込めるという一面もある。

近年、あだ名の氾濫とともに、人権問題・いじめ問題との関係が取り沙汰されている。このため、多くの小学校では「あだ名の禁止」や「さん付け」などの丁寧な呼び方を規則に定めることで、いじめを防止しようとする動きがある。

3.2 中国における定義と由来

3.2.1 中国における「外号」の定義と由来

『現代漢語辞典』では、「外号」について以下のように解説している。

「人的本名以外，別人根据他的特征给他另起的名字，大都含有亲昵、憎恶或开玩笑的意味。」

(『現代汉语词典』2005:1398)

(筆者訳：本名とは別に、人の特徴によって、親しみや、憎悪、あざけりの意味を込めた呼び方である。)

あだ名の定義について、日本では、「親しみを込める」「あざける」という2点が提示されているが中国においては「憎悪」という感情も書かれ、3点が提示されている。比較すると、中国の感情的に罵りを込めたあだ名ほどきつい言葉は日本のあだ名にないと思う。魯迅の『華蓋集・補白』では「中国老例，凡要排斥异己的时候，常给对手起一个浑名--或谓之‘绰号’。这也是明清以来讼师的老手段；假如要控告张三李四，倘只说姓名，本很平常，现在却道‘六臂太岁张三’，‘白额虎李四’，则先不问事迹，县官只见绰号，就觉得他们是恶棍了。(筆者訳：中国の慣例では、異端を排斥しようとする時に、相手にあだ名をつける。これは明清以来の訴訟師の常用手段である。相手の名前だけを呼ぶと、何も効果がなく普通なことだ。しかし、「六腕太歳張三」、「白額虎李四」というあだ名を呼ぶと、何も言わなくても、県の官吏はあだ名だけを聞くだけで、相手が悪漢だと思い込む。)」と述べている。したがって、中国ではあだ名を敵につけることがある。呼び方がきつければ、きついほど相手を攻撃する効果が出る。そのため、「憎悪」の感情を込めたあだ名もよく使われる。例えば、騒ぎを起こしけんかを吹きかけたり、女性にいたづらをしたりする人が「臭流氓(ちんぴら)」と呼ばれ、女々しい男性が「人妖(おかま)」と呼ばれ、ふしだらな女性が「破鞋(破れた靴)」と呼ばれている。胡考の小説『上海灘』では、「北方人所谓的破鞋，其实指的是农村的土娼。因为实在穷不过，青楼女子的衣裳是向别人借的，惟有一双鞋子没有办法借，只好仍旧穿着自己的破鞋，

这就是破鞋的来头。(筆者訳：破靴は農村の娼婦のことを指す。遊女屋の女は貧しいので、他人から服を借りる。靴だけは借りられない。仕方がなく自分の破れた靴を履く。これが破靴の由来である。)」と記されている。また、「破靴」についても一つの由来がある。昔、北京の八大胡同で娼婦は、目印として部屋の外に刺繍の靴を掛けていた。時間が経つと、刺繍の靴はボロボロになる。そのため、「破鞋」で娼婦のことを指し、現在ではふしだらな女性のことを表す。

もう一つ『三国志』の例を見る。張飛は呂布を「三姓家奴」というあだ名で大いにののしった。呂布の苗字は呂といい、父は早くに亡くなり、並州の刺史の職にあった丁原の養子となった。その後、恩知らずにも、丁原を裏切って、董卓に降伏し、養子となった。しかし貂蝉のために董卓と反目して、殺した。生まれた父と義父二人、呂布は三姓を経ていたため、「三姓家奴」と呼ばれている。古代は「忠」、「孝」が大事にされており、呂布のような行為は人に軽蔑されている。家奴は奴隷のことを指し、「三姓の家奴」はののしりの言葉である。つまり、現代にしても、昔にしても、罵る言葉のようなあだ名が存在している。

「あだ名」は中国語では、「外号」、「綽号」あるいは「渾名」であり、人物の外貌や性格などに基づいて名付けられた、非正式の名前のことである。「外号」という言葉は民国初年に出現したが、歴史的に見れば唐代の「別号」、宋代の「渾号」、元代の「綽号」という呼び方が変化したものである。

「別」は「ほか、別」という意味で、「号」は名前以外の呼び方という意味である。現代中国語の「外号」と少し異なり、「別号」は自分自身でつけることが多い。例えば、杜牧は自身を「樊川」と呼んでいた。「渾」は「揶揄う」という意味である。そのため、宋代の「渾号」は揶揄うための呼び方で、意味的には「外号」と似かよっている。

あだ名が固有名詞として最初に使われたのは唐代の「別号」であったが、あだ名についての記載を現存の歴史資料で探すと、一番古い書籍は『呂氏春秋』である。『呂氏春秋』とは、中国の戦国時代末期、秦の呂不韋が食客を集めて共同編纂させた書物であり、天文暦学や音楽理論、農学理論など自然科学的な論説が多く見られ、自然科学史においても重要な書物とされている。『呂氏春秋』では、「湯以良車七十乘，必死士六十人，戊子战于郟，遂擒移大牺（成湯は戦車七十台、精鋭兵士六十人を率いて、一戦で「移大犧」を捕まえた。）」と記述されている。ここに記される「移大犧」は、夏桀のことを指している。さらに、「桀多力，能推移大牺，因以为号。」という記述から見れば、巨大な純色の牛が居り、その一頭の巨大な牛が夏桀に一気に倒され、彼は実に勇猛であった。そのことから、「移大犧」と呼ばれるよ

うになったとわかる。

3.2.2 古代中国におけるあだ名

前漢の時、皇帝である漢宣帝は自分の祖母王媪が牛の車に乗って自由に皇居に出入りすることを許可していた。そのため、庶民は王媪を「黄牛媪」というあだ名と呼んでいた。『後漢書』の記述によると、漢の郭況家は非常に裕福で、郭況は「金穴」というあだ名で呼ばれた。馬援將軍は考えが浅くてうぬぼれやのため、「井底之蛙（井底の蛙）」というあだ名をつけられた。

『史記・酷吏列伝』の記述では、百姓は苛酷な鄧都を「蒼鷹（鷹）」と呼び、嚴延年を「屠伯」と呼んでいる。『史記・李將軍列伝』の記述によると、匈奴は戦闘上手な李広をおそれ、「漢之飛將軍」と呼んでいた。

後漢末期の文学者孔融は袁術のことを「塚中枯骨（殻があるが中の木が枯れている）」と呼んでいた。袁術がただの見かけ倒しだと思っていたからである。顔師古の『匡謬正俗』の記述によると、後漢末期の人々は董卓を「董礫」と呼んでいた。なぜなら、董卓が残虐無比の殺人行為を行っていたからである。『魏志』の記述によると、曹操の配下の大將軍許褚多力強いが間抜けなため、「虎痴」と呼ばれている。

魏晉南北朝時代には、文人同士でお互いにかからかうためあだ名がよく使われていた。『世説新語』では、張湛は書齋前に好んで松を植えるので、「屋下陈尸（家の下に死体を埋める）」と呼ばれている。『三国志』の登場人物の例を挙げてみる。諸葛亮は「卧龍（伏龍）」と呼ばれ、龐統は「鳳雛」と呼ばれ、周瑜は「美周郎」と呼ばれ、曹操は「阿瞞」と呼ばれ、呉の礎を築いた君主である孫策は「小霸王」と呼ばれている。

唐宋になると人々が才能を輝かせ、ますます開放的になった文化的雰囲気の中で、あだ名をつけるのが社会的風潮になってきた。宋代において、才能と長所によってあだ名をつける場合、感嘆と感服の気持ちを表す。欧陽修はジョ州に左遷され、「醉翁亭記」を書くことで有名になったので、人々は彼に「醉翁」というあだ名をつけた。宋祁は春の情景を描写し、「绿杨烟外晓寒轻，红杏枝头春意闹」という詩文を書いた。また彼は工部尚書であったので、人々に「紅杏尚書」と呼ばれている。竜図閣直学士である杜鎬は博学だったので、「杜万卷」と呼ばれている。

性格に基づいてあだ名をつけることもある。宋神宗の熙寧年間、宰相王安石は宋王朝の財力の乏しさと軍事力の衰えを憂慮し、「富国強兵」を目標に、改革新法を強力に推進し、宋

王朝を救おうとした。彼は大きな改革を推進し、人の登用においては独断専行し、また「天命不足畏，祖宗不足法，人言不足恤（天命は恐れるに足らず、祖先は法に足らず、人の言葉は思いやりに足りない）」という態度であったため、士大夫たちは彼を「拗相公（頑固な人）」と呼んでいた。

仕事に携わる態度に基づいてあだ名をつけることがある。北宋の官吏である包拯は人として剛正で、公正無私であったため、百姓に愛されて、「閻羅包老（公正で情け容赦がなく公平無私の閻魔）」と呼ばれている。

政治を皮肉るためつけたあだ名も存在している。丁謂は宰相だったが、国の大事がおこるたびに、皇帝にこびへつらい、いつも「鶴が宮闕の上を飛んでいる」と言うので「鶴相」と揶揄された。宋神宗時代の宰相王珪は、皇帝に朝見し「聖旨を取る」と言い、皇帝が決裁した後「聖旨を受け取る」と言い、他の官吏に向かって「聖旨を得る」と伝えるだけで、16年間宰相の職についていたが功績が全然なかったので、「三旨相公」と揶揄された。南宋の末年、賈似道は妹の賈貴妃が寵愛されたため、宰相になった。彼は汚職や収賄を行い、やりたい放題の道楽者であった。金銀財宝だけでなく、コオロギ相撲も大好きだった。誰かが上質なこおろぎを献上すれば、金銀を大いに与え、破格の扱いで重用す。モンゴルの大軍が襄樊を包囲した時も、賈似道は国家の安全を無視し、引き続きコオロギ相撲していた。百姓は彼を皮肉るため「蟋蟀相公（こおろぎ宰相）」というあだ名をつけた。

元明に入ると、あだ名は草莽文化と市井文化の共同表現の一つの特徴となった。明代末期の農民の蜂起の、歴史資料に記されたあだ名を例に挙げると「老回回」、「左金王」、「革里眼」、「活曹操」など百個以上がある。一方、上流社会では、あだ名は誹謗中傷や、派閥闘争の道具であった。例えば東林党の人が去勢党を攻撃するなら、「五虎」、「五彪」、「十犬」、「四十兕」などのあだ名をつける。逆に去勢党も「東林点将録」を作り、『水滸伝』の人物のあだ名を使い、「托塔天王李三才」、「及時雨葉向高」などと記した。

中国ではあだ名は広く使われている。身分に関わらず、百姓から、官吏や宰相、さらには皇帝にまであだ名がある。漢高祖である劉邦は鼻が高かったので「隆準公（高い鼻）」と呼ばれ、蜀漢昭烈帝である劉備は耳が巨大だったので「大耳兕（大きな耳）」と呼ばれ、また唐中宗は気が弱く原則のない妥協主義でまわりの人々をいつも丸め込むので「和事天子（調停する皇帝）」と呼ばれていた。

3.2.3 賛美を持つ美称と罵りを込めたあだ名

『陔余叢考』の記述には、「古人虽无别号，而学行足以服人，人自有加之美号者。」とある。人は学問ができと品行方正であれば、他人が美しい称号を与えてくれるということである。このような外号はいい意味を持ち、賛美の意を表す。

たとえば、漢代の張覇は幼い頃から、「張曾子」と呼ばれた。孔子の弟子である曾子はかなりの孝行息子であったため、後代「曾子」という名前は親孝行の代名詞になった。王充も『論衡』で、「仁如顔淵，孝如曾参（「仁」と言えば、顔淵。「孝行」と言えば、曾参）」と述べた。さらに、鳥類の親孝行の代表者であるカラスも『元連百正詩』で「鳥中之曾参」と呼ばれた。歴史上、張覇のように孝行息子には「曾子」をあだ名とする人が少なくない。詩人に対する外号も後代の人々からの親愛と尊敬の気持ちが込められている。

表1 詩人のあだ名

詩人	あだ名	分析
李白	詩仙	詩文は想像力があり、軽妙な筆致である。
杜甫	詩聖	詩文は政治とつながり、思想が奥深い。
陳子昂	詩骨	詩文が力強く、勢いがあり、雄渾な筆致である。
王維	詩仏	詩文は宗教の理念をこめている。
白居易	詩魔	詩文に夢中になり、魅せられる。

詩文の特徴によって、後代の人に独特な外号を付けられている。外号はすなわち詩人に対する賛美の表現である。詩人の詩を読んだことがない人も、外号を通じて、詩文のイメージが想像できる。

一方、マイナスイメージを持ち、罵りを込めたあだ名も存在している。それは侮辱性があり、憎悪を表すあだ名である。感情的にはあざける気持ちを含むあだ名よりきつい。「脳残（馬鹿者）」「脳缺（馬鹿者）」「废物（くずもの）」「垃圾（ゴミ）」「賤人（クソ野郎）」「猪頭

(豚の頭)」「娘炮(言葉遣いや動作、表情が女性のようにぶりっ子をする男子)」「奇葩(変な人)」「走狗(悪人の手先)」「不要脸(ずうずうしい人)」「婊子(淫らな女)」などはあだ名としてよく使われている。

その他、文学作品にもたくさんある。

「苟潤田——外号“哈叭狗”，偽警察所長。侯鶴宜——外号“侯扒皮”，偽軍小隊長。」

(『敵后武工隊』馮志)

(筆者訳：苟潤田は偽警察所長であり、あだ名が哈叭狗「哈叭狗(ペコペコする犬という意味。ペコペコする人を指す。)」である。侯鶴宜は偽軍小隊長であり、外号が「侯扒皮(皮をはぐという意味。財力と権力を笠に横暴な振る舞いで貧しい農民を搾取した者を指す)」である。)

「这就是肖家镇上有名的无赖杨百顺，仗着他老婆“红牡丹”和苏金荣睡觉，便狐假虎威，成了肖家镇上一霸，老百姓给他起了个外号叫做“杨大王八”。」

(『平原枪声』李晓明)

(筆者訳：この人は肖家鎮の有名なごろつきである楊百順だ。彼の妻「紅牡丹」は蘇金榮の愛人である。そのため、彼は虎の威を借る狐のように肖家鎮で覇を唱えている。民衆に「楊大王八(カメという意味で、妻を寝取られた男を指す。)」と呼ばれている。)

「前些年，喜爱扭秧歌者被视为神经病，尤其是那些扮上相、穿上行头的老人，被称为“老妖精”或“不正经”等」

(1994年新聞精選)

(筆者訳：昔、田植え踊りが好きな人は神経病と見なされていた。特にそのような格好をしている年寄りには、「老妖精(化け物)」や「不正经(遊び人)」などと呼ばれている。)

「要说那老东西真恨人，咬他两口肉也解不了气。」

(『烈火金剛』劉流)

(筆者訳：あやつは本当に忌まわしい。彼の肉を食べても気が済まない。)

3.2.4 現代中国におけるあだ名

現代に至るまで、あだ名を付けるのは普通なことと考えられている。友達同士や生徒同士、さらにアイドルとファンの関係など、会社や学校、さらに一般社会で、あだ名を付けるのは珍しいことではない。教師や上司さえ学生や部下に名付けられる。例えば、太った化学の先生に「化肥」とつける。「化」は化学という意味であり、「肥」は太いという意味である。合わせると、別の意味を持つ「化肥(肥料)」というあだ名になる。首が短い上司に「藏颈鹿」とつけることがある。中国ではキリンは「长颈鹿」という。「藏(cang)」は「长(chang)」と発音が似ていて、本義として「隠れる」という意味がある。そのため、「藏颈鹿」は「首が隠れる」という意味になり、首が短い人を表すことができる。

その他、痩せている人を「竹竿(竹ぎょ)」「瘦猴(痩せている猿)」と呼び、太っている人を「肥猪(デブ豚)」「肥佬(デブ)」と呼び、口が大きい人を「大嘴(大きな口)」と呼び、ニキビが多い人を「癩蛤蟆(ヒキガエル)」と呼び、髪が薄い人を「秃驴(禿げのロバ)」と呼ぶこともある。

以上のように人の欠点や弱点を揶揄う言葉以外に、憎悪の感情を込めて「哈叭狗(ペコペコする犬という意味。ペコペコする人を指す。)',「老妖精(化け物)」、「人妖(おかま)」というような罵る言葉あだ名も存在している。

いじめ問題に関しては、日本と比べ、そこまで深刻になっていないが、中国でも「嫌なあだ名を付けられる子供が精神的に傷つくため、あだ名を一切禁止しよう」という訴えが数年前と比べ増えてきた。中国でのあだ名はののしりの言葉と同じように扱われる一面がある。あだ名の悪い面について言えば、日本語のあだ名はあざけるために使用されるが、中国語のあだ名はあざけるだけでなく、さらにののしるのためにも使用される。そう考えると、中国においてより大きな社会問題になるはずだろう。しかし、現実では日本の方がより深刻になっている。この問題については第6章で詳しく説明したいと思う。

第4章 あだ名のつけ方

あだ名（外号）のつけ方は色々ある。代表的な研究として、森岡・山口（1985）では日本人のあだ名（外号）を大きく「本名もじり名系統のあだ名」、「特徴名系統のあだ名」、「本名特徴融合名系統のあだ名」という三つの系統に分けている。本論文では森岡・山口（1985）の分類方法を参考し、日中両国のあだ名（外号）の実例を考察する上で、人の特徴や関連することを本位として分類方法を再考した。あだ名（外号）を以下の13種に分類した。

本章ではあだ名を13種に分類したが、日常生活では一つのあだ名はいくつかの種類の特徴を兼ね備えている可能性がある。例えば、中国語のあだ名「林妹妹」であれば、外見が白くて清らかなのか、性格が弱いのか、しぐさが上品なのか、あだ名がつけられた要因は一種に限らない。そのため、「林妹妹」と呼ばれることは、一つの原因によるものだけでなく、外見、動作、表情の多重要素の結果から成り立っていると考えている。

あだ名には個人的なものと、同じ特徴を持つ人達全体を表すための呼称となることもある。例えば、あだ名の「ちび」であれば、小柄な人はみな「ちび」と呼ぶことができ、個人にあだ名としても使える。このようなあだ名には、日本語の「デブ」や「泣き虫」など、中国語の「胖子（デブ）」や「大傻瓜（背が高くて間抜けな人）」などたくさん存在する。本論文では、同じ特徴を持つ人達全体を表すための呼称を議論の範囲として扱わない。日本語と中国語の辞書におけるあだ名の定義により、本名とは別に個人的な特徴や関連することによって付けられたあだ名はすべて本論文の研究範囲とみなす。

4.1 見た目からつけられたあだ名

人と接する時には、見た目の特徴が一番認識される。そのため、初めて会った相手に対する印象は一般的には、見た目から生じるのである。つまり、人にあだ名をつける際には、見た目の特徴が最重要だということである。以下いくつかの具体的な例を通して、見た目の特徴からあだ名の付け方を分析する。

髪型に基づいてあだ名をつけることはよくあることだ。日本において、天然パーマの人にあだ名をつけるなら、「焼きそば」、「大仏」である。焼きそばは日本の家庭や飲食店でよく食べられる料理である。焼きそば用の麺はソバが原料の日本蕎麦ではなく、小麦粉が原料の炒め調理用の麺である。炒め調理のため、「焼そば」の麺は弾力があり、やや波形である。炒めると、麺が膨らみ、そこへこげ茶色の焼きそばソースをかけると、形から色まで、まさ

に人の癖毛のようである。日本語の「焼きそば」を中国語で表すと、「炒面（焼きそば）」である。しかし、中国では「炒面」を作る材料は焼きそばのような弾力がある波形の麺ではなく、ストレートな茹で麺であるので、弾力や膨らみが少ない。さらに、できあがったものの色はソースのような濃い色ではなく、色が薄い。そのため、天然パーマと焼きそばのイメージにはあまり繋がりが無いと思う。しかし、「方便面（インスタントラーメン）」、「泡面（インスタントラーメン）」というあだ名をつけることがある。中国では「炒面」と比べて、「方便面」「泡面」の麺は典型的な波形だと思われていて、天然パーマの人の髪と同じく膨らむという印象があり、あだ名としてよく使われている。また「泡面头（インスタントラーメンのような髪型）」という言葉も存在している。日中両国は共に天然パーマの人にあだ名をつけるが、イメージを選択する時に料理の外形特徴及び飲食習慣に基づき、日本では「焼きそば」と呼ばれ、中国では「方便面」「泡面」と呼ばれる。なお、日本において「焼きそば」というあだ名をつける理由としては、濃い焼きそばソースが色的にも人の髪の色に近いという理由も考えられるかもしれない。日本では天然パーマの人は「大仏」というあだ名をつけられることもある。大仏の螺髪は天然パーマのような髪型だと思う人は少なくない。実は日本人に、パンチパーマという髪型が流行っていたことがある。1970年代に北九州市在住の理容師・永沼重己が黒人の髪形をヒントにして考案して創造したのである。よくパンチパーマにした人を「大仏ヘアー」などと言って茶化す。そのため、日本人の認識ではパーマの髪型が大仏のイメージと繋がっている。一方、中国において、大仏のイメージと関連づける考えはほとんどないと思う。イメージに基づいてあだ名をつけるなら、中国では天然パーマの人は「獅子（ライオン）」と呼ばれることがある。癖毛という特徴よりも、ライオンのようなふわとした髪という特徴が取り上げられている。同じ天然パーマの人にあだ名をつけるが、日本ではストレートではなく波形という形が重視され、中国では整髪ではなくふわとしたというイメージに注目する。

日本においては、体が大きい役に立たない人に「ウドの大木」というあだ名をつけられることがある。ウドは植物の一つであり、ウドの茎は、地上に出る前の若芽の時は食用とされるが大きくなると食用にならず、高さ2メートルほどにもなるが柔らかくて弱いので、建築用材などにも使えないことから、ウドを人間に喩え、役立たずな者を指すようになった。「ウドの大木」はその大きな形と用途の視点から、役に立たない人のことを喩えている。中国では、植物の形に基づいて人にあだ名をつけることは少ない。主に木の材質及び用途の特徴に基づいて人にあだ名をつける。「ウドの大木」というあだ名をつけられた人は中国で「傻大

个（背が高くて愚かな人）」と呼ばれる。木というイメージから、何があっても無表情で、愚鈍で反応の鈍い人が連想され、また「木头人（木のような人）」というあだ名もある。木材には生命力がなく、動けないという特徴があり、人の愚鈍さに喩えている。人の愚鈍さを木のイメージに喩えることは日本ではほとんどない。日本での「ウドの大木」は使い道がないため、役に立たないことを表し、木の用途から喩えられている。中国にも「朽木（枯れてくさった木）」という言葉がある。腐った木には彫刻できないことから役に立たない無用人を表している。

日本では「大根足」「大根」は太い足をした女のあだ名としてよく使われている。大根は一般的に太いため、人の足を大根に喩える。本来は女性の白くて細いきれいな足を褒める言葉であった。その由来は『古事記』や『日本書紀』であり、女性の白くて細い腕枕を「大根」という言葉を使って表現されている。仁徳天皇の和歌では、大根を白腕（しろただむき）、つまり美しい白い腕に喩えられている。平安時代に、「大根足」が、美脚を意味する理由としては、当時の大根は、現在のように太くはなかったからである。しかし、江戸時代以降になると、大根の改良が進み、太く大きな大根が作られるようになり、大根足が現在のように太い足を指す言葉になったのである。その後現在に至るまで、足が太い女性は「大根足」や「大根」と呼ばれ、あまりいいイメージがない。中国でも足の太い女性に「萝卜腿（大根足）」というあだ名をつけることが多い。日中両国とも大根は一般的な野菜として日常生活でよく食べられるため、あだ名をつける際に、喩えの対象としてよく用いられる。中国において、身体部位の一つである足を大根に喩えると、太い足をしている人を表しているが、体全体を大根に喩えると、栄養が足りなくて体が小さく痩せている人を表し、そのような人は「萝卜（大根）」と呼ばれる。頭が大きくて、体が小さいので、全体的に見れば上が太く、下が細く見える。その姿が、大根の形と似かよっているからである。大根のイメージに因むあだ名は他に、人の見た目を表すだけでなく、性格を表すこともある。「花心大萝卜」というあだ名は浮気性、浮気心のある人の事を表す。特に男性の事を指す。大根は古くなると、もとは水分が豊富な大根の中が空洞になり、繊維だけが残って、花のように見える。恋人同士が長く付き合った後、本来あった愛に溢れた感情がなくなってしまったことを喩えている。そこから、相手に対する感情が一途ではなくなり、浮気をする人を「花心大萝卜」と言う。

肌が黒い人につけるあだ名には、黒に因んだあだ名が色々ある。中国語で「黒子（黒ちゃん）」「小黑（黒ちゃん）」があり、日本語では「黒ちゃん」などがある。老舎の『我这一辈子』で以下の描写がある。「街口上，人们都管他叫作黑子，我也就还这么叫他吧。不便

道出他的真名实姓来，虽然他是我的仇人。“黑子”，由于他的脸不白；不但不白，而且黑得特别，所以才有这个外号。他的脸真象个早年间人们揉的铁球，黑，可是非常的亮；黑，可是光润；黑，可是油光水滑的可爱。（筆者訳：街角では彼のことを「黒子（黒ちゃん）」と呼んでいる。私もそう呼ぶ。彼は私の敵であるが、本当の名前はここでは言わないでおく。黒子は顔が白くないだけでなく、黒さが特別である。そのため、このあだ名で呼ばれる。彼の顔は本当に長年皆に撫でられた鉄のボールのようである。黒いがとても明るい。黒いがつやつやしている。黒いがみずみずしく可愛らしい。）。日本語で同じく「黒ちゃん」と呼ばれている人の例を挙げてみる。西澤實の『ラジオドラマの黄金時代』で「飯田次男スポーツアナ。職掌柄アウトドアが多いから、顔は真っ黒け。だから親しみを込めた綽名が「黒ちゃん」。」と記されている。肌が黒いため、シンプルに黒に因んだあだ名をつけられている。黒という特徴に基づいて、黒いものや肌の黒い有名な人に喩えることもできる。シンプルな「黒」という字を使ってつけられたあだ名より、黒から連想されるものや人に喩えてつけられるあだ名はイメージ的にはさらに鮮やかで生き生きしている。そして、中国では肌の黒い人に「煤球（練炭）」「蜂窝煤（練炭）」というあだ名をつけることもある。炭のイメージが連想されるのは中国での石炭の需給量の多さや中国人の生活習慣と関係があると思う。森永（2018）では「全世界の石炭需要に占める中国の割合は、1990年に48億トンのうち中国が約10億トンで2割強であったが、2013年には世界79億トンのうち中国が43億トンで5割を超えた。この間の世界の石炭消費量の増加は、ほぼ全て中国によるものであった。」と記述されている。2015年の全世界の石炭生産量78.6億トンの中で中国は48%を占めている。中国は世界最大の石炭生産国かつ消費国だと言える。練炭は、石炭を粉末にして作ったものであり、中国語では「煤球」「蜂窝煤」という。昔から、一般家庭や職場での暖房用、厨房用の燃料として身近に存在し、人々に親しまれているものである。現在では、石炭は大気汚染の元凶として使用禁止の対象にすらなっており、中国政府は、この黒い塊に代わって無色の気体、天然ガスをエネルギー源として普及させている。しかし、石炭は確かに国の発展や中国人の生活の中で重要な役割を占めている。そのため、石炭のイメージに基づき人にあだ名をつけるのはよくあることである。中国と比べ、日本人は石炭に対する親近感がそんなに高くない。日本人にとって、黒と言えば、肌の黒いブラジル人やアフリカ人への連想の方が強い。そして、肌の黒い人に、「ブラジル人」や「アフリカ人」というあだ名をよくつける。

肌が白い人にあだ名をつける時、日本語では「白玉」や「おもち」とつけることが多い。中国では「馒头（饅頭）」とつける。この違いは日中両国の食習慣と繋がっていると思う。

日本の「白玉」とは白玉粉と呼ばれる米の粉で作った団子であり、「白玉団子」とも言う。ぜんざいや白玉あんみつを食べたことがない日本人はいないと思う。さらに、和風のスイーツにもよく使われる。和風のクリームパフェや、抹茶ぜんざいかき氷の上にアイスと一緒にのっている白い団子も白玉である。肌の白い人のもう一つあだ名「おもち」はお餅のイメージに基づいてつけられたものである。おもちも日本人の生活に欠かせられないものである。日本の正月では必ずお餅を食べる。お正月にお餅を食べるようになったのは、平安時代のころからで、宮中で行われた「歯固めの儀」という行事でお餅を食べたとされている。一年の始まりの日にかたい物を食べることで、歯の根をしっかりと固めて健康と長寿を願うという行事である。お正月に神様にお供えする鏡餅もお餅である。鏡餅のほかに、人が食べるための餅もあり、それで雑煮を作る。そのため、日本人の食習慣に関わる白玉やお餅をあだ名をつける際に喩えの対象として使うのは珍しくない。同じ肌の白い人が中国では「馒头（饅頭）」というあだ名で呼ばれる。日本で饅頭と言えば、お菓子を想像するが、中国では主食である。小麦粉に酵母を加えて発酵させた後、蒸して作る中国の蒸しパンである。真ん丸で真っ白な見た目が特徴である。中国では饅頭はご飯、麺類と並び、三大主食の一つである。特に、北の方では饅頭はとても人気で、毎食でも食べられるくらい好まれている。このような中国人の食文化から、「饅頭」というあだ名はよくつけられている。饅頭のふわふわとした触り心地から、体が柔らかい人がそう呼ばれることもある。この場合、日本の白玉では白いという特徴があるが、触り心地は物足りないので、ほかの食べ物「大福」のイメージの方が近くなる。そのため、日本においては、体が柔らかい人は「大福」と呼ばれることが多い。

この他、見た目に因むあだ名はたくさんある。例えば、日本では、痩せている人を「骨」「もやし」と呼び、体格が大きな人を「ゴリラ」「巨人」と呼び、目が大きな人を「出目金」と呼び、髪が薄い人を「河童」と呼び、口が大きな人を「河馬」と呼び、毛が深い人を「くま」と呼び、顔が長い人を「面長」と呼び、顔が猿と似ている人を「猿」と呼び、背が低い人を「ちび」と呼ぶことがある。中国では、ガニ股がある人を「罗圈腿」と呼び、口が歪んでいる人を「歪嘴」と呼び、お腹が出ている人を「大肚子」と呼び、びっこをひいて歩く人を「瘸腿」と呼び、片方の目がつぶれている人を「独眼龍」と呼び、足が短い人を「短腿」と呼び、坊主頭の人を「光頭」と呼び、目が小さい人を「王八眼（カメの目）」と呼び、目が大きな人を「青蛙（カエル）」と呼ぶことがある。

見た目が一番直接的な感覚であるため、インパクトが強く、あだ名をつけやすい。そのた

め、いろいろなあだ名の中で、見た目に因むあだ名の数は一番多い。本節では、いくつか代表的な例を挙げて、日中文化の角度から、詳しく分析していく。

4.1.1 日本語の「キノコ」「ヘルメット」や中国語の「蘑菇」「锅盖」など

表 2

言語	あだ名
日本語	「キノコ」「ヘルメット」
中国語	「蘑菇 (キノコ)」「锅盖 (鍋蓋)」「瓢虫 (テントウムシ)」

見た目の代表として、髪に注目してつけたあだ名は多くある。近年、マッシュルームカットという髪型をする人が少なくない。英語から音訳された「マッシュルーム」はそもそもキノコという意味である。この髪型がマッシュルームカットと呼ばれる理由は仕上がった形がキノコのようにになっているからである。そして、中国にも同じ髪型があり、「蘑菇头 (マッシュルームカット/キノコの頭)」という。中国では、このような髪型をした人のあだ名をそのまま「蘑菇 (キノコ)」とつけることが珍しくない。日本でもこのような髪型をした人をキノコ頭というあだ名で呼ぶことがある。見た目に因んで名づけられたあだ名だと言える。

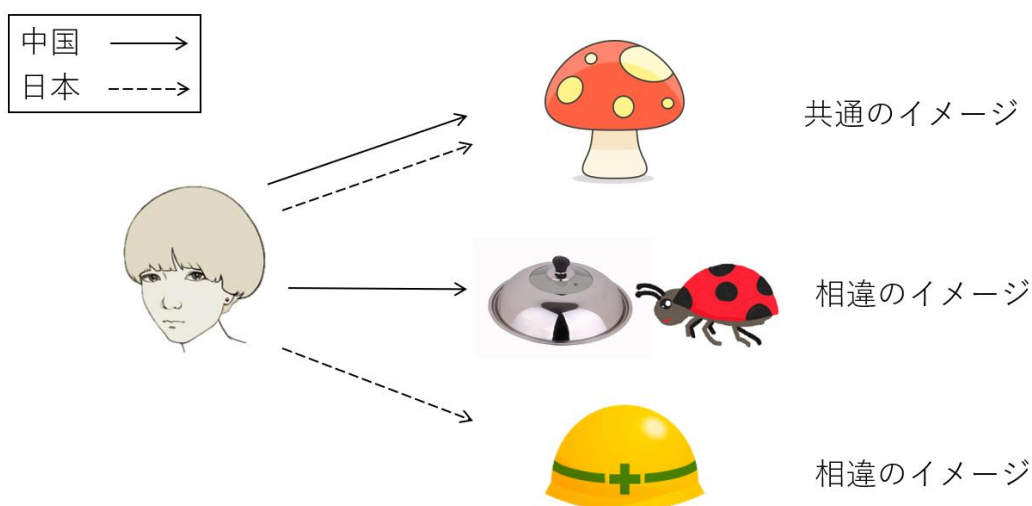


図 1

日中両国でマッシュルームカットをした人に同じキノコ頭とあだ名を付けるのはある意味両国が同一のイメージを認知するからである。しかし、日本では、このような髪型をした人のあだ名をヘルメットとつけることも珍しくない。具体的な特徴を捨象して抽象化した髪型のイメージはヘルメットのイメージと同じと考えられる。そのため、「ヘルメット」というあだ名がつけられている。一方、中国ではこのような髪型をした人のあだ名を「锅盖(なべのふた)」、「瓢虫(テントウムシ)」とつけることもある。これらは日中両国の文化に基づいてマッシュルームカットをした人に付けられたあだ名である。

① 日本語の「ヘルメット」と中国語の「蘑菇(キノコ)」の比較

マッシュルームカットをした人のあだ名の中で、日本語の「ヘルメット」と中国語の「蘑菇(キノコ)」を比べると、具象度合いの差が存在している。具象度合いとは、イメージスキーマに基づき現実にあるもののイメージを再構築する過程で出てきたものである。具象的なイメージがイメージスキーマと近ければ近いほど具象度合いが高いと言える。

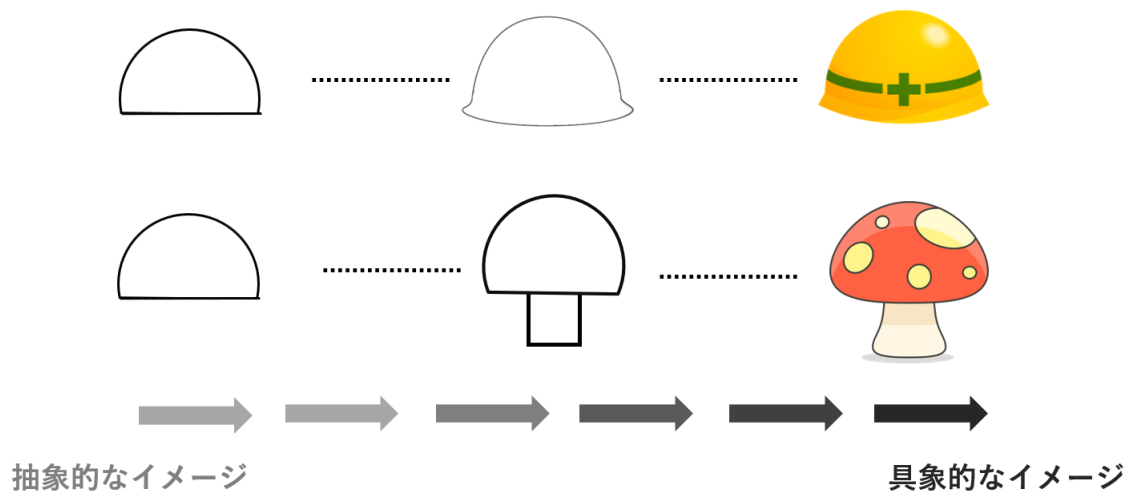


図2 具象の過程

中国の場合、同じような髪型をした人は「蘑菇(キノコ)」と名づけられる。キノコのイメージを図示化すると、上部の傘のような部分と下部にある円筒状の柄の部分から構成される。ただ、あだ名として使う時には、元々のキノコの二つの部分から下の部分を除いて、上の部分だけが残されてイメージ化される。

同じような髪型をした人にあだ名をつける時、日本語で「ヘルメット」と付けることが多い。衝撃を防ぐ安全用品であるヘルメットのイメージに基づいて名付けられたのである。中国語の「蘑菇(キノコ)」と比べ、捨象され残った図示化の部分は実物により似かよって

る。言い換えれば、あだ名のつけ方において、日本語の「ヘルメット」は中国語の「蘑菇（キノコ）」に比べ具象性はより高い。

② 日本語の「キノコ頭」と中国語の「锅盖」の比較

厳密に言えば、このような髪型をした人のあだ名の中で、メタファー対象のキノコと鍋蓋を比べるとやや違いがある。イメージスキーマでは同じように上部の円滑な曲線と下部の直線で組み立てられた形が描かれているが、曲線の曲がり具合について微妙な差があると思う。「キノコ頭」と比べ「锅盖」の方が曲線の曲がり具合が浅く、全体的に平らな形になっている。



キノコのイメージスキーマ



锅盖のイメージスキーマ

図3 「キノコ」と「锅盖」のイメージスキーマ

曲がり具合には差があるが、同様に上が丸くて下がきれいに整っている形であり、あだ名として使う場合、人に与える全体的な印象はほぼ同じだと思う。

同じ髪型をした人に、あだ名を付ける際、異なるあだ名をつける理由の主な原因は日中両国の異なる文化だと思う。

マッシュルームカットの人にあだ名を付けるという例では、同じ髪型を表す際に、日中両国では異なるあだ名を付けている。日本ではこの髪型をした人に「ヘルメット」というあだ名を付けることが多い。しかし、中国ではそのあだ名を付けることはあまりないと思う。

その理由は、日本ではヘルメットの着用頻度が非常に高いからだと思う。ヘルメットとは落下物などから作業者の頭部を保護するために着用するものであり、工事現場でよく使われている。日本人は日常生活においても、ヘルメットがよく使われている。街中でヘルメットをかぶってバイクに乗る姿がすぐに思い浮かぶ。バイクに乗車する際のヘルメット着用義務は1965年から始まった。1965年に高速道路でのヘルメット着用努力義務（罰則なし）が規定され、1972年には最高速度規制が40kmを超える道路でのヘルメット着用が義務化（罰則なし）。1986年にはついに原付も含めた全てのバイク、全ての道路でヘルメット着用が義務化された。ヘルメット着用の義務化の背景には、60～70年代にかけてバイク人口が増えたこと、そして、それに伴って若年層のライダーによる事故が増加したことが背景にあ

るとされている。

警察庁のホームページにも「スポーツの時だけではなく、買物や通勤・通学等、日常生活で自転車に乗るときもヘルメットを着用して、頭部を保護しましょう。」という交通安全教育の呼びかけがある。児童に限らず高齢者向けの自転車用ヘルメットも開発されてきた。工事現場から普段の生活まで、子供から高齢者まで幅広く利用されていて、ヘルメットが日本人の生活とどれほど親密なつながりがあるのかが見てとれる。つまり、ヘルメットの着用は人々の生活の隅々にまで浸透していると言える。

一方、中国では、工事現場ではよく使われると思うが、日常生活の中ではなかなか見られないと思う。以前バイクが盛んだった時代に稀にヘルメットを着用する人を見たことがあるが、近年バイクの都市内への進入禁止命令が出ると徐々にヘルメットはバイクと一緒に皆の生活から消えていった。そのため、マッシュルームカットの髪型をした人は「安全帽(ヘルメット)」より「蘑菇(キノコ)」と呼ばれることが多い。マッシュルームカットの流行りとともに、「锅盖」というあだ名も増えてきた。「蘑菇」と付けることはマッシュルームカット自体の意味と関係がある可能性があるが、「锅盖」を付けるのは中国人の食生活に繋がっている気がする。中国は食の大国であると全世界の人々に知られている。特に、中華鍋はとて有名な調理器具であり、中華料理を言えば、すぐ頭に浮かぶほど有名である。もちろん锅盖も中華鍋と一緒にでてくる物である。したがって、「脑袋上像扣个锅。(頭に中華鍋をかぶせているようだ)」「脑袋上像顶个锅盖。(頭にお鍋のふたをかぶせているようだ)」というような言葉がよく耳に入る。これらの言葉は主に整った髪の毛が頭にかぶさっている様子を表す。そのため、「锅盖」というあだ名をつけるのは驚くことではない。

孫文が提唱した「民生主義」では「大家都能各尽各的义务，大家自然可以得衣食住行的四种需要。(みんなはそれぞれの義務を尽すと、衣食住行というところで満足できる。)」と述べている。この中で言及している「衣(服を着ることができる)」「食(食べ物がある)」「住(住むところがある)」「行(交通)」は日常生活で必要なものである。「食」はこの中の一つであり、人間にとっての重要性が見てとれる。食にとって、調理道具は非常に重要な物である。宋の時代から、鉄が大量に生産され、鉄鍋が料理でよく使われてきた。現在に至るまで鉄鍋は調理器具の代表的なものとして世界の人々に知られている。鉄鍋とともに、鍋蓋も調理器具の中の重要な存在である。

4.1.2 日本語の「電信柱」「ごぼう」や中国語の「电线杆子」「竹竿」など

表 3

言語	あだ名
日本語	「電信柱」「もやし」「マッチ棒」「ごぼう」
中国語	「电线杆子（電信柱）」「豆芽（もやし）」「火柴（マッチ棒）」 「竹竿（竹ざお）」「面条（麺類）」

髪型の外に人の特徴の一つである体形によってあだ名を付けることも珍しくない。痩せているや太っているなどの理由で名付けられる。日本と中国は同じアジア圏に属するので、痩せていると太っていることに対する認識があまり変わらないと思う。そして、痩せているや太っているという特徴に基づいて形成されるイメージもほぼ同じと思う。例えば、痩せて細い人から、「電信柱」「もやし」「マッチ棒」のイメージはよく連想される。以上の三つ以外に、中国での細い物の代表である「竹竿（竹ざお）」「面条（麺類）」や日本の「ごぼう」というあだ名もよく耳に入る。したがって、「電信柱」「もやし」「マッチ棒」この三つは共通のイメージであり、「竹竿（竹ざお）」「面条（麺類）」「ごぼう」は固有のイメージであると考えられる。

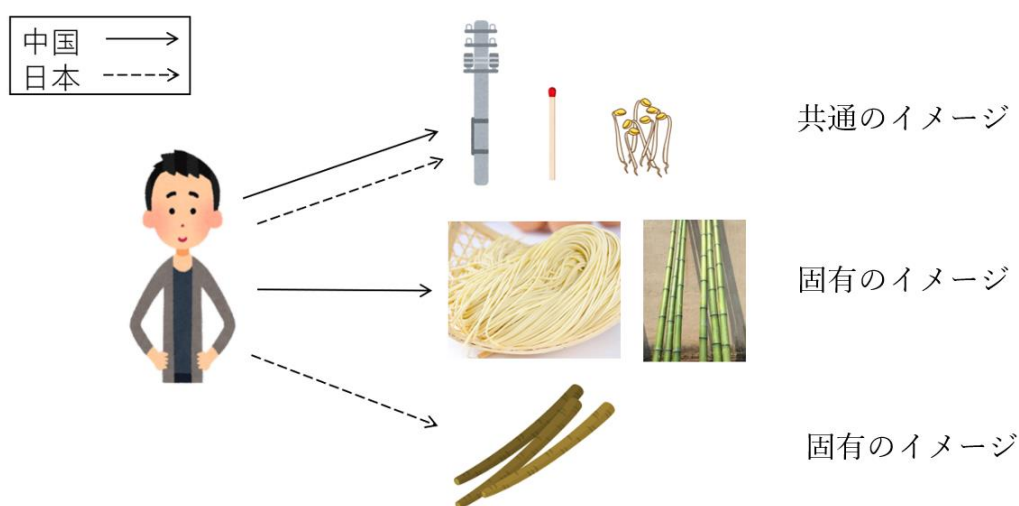


図 4

① 中国語の「电线杆子（電信柱）」と日本語の「電信柱」の比較

「电线杆子」というあだ名を例として見ると、まず一般的な認識では太っている人は「電

线杆子」のイメージと繋がらないと思う。また、「电线杆子」と呼ばれる人は痩せて細い特徴があるが、現実にある電柱のイメージに基づいて、身長が低い人だとは思われまいだろう。つまり、電信柱には、「細い」と「高い」という二つの特徴が認識できる。中国文学作品の中で、痩せて細い人について以下のような描写の文がある。

「秦力和曹胖子正好相反,此人个子达到一米九,却很瘦,远远看去就像是电线杆子一样,人送外号秦杆子。」

(『创世枪神纪』 黑夜猫)

(筆者訳: 秦は曹とちょうど正反対だ。秦は身長が 190 センチだが痩せている。遠くから見たら電信柱のようだ。だから「杆子」というあだ名を付けられた。)

あだ名をつける時に「电线杆子」は「杆子」と省略したが、文脈から「一米九 (190 センチ)」と「很瘦 (痩せている)」という言葉から見れば、意味的には変わらず、「高い」と「細い」という二つの特徴が取り入れられている。ちなみに、中国語で「杆子 (棒)」もよく人のあだ名として使い、意味として「电线杆子」と同じく、痩せている人のことを指す。「杆子 (棒)」あるいは「杆 (棒)」が付く中国語は、ほぼ長くて細い形のものである。例えば、「电线杆子 (電信柱)」「旗杆 (旗ざお)」「高尔夫球杆 (ゴルフクラブ)」など。実際に「杆子」と呼ばれるもののイメージに基づいて、背が高く痩せて細い人にそういうあだ名をつけるのは納得できると言える。

一方、日本語における「柱」が付く日本語は「門柱」「石柱」「鉄柱」などである。意味として、直立して物を支える材であり、梁を支えるイメージがある。したがって、日本語では「柱」が付く言葉はほぼ高い物を指す。さらに、日本語の「大黒柱」という言葉もある。元々日本民家の中央部にあって、家を支えている最も太い柱という意味であるが、一家の中心となる人のことも指している。つまり日本語の「柱」が付くものには支えるという役割があるため、「高い」や「丈夫」などのイメージがある。だから、日本語の「柱」は細いというイメージと繋がらないと思う。「電信柱」は人のあだ名として使う時に高いという特徴を強調するだろう。『精選版 日本国語大辞典』を引くと、「電信柱」のところいくつかの解釈がある。この中に、「やせて背の高い人をからかい半分にいう。」という説明がある。辞書の記述から見ると、日本語の「電信柱」というあだ名には人の身長の高さを強調する傾向があることが明らかである。

同じ電信柱というものに対して、中国語と日本語は異なる言葉で表現する。中国語は「杆」で表し、日本語では「柱」で表現する。実際の「杆」と「柱」との使い方はそれぞれの社会の影響を受けている。中国では細長いものは「杆」がつく呼び方になる。一方、日本では高いものが「柱」のつく呼び方になる。これは言葉に与えられたイメージの影響である。電信柱は中国語で「电线杆子」と言い、日本語で「電信柱」と言う。異なる言葉遣いの影響で、あだ名を呼ばれる人のイメージが違うことになる。これは言葉がイメージに影響を与えたのである。

② 日本語の「電信柱」「マッチ棒」「もやし」と中国語の「电线杆子」「火柴」「豆芽」の比較

「電信柱」と「マッチ棒」と比較すると、どちらも痩せて細い人を表すが、高さの点でかなり違いがある。いくら痩せていても背が低い人はあまり「電信柱」と呼ばないと思う。痩せて細いが身長も低い人に対してはよりふさわしいあだ名がある。痩せて細い人は「痩せている」という基本的な特徴があるが、この特徴にさらに「身長が低い」という条件を加えるならば、「電信柱」と呼ぶより「マッチ棒」と呼ぶほうがもっとふさわしいと思う。その他、日本では、痩せて細い人にも「もやし」というあだ名をつけることがある。

中国の場合も、痩せて細い人のあだ名を「豆芽（もやし）」とつけることがある。しかし、もやしには痩せて細いという特徴だけではなく、色が黄色いという特徴もあり、あだ名として使う時には、体が弱いというイメージも含まれる。

中国では、伝統的な治療方法の漢方が一番人気である。栄養不足の人は顔の色が黄色くなり、体も一般人より虚弱である。もやしの色と形を観察すると、鮮やかな色ではなく、形もまっすぐではない。さらに、時間を置くと酸化し、水分が飛ばされ、みずみずしい様子も見られなくなる。全体的に元気な様子はなく、しょんぼりとしている姿と見られる。そして、中国の場合、「もやし」と名付けられる人のイメージには痩せて細いという特徴の上に、体が弱いという特徴も取り入れられている。

つまり、「電信柱」「マッチ棒」「もやし」この三つのあだ名は細いという共通する特徴があるため、痩せて細い人に対してつけるのは、もちろん構わない。ただ、これをもとに他の特徴の要素も表す必要がある場合、どれでも使えるわけではない。その場合、「電信柱」「マッチ棒」「もやし」これらのあだ名にはそれぞれ非共通な特徴が見られる。以下の図に示している。

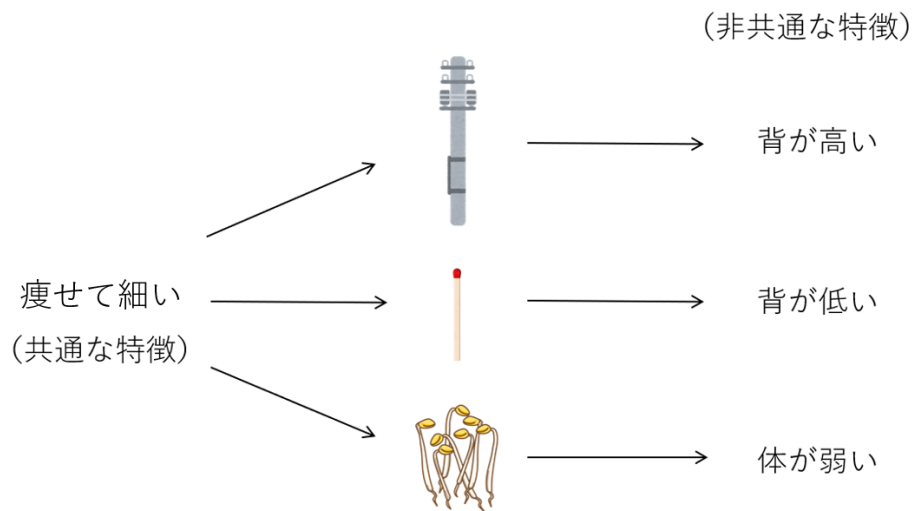


図 5

その他、瘦せて細い人にあだ名を付ける時、日本では「ごぼう」と付けることがある。日本人は「根菜」、つまり根や地下茎を食用とする野菜をたくさん食べてきた。伝来種でありながら、日本でのみゴボウ栽培が発展してきた。

日本でゴボウが栽培されてきた歴史はかなり長い。漆原 (2019) の記述によると、承平年間 (931-938) につくられた辞書『倭名類聚抄』に「牛蒡」が出てくるのは「蔬菜部」の「野菜類」において。この部には「園菜類」もある。ここから、山田 (2000) は、当時のゴボウは畑で栽培されたものでなく、山野で採られた山菜だったと考えられると推測する。京都の東寺に伝えられた古文書『東寺百合文書』には、鎌倉時代中期の 1266 (文永 3) 年における丹波国の大山庄領家の注文事として「牛蒡五十把」また「山牛蒡卅本」の記述がある。ここから「山牛蒡」だけでなく、栽培された「牛蒡」も存在したと見ることができる。

つまり、この二つの文献資料より平安中期から鎌倉中期の間に、ゴボウが栽培されるようになったことが推察できるわけである。

平成 28 年の農林水産省「作物統計」のデータから見ればごぼう生産量の全国計は 137,600t であった。さまざまな根菜の中で「ゴボウ」は日本での特有性が高い食材である。実は、日本以外でゴボウを野菜として食べる国はほとんどない。中国ではおもに漢方薬として使用されており、日常生活でごぼうを食材として使うのはあまり見たことがない。

ゴボウがさまざまな食材として使われているのも日本に特有なこととも言える。東日本ではきんぴらゴボウ、西日本ではたたきゴボウが家庭料理としてよく食べられる。汁物や炒

め物の具材、また天ぷらの食材としても使われる。

日本人にとってごぼうはなじみのある物なので、あだ名のメタファー表現として扱われることは珍しいことではない。

中国では、痩せて細い人にあだ名を付ける場合、よく「竹竿（竹ざお）」と付けられる。『詩経・衛風・竹竿』の「籊籊竹竿，以釣于淇（高々と竹竿を上げ 淇の川で魚を釣る）」、唐代詩人孟浩然的詩文「試垂竹竿釣，果得查頭鱸（竹竿をかけ魚釣りしてみると、やはり魚を捕らえた。）」には「竹竿（竹ざお）」という言葉がある。竹ざおは魚釣りの道具として使われることが明らかである。沈從文の文学作品『辺城』では「渡船頭豎了一根小小竹竿，挂着一个可以活动的铁环。（渡し船の先に小さな竹竿が立てられて、鉄の輪がかかっている。）」と書いてある。中国では船頭が人を船に乗せて川を渡すことがよく見られる。島に住んでいる人は島から出る時は船で川を渡る必要がある。つまり、交通手段の一つとして扱われていた。竹ざおをさして船を動かし、進む方向も調整できる。中国の絵巻でも水産物が豊かな地域で、竹竿を持って蓑を着た漁師の姿がよく見られる。その他、竹竿を使い服を干すのは中国でよく見られた風景である。一本の竹竿を体の両側に振り分けると天びん棒になり、重い物を担ぐ時に役に立つ。

中国の少数民族リー族には民族色豊かな「竹竿舞（バンブーダンス）」がある。2人一組になって両手にバンブーを持ち、二本の長いバンブーをぶつける。踊る人が音楽のリズムに合わせて、ステップを踏みながら踊るのである。バンブー同士が当たる音が響き渡るなか、人々は豊作を祝い、来年のさらなる収穫を祈る。

4.1.3 日本語の「メロンパン」「大福」や中国語の「餅」「馒头」など

表 4

言語	あだ名
日本語	「メロンパン」「チョコチップメロンパン」「大福」
中国語	「餅（薄焼きパン、中国式クレープ）」 「馒头（饅頭）」 「芝麻烧餅（胡麻ふりかけ焼きパン）」

日本でも中国でも、丸顔の人はよく丸いものに喩えられて名をつけられる。丸いもののイメージには、メロンパン、大福、餅（薄焼きパン、中国式クレープ）、馒头（饅頭）等、さまざまな具体的なイメージがある。ここでは例として、日本語のあだ名「メロンパン」「～

メロンパン」と中国語のあだ名「餅」「～餅」を分析する。

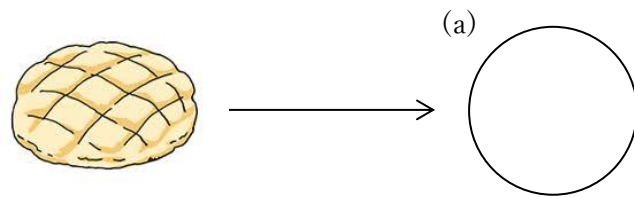


図6 「メロンパン」のイメージスキーマ

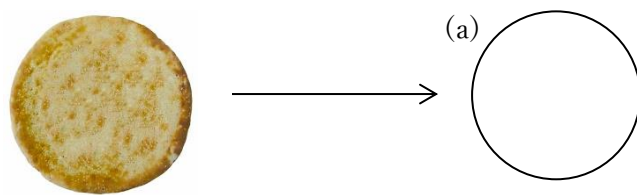


図7 「餅」のイメージスキーマ

現実のメロンパンと餅との具体的な特徴を捨象し、抽象的なイメージをスキーマ化したものを図4、図5のように示した。具体的なイメージは異なるが、両方とも丸い形が特徴である。

丸顔という特徴は人に深い印象を与える。あだ名をつける時、一番鮮明な特徴をあだ名にして名づけることが多い。人の顔型は「たまご顔」、「丸顔」、「面長」、「四角（エラ張り）型」、「逆三角形型」と大きく5パターンに分けられる。この中で、顔の稜角の有無と輪郭から、顔型をイメージスキーマ化するなら、縦の長に注目すると「面長」と「たまご型」は近くなるので、以下の四つの形にスキーマ化することができる。左から順番に「たまご顔」／「面長」、「丸顔」、「四角（エラ張り）型」、「逆三角形型」である。そして、丸顔をイメージスキーマ化すれば、(a)と同じになる。このことから、丸顔の人に「メロンパン」「餅」というあだ名をつけるのは突飛なことではない。

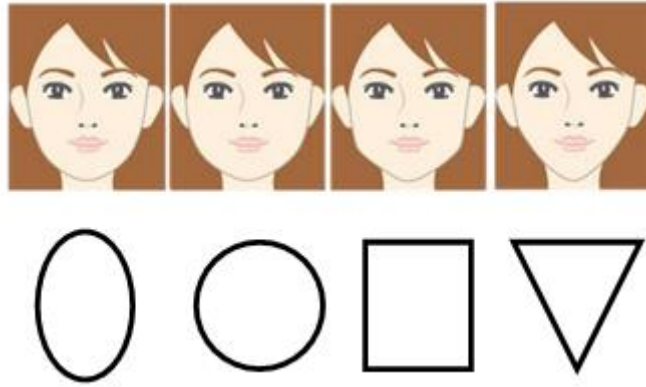


図8 顔型のイメージスキーマ

日本語の「メロンパン」と中国語の「餅」というあだ名に、共通するのは、両方とも丸型であり、人の丸顔を表しているということであるが、独自の特徴も存在している。「メロンパン」はふわふわして膨れているという特徴があり、柔らかいイメージがある。「餅」は平たいという特徴があり、立体感に欠けたイメージがある。

さらに、丸顔に、他の特徴を加えた、「～メロンパン」「～餅」というあだ名がたくさんある。丸い顔にほくろがたくさんある人は、日本語では「チョコチップメロンパン」・中国語では「芝麻烧饼（胡麻ふりかけ焼きパン）」と呼ばれることもある。

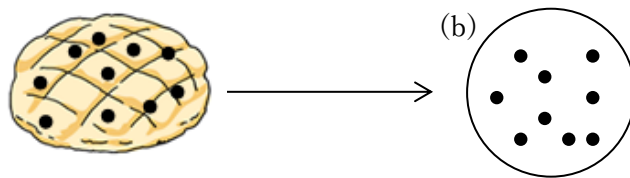


図9 「チョコチップメロンパン」のイメージスキーマ

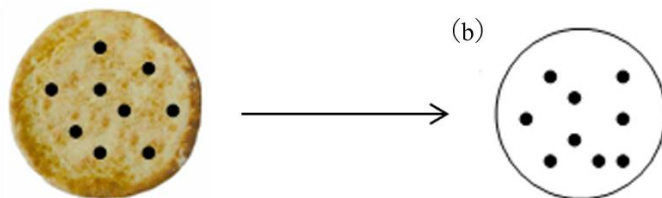


図10 「芝麻烧饼」のイメージスキーマ

二つ以上の特徴がある時には、イメージの焦点の転移が現れる可能性がある。「チョコチップメロンパン」というあだ名はほくろが多く、丸々とした顔だと解釈できる。しかし、

ほくろが多いという特徴が強調されることにより、丸顔で膨れているという特徴は弱められる。中国の場合でも、「芝麻烧饼」というあだ名で呼ばれる時、ほくろがたくさんあることに注目されており、イメージ形成の過程で、着目される焦点の転移が行われている。

あだ名は食文化に繋がっている。中国人の食文化には、米と小麦粉を主食とする文化が根付いている。小麦粉で作った食べ物は、数え切れないほど多い。麺類だけでなく、「餅（中華クレープ）」も小麦粉で作った食べ物の中では種類が多いものである。具を中に入れるかどうかで、「餅」と「馅餅」が分かれている。具材によって、「葱花餅（ネギ付きクレープ）」「酱香餅（ソース付きクレープ）」「肉餅（肉付きクレープ）」「麻酱餅（ゴマだれ付きクレープ）」「鸡蛋餅（卵クレープ）」「手抓餅（クレープ）」などがある。焼き方によって、「油餅（油であげたクレープ）」「煎饼（クレープ）」「烙餅（鉄板で焼いたクレープ）」「烧餅（ゴマふりかけクレープ）」「春餅（薄いクレープ）」などがある。お菓子でも「鲜花餅（花が入っているお菓子）」「老婆餅（お菓子）」「喜餅（めでたいお菓子）」「月餅（月餅）」など様々な「餅」がある。具材や焼き方が色々あるにもかかわらず、「餅」は真ん丸な形をした食べ物を指している。「餅」は中国人の食文化になくはならない物なので、あだ名を付ける時に頭に浮かべるのは珍しいことではない。

日本人の日常的な食生活は、主食と言え、米とパンを食べることが多い。近年、洋食レストランやファーストフード店が都市に住む日本人の食習慣をさらに変化させた。そのため、あだ名をつける際に、パンを連想するのは珍しいことではない。

4.2 性格からつけられたあだ名

中国では気が短い、怒りやすい女性のことを「辣（辛い）」という言葉で表し、唐辛子に喩えた「小辣椒（唐辛子）」「辣子（唐辛子）」などのあだ名がある。例えば古華の小説『芙蓉鎮』では黎满庚の奥さんについて以下の描写がある。「黎满庚的女人五大三粗，外号“五爪辣”，在队上出工是个强劳力，在家里养猪打狗、操持家务更是个泼悍妇。（筆者訳：黎满庚の妻は体が大きくて頑丈である。あだ名は「五爪辣」である。グループで仕事をする時には有能な労働力になり、家で豚を飼っていたり犬を殴ったりしている。家事をする時には更に強暴な女性である。）」と記されている。中国を代表する小説作品の一つ『紅樓夢』に登場した王熙鳳は「鳳辣子」と呼ばれる。唐辛子の味覚の辛さを人の性格に喩え、気が強く、怒りっぽい人を表している。日本では気が強く怒りっぽい人には、「カミナリ」「雷の子」などのあだ名をつける。中国と違い、味覚の刺激ではなく聴覚からもたらされた体験に基づき、ゴ

ロゴロという雷の音を人が怒る時の恐ろしさに喩え、勢いがあり、怒りやすい人を表している。例えば、桜坂洋の『よくわかる現代魔法』には「近所のガキがつけるあだ名はもちろんカミナリオヤジで、地震よりも火事よりも怖いと思われていて、道を歩いている他人のガキを平気で叱りとばす。」と描写され、いつも怒っているおじさんのことを「カミナリオヤジ」と呼んでいる。つまり、同じいつも怒っている人にあだ名をつける時、中国の「小辣椒」は味覚の体験に基づいて考えられて、つけられたのであるが、日本では味覚からつけることがあまりなく、聴覚の体験に基づき「カミナリ」というようなあだ名がつけられている。この味覚からもたらされた体験は中国人の食文化と関係があるかもしれない。中華料理の辛い料理の代表者四川料理は世界で有名である。辛い物を好む中国人はとても多い。辛味には、「香辣（花椒と唐辛子の香りが強い辛さ）」「麻辣（花椒を使ったしびれるほどの辛さ）」「酸辣（酸っぱい辛さ）」「鲜辣（生の青唐辛子を使った辛さ）」などいろいろな辛味がある。そのため、辛味に敏感な中国人が人にあだ名をつける時に、味覚の辛味を人の性格に喩えるのは珍しくない。日本人には辛味を人の性格に喩えるという発想がない。理由としては、日本料理は中華料理と比べ、味が薄く、また日本人はあまり辛い物を食べないことと関係あると思う。

あだ名をつける際に、味覚に関わって名付けることが少なくない。辛い以外に、酸っぱい、甘い、苦い、塩辛いなどの味覚も人の性格を表せる。嫉妬深い人は「醋坛子」とよく呼ばれる。本義ではお酢を入れる壺という意味である。主に男女間の問題で、恋人が自分以外の異性と接触することを嫌がる人を表す。「醋坛子」と同じ様な意味で、近年、「柠檬精」という言葉もよく耳に入る。文字だけ見れば「レモンの精霊」という言葉であるが、中国語で嫉妬心が強い人のことを「酸っぱい人」と形容することから、他人をねたんでばかりいる人のことを指す。本来は、他人が富を誇示したり、恋人との仲の良さを見せびらかしたりする甘い様子を見た時に、酸味のあるもので中和しようとする人を表した。現在は多くの場面で他人が持っているものが自分にはなく、自身を揶揄して自嘲的に使われる。手に入らない物に理由を付けて諦めるイソップ童話の『酸っぱいぶどう』にある「どうせこんな葡萄は酸っぱくてまずいだらう。誰が食べてやるものか」と同じ心理である。同じ嫉妬深い人を日本語で表すと、「焼きもちやき」である。味覚の表現ではなく、食べ物の焼き餅で表現し、「焼き餅を焼く」という慣用語も存在している。やきもちの語源は、嫉妬をすることを「焼く」というところから、「餅」を添えて「やきもち（焼き餅）」としたという説が有力である。嫉妬した時の膨れっ面と焼いた餅の膨れる様子が似かよっているからという説もある。日本語の表現

では味覚の「酸っぱい」と関係なく、視覚と関わっているようだ。可愛らしい人は味覚の「甘い」と繋がり、「甜心」「甜妞」と呼ばれることが多い。この「甜（甘い）」は性格だけでなく、見た目やしぐさも表せる。そう呼ばれる人は飴が口の中でとろけるような幸せな感覚を他人に持たれる人である。そのため、親密な関係で、呼ぶことが多い。しかし、日本では「甘い」という言葉で人を表すと、自分や他人への厳しさに欠けている人や突き詰めて考えない人を指し、主に人の行動を表すとき、あまりいいイメージがない。しかし、中国語での表現は主にいいイメージである。

中国では味覚の「苦い」を使い人を表したいものに、「苦瓜脸」というものがある。「苦瓜」は野菜のゴーヤという意味である。字面から見れば、ゴーヤのような顔という意味だが、実際の形の類似ではなく、味覚の苦さを強調している。「脸」は顔を指しているため、このあだ名はもちろん視覚とも関わっている。見た目の苦しそうな表情を味覚の苦さに転換している。つまり、「苦瓜脸」は沈んだ顔をした人を表している。一方、日本語では「苦」を使って人にあだ名をつけることがあまりない。

味覚以外に、聴覚を用いて人の性格を表すこともできる。「炮仗（爆竹）」「大炮（砲）」などのあだ名である。「炮仗（爆竹）」「大炮（砲）」は火がついたら、すぐ爆発する。何かあるたびに、すぐ怒る人の性格に喩えている。「炮仗（爆竹）」「大炮（砲）」のようにうるさくて大きな音に喩えると、大騒ぎをする人のことを表している。そのほか、「炮仗（爆竹）」というあだ名で、火をつけた時にパチパチと鳴る音からの連想で話が止まらず、ほかの人が口をはさめないほど激しく人に迫る氣勢を表すこともある。これらは主に聴覚と関連づけて、人にあだ名をつけている。同じ砲のイメージだが、砲身の形のイメージに基づくあだ名もある。素直な人にあだ名をつけるなら、「炮筒」「炮筒子」「大炮筒」というようなあだ名がある。李晓明の『平原枪声』の登場人物王二虎は「炮筒子」というあだ名である。このあだ名について「意思说他是直脾气，弄不通的事打破头也不干，弄通了的事你叫他跟你上刀山都行。（筆者訳：彼はまっすぐな性格であり、納得できないことは頭を割られてもしない、納得できたことに対しては彼は刀剣を植えた山にも行く。）」という描写がある。したがって、「炮筒子」は素直でまっすぐな性格を持つ人を表している。砲身の形はまっすぐでストレートな形であり、さまたげられたり、詰まりそうなどころがない。そのため、ストレートな砲身の形を単刀直入にものを言う人に喩え、「炮筒子」などと呼ばれている。実際に存在し見ることのできるものを形のない性格に喩えている。日本において同じ性格の人にあだ名をつけても、そういう表し方がなく、「素直な人」とそのまま表現する。

物事に敏感で心が弱い人や体が弱々しく病気がちな人のことを表すものとして、中国では「林妹妹」というあだ名がある。林妹妹は『紅樓夢』の登場人物「林黛玉」のことである。林黛玉は体が華奢で病弱、風に揺れる柳に喩えられている。原作では林黛玉について以下の描写がある。「两弯似蹙非蹙眉烟眉,一双似喜非喜含情目。态生两靥之愁,娇袭一身之病。泪光点点,娇喘微微。闲静时如姣花照水,行动处似弱柳扶风。心较比干多一窍,病如西子胜三分(訳:蹙むがごとくして蹙まぬ霞をこめたような二つの眉、喜ぶがごとくして喜ばざる情を含んだ双の眼。一抹の愁いを帯びた態は両頬のえくぼから生まれ、病身らしいところにかえってそなわるなまめかしさ。涙の光点々と、なまめく喘ぎもかそけく、静かに座する姿は花の水面に照り映えるがごとく、歩く姿はしだれ柳の風にすぎるにも似ており、胸は比干よりも孔一つ多く、病は西施より三分勝つ。)」と記されている。彼女の弱々しくも気品溢れるイメージがよみとれる。さらに、林黛玉がある場面で落ちた花を自分の命に喩え、佳人薄命の運命を示している。したがって、現在では「林妹妹」というあだ名はどんなことにも敏感で心が弱い人や体が弱々しい、病気がちな女性を表す。日本にも同じように体が弱々しい登場人物がいる。人気アニメ『ちびまる子ちゃん』の登場人物山根くんである。山根くんはちょっとでも気になることがあったりきんちょうしたりすると、すぐ胃腸が痛くなってしまう男の子である。そのため、体が弱々しくて病気がちな人が「山根」というあだ名で呼ばれることがある。女性のあだ名としての「林妹妹」と違い、「山根」は男女共に誰にでも使える。中国にしても、日本にしても、文学作品や映画・ドラマ、アニメなどの典型的な人物を喩えの対象としてあだ名をつけることが珍しくない。日本ではアニメ『ちびまる子ちゃん』に登場する人物野口さんは暗く、陰気な性格であるため、根暗な人が「野口」と呼ばれることがある。中国では『西遊記』の登場人物猪八戒は食べることは好きだが仕事はすぐさぼるため、食いしん坊の怠け者を「猪八戒」と呼ぶことがある。

その他、性格に因むあだ名はたくさんある。日本では、ケチな人を「けちん坊」と呼び、臆病な人を「弱虫」と呼び、短気な人を「怒りん坊」と呼び、のんびりとした人を「のんのん」と呼び、わがままで扱いにくい女を「じゃじゃ馬」と呼ぶことがある。中国では、ケチな人を「鉄公鷄」と呼び、臆病な人を「胆小鬼」と呼び、気が長い人を「拖拉機」と呼び、気が強く暴れる女を「母老虎」と呼び、冷たい人を「冰山」と呼ぶことがある。さらに、憎悪の感情を込めた「母夜叉(恐ろしい女)」「怂包(軟弱無能の人)」「窩囊废(ふがない人)」「冷血动物(冷酷で残酷な人)」などといったあだ名もある。

本節では、性格に因むあだ名の代表的な例をいくつか挙げて、日中文化の角度から、詳し

く分析していく。

4.2.1 日本語の「干物」と中国語の「话癆」

日本ではくぐぐと話す人に、「干物」というあだ名を付ける。元々干物は、魚介類の身を干した乾物という意味である。干物を作る過程で繰り返し何度も魚を裏返す。くぐぐと話す人も纏まりがない話を続け、繰り返す。そのため、くぐぐとする様子は魚を何度も裏返す過程と似かよっているところがあるので、くぐぐとする性格をメタファー表現で表すとすると、「干物」が一番適切かもしれない。

中国ではくぐぐと話す人を「话癆（纏まりがない話ばかり）」と呼ぶ。「癆」は漢方で結核症という意味である。よく知られていて肺結核症の症状は咳が止まらなくなり、出づづける。「话癆」は話が肺結核症の咳のように止まることがない。基本的には、「干物」と「话癆」はどちらも同じ動作の繰り返しを強調するため、メタファー表現という点で共通性がある。

近年、ドラマ『ホタルノヒカリ』の放送に伴って、「干物女」という言葉が流行ってきた。

干物女とは、『ホタルノヒカリ』の主人公である雨宮螢の生活ぶりを表現した造語である。綾瀬はるかさん主演でドラマ化されたことで、より広く知れ渡った言葉だとも言える。この主人公は外ではきちんとしているが、家に居るときは自分の趣味にひたすら没頭して過ごしたり、寝転がってお菓子を食べながらだらだらと過ごしたりしている。

この主人公のように、生き生きとした生活をしている女性とは対照的に、乾いた干物のような生活をしている女性のことを干物女と呼ぶ。世の中には「干物女」という呼び方をされてしまう女性がいる。しばらく恋愛をしておらず、休日はごろごろとして家にひきこもってばかりという人のことを指すと思う。

「干物」と「干物女」は字面から見れば、ほぼ同じであるが実際に一つはくぐぐと叫ぶばかりの人を指し、もう一つは生き生きとしていない生活を送る人を指している。メタファー表現では「干物」というあだ名は干物の制作過程での同じ作業を繰り返す頻度を強調する。しかし、「干物女」は干物の乾いでいる、生き生きしていない様子を強調する。

一方、中国語でも「干物女」と似た意味の「咸鱼（塩漬けにした魚）」という言葉がある。あだ名としてあまり使わないが、「做人没有梦想，和咸鱼有什么区别。」という言葉はよく耳にする。ただ、中国語の場合、日常生活でだらだらする性格より将来について何も計画せず過ごすという点が強調される。さらに、中国語の「咸鱼（塩漬けにした魚）」は極めて困窮

した境遇に居る人のことも表し、「咸鱼翻身」という言葉はよく使われる。困窮した境遇から一変して、成功を得るという意味である。

中国語ではあだ名を付ける際に干物を比喻対象として比較することはあまりないと思う。海に囲まれ、海の幸に恵まれた日本だからこそ見られることである。

その昔、奈良時代には献上品の一つとして、干物が納められていた。輸送手段が発達していない当時、各地から都に魚を運ぶとなると、魚の保存性を高める必要があり、魚を干物に加工するようになった。当時は干物と呼ばれていたわけではなく、小魚の丸干しである「きたひ」、内臓を取り除いて干した「あへつくり」、大きな魚の身を細く切って干した「すはやり」と呼ばれていた。

平安時代になると、漁獲量は増え、それと共に干物の生産量も増える。しかし、まだ生鮮魚介類は少なく、魚を食べるとなると干物が重宝されていた。当時は干物を「からもの」と呼び、宴の席では酒肴として食べられ、貴族の食卓には欠かせない物となった。

干物づくりは江戸時代に大きく発展する。幕府への献上品として、各地の大名が干物づくりに励み始める。干物づくりはそれぞれの藩の産業振興としても奨励され、当時献上品として競うようにつくられた干物が、現在でも名産としても多く見られる。食料が豊富になり食生活が豊かになりだしたこの頃から、貴族の食べ物だった干物も、庶民の食べ物として好まれるようになった。その後現在に至るまで、海産物の中でも干物は、ご飯のおかずや酒のおつまみとして食卓にあがっている。

中国は内陸部が多いため、魚と言えば一般的には淡水魚を指す。そして、干物を作る際に海の魚と同じくらい大きな淡水魚を使って干物をつくる。しかし日本と比べ干物はあまり人気がない。

中医学とは2000年以上の歴史を持つ中国伝統医学のことである。それは、古代から皇帝により守られ、各時代の研究者たちによって深められながら、長い年月をかけ体系的に整えられた歴史ある医学である。結核は「癆病」と呼ぶ。現在結核の治療には基本的に抗生物質を投与する必要がある。しかし、抗生物質による副作用が強いため中医治療を希望する患者が増えている。結核は微熱、倦怠感、咳などの症状がある。話が止まらない様子は咳が止まらない様子と類似しているので「话癆」と名付けられる。

4.2.2 日本語の「缶詰」と中国語の「榆木脑袋」／「一根筋」

表 5

言語	あだ名
日本語	「缶詰」
中国語	「榆木脑袋」／「一根筋」

「缶詰」はかちかちに頭が硬い人のあだ名である。「缶詰」というあだ名を使う理由としては、日本の缶詰には三つの特性があるからである。一つ目は日本においては、缶詰用の缶の材料は鉄を原料にした缶が市販でよく見られ、硬いという特性がある。二つ目はイージーオープンエンドのついていない缶は、道具を使用しなければならないという特性がある。三つ目は缶詰が長期間保存でき、中身が腐敗変質しないという特徴も人の考えが変わりにくい様子を推測できる。この3点の特性を人の頑固な性格に喩えている。

中国の場合、「榆木脑袋」というあだ名がある。榆の材質は強靱なため、伐採しにくい。そして、「榆木脑袋」と呼ばれる人は考え方が榆の木のように硬く、頑固な性格をしている。

頑固な人を表す際、中国語では「一根筋（一本筋）」というあだ名で呼ばれることも少ない。中国語の「一根筋」を日本語に訳すと、「一本筋」になる。しかし、日本語の言葉表現では、「一本筋」は揺らがない、強い信念や決意を意味している。

例：

日本語の「一本筋」：

完成度の高い、一本筋の通った博多豚骨

(コマーシャル)

中国語の「一根筋」：

薇薇却没有这种追根溯源的思路，她是一根筋的，唯一的争取，便是回家向王琦瑶要钱。

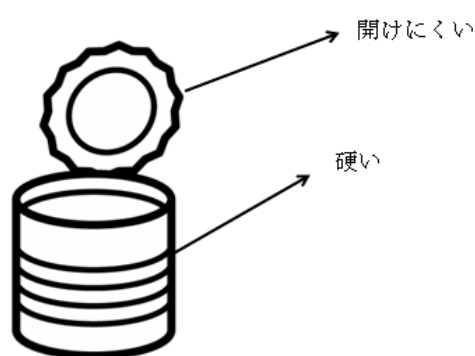
(『长恨歌』王安忆)

(訳文：薇薇はこのように原因を突き詰めて考えない。彼女は一本の筋で、唯一の考えは家に帰ってお母さんにお金を要求することだった。)

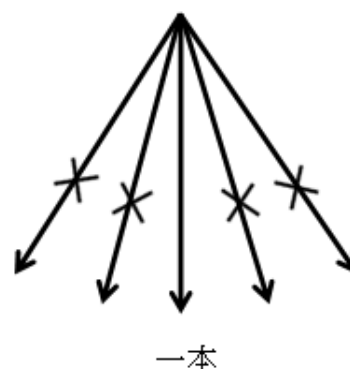
「完成度の高い、一本筋の通った博多豚骨」というコマーシャルを見たことがある。これは日本の豚骨ラーメン屋さんの看板に書いてある宣伝文句である。意味としては、ラーメン

のだしを伝承し続け、味が変わらず豚骨だしだけを使って作っていることである。一方、中国語の場合、やり方や考えが一つしかないと思いつく頑固な人を表している。

つまり、「一根筋（一本筋）」という言葉は中国語と日本語では言葉の意味がマイナスとプラスでまったく反対である。中国語では悪い意味だが日本語の場合、いい意味に転換して使われている。さらに分析すると、同じ頑固な人にあだ名をつける場合、日本語の「缶詰」と中国語の「一根筋（一本筋）」とは、両言語の出発点が異なっている。



日本人のあだ名「缶詰」



中国人のあだ名「一根筋（一本筋）」

図 11 言葉の表現「缶詰」と「一根筋（一本筋）」

日本語のあだ名では、缶詰の硬さという特性に注目している。中国語のあだ名では、一本という特性に注目している。日本語と中国語は硬さと数量という異なる出発点から考えられている。しかし「硬さ」も「一本」も、変えにくいという共通の特性があり、頑固な人の特徴を表している。

日本では、缶詰は鉄製の缶が多い。中国で、缶詰ではなく、瓶詰が多い。ガラスの素材なら、硬いが衝撃をうけるとすぐに割れてしまうので、中国では「缶詰」というあだ名を頑固な人に喩えられない。

また、日本で缶詰の流通量は中国より高い。日本の水産量はとても豊富なので、様々な種類の魚を缶に入れて、魚の缶詰が作られている。缶詰はお酒のつまみとしてもよく使われている。主婦にとって料理の足りない時の一品料理として使うことも珍しくない。また日本では、自然災害が少なくない、特に地震が頻発する。缶詰は保存期間が長いという特徴があり、普段は常備品として扱われ、災害の時は、非常食として使われている。果物の缶詰もよく見られる。日本は島国であり、国土が狭いので、果物を植える土地も少ない。そのため、果物

の値段は高い。新鮮な果物より、果物の缶詰は安い。このように、缶詰はよく使われ、日本人の生活と緊密に繋がっている。一方、中国では、缶詰の流通量は日本と比べ、かなり少ない。中国の食品の値段が安いのが一番の主な原因だと思う。果物を例として考えると、缶詰を作るとすれば、缶の制作と果物の保存技術の費用だけで新鮮な果物の値段を越えてしまう。また、新鮮なものを腐らないようにするため、添加剤の使用を心配する中国人も多い。そういうわけで、あだ名をつける時、「缶詰」を連想することはあまりない。

4.3 しぐさの特徴からつけられたあだ名

お金に執着心を持ち、貯めることにだけ熱心で、使うことはしたがらない、ケチな人を表すと、中国においては、算盤のイメージと繋がって、「算盤（算盤）」というあだ名になる。馬峰の『吕梁英雄伝』に「樺林霸老婆是有名的财迷鬼，外号人叫“小算盘”。一个麻钱看的磨盘大，和人共事总是想占便宜。（筆者訳：樺林霸の妻は有名な守銭奴で、あだ名は「小算盤（そろばん）」という。一枚のコイン玉なのに、ひきうすのように大きく見なして大事にする。人と一緒に仕事をするときにはいつもうまい汁を吸っている。）」という描写がある。周而复『上海的早晨』の登場人物徐义徳のあだ名もそろばんに喩え、「徐义徳的算盘打的比谁都精。”“他外号就叫铁算盘。资本家一见钞票眼睛就红了，手伸的比谁都长。（筆者訳：徐義徳はそろばんをはじくのが誰よりも上手である。彼のあだ名は鉄算盤（鉄のそろばん）である。資本家はお札を見ると目が赤くなり、伸ばす手は誰よりも長い。）」と記されている。「小算盤（そろばん）」というあだ名は本義では「算盤」という意味である。算盤について商売の神として人々が崇めている三国志の武将、関羽が発明したという説がある。古来中国では長い間算盤を使い玉を弾いて計算しお金の勘定をしていた。中国文化における算盤とお金は繋がっている。「そろばんをはじく」というしぐさで、お金をきわめて大事する人を喩える。中国で「算盤」というあだ名をつけられる人は日本において「守銭奴」と呼ばれる。フランスの劇作家モリエールの戯曲のタイトルを邦題に訳した言葉である。それ以来お金に執着する人のことを「守銭奴」と呼ぶようになっていった。日本と同じく中国でも西洋の文学作品の影響を受けた、「守財奴（守銭奴）」という言葉がある。中国文化に基づいてつけられた「算盤」と言えば、同じくお金を大事にする人のあだ名であるが、中国語で「玉を弾く」という動作がお金とよく関わるという意味になり、お金を大事にすることを表す。一方、日本語で「守る」という動作でお金を大事にすることを表す。

中国ではおしゃべり好きで、他人の噂話をする人は「长舌妇（長い舌がある女）」と呼ば

れることが多い。字面の意味に従うと、「妇」は女という意味で、「长舌妇」は女のことを指している。しかし、実際に、あだ名として使う時は、男女の区別なく使われている。『詩経』には「妇有长舌,维厉之阶。(その女性は長い舌があり、問題を起こす禍根である。)」と記されている。「长舌」は長い舌という意味であり、他人の事をいいふらして、もめ事をひき起こす恐れがある。日本において、中国で「长舌妇」と呼ばれる人につけるならば、「おしゃべり」である。しかし、日本語の「おしゃべり」にはいいイメージも悪いイメージもなく、中立な言葉である。意味としては、いつまでもしゃべりつづけ、またしゃべることが好きという特徴だけを表している。一方、中国語の「长舌妇」は人の噂を言いふらすということを強調し、悪いイメージである。

よく泣く人は「泣き虫」と呼ばれることが多い。「泣く」と「虫」を合わせた言葉である。鈴虫などの虫の「鳴く」と「泣く」をかけた事が語源とされている。気が弱くて意気地のない人や、ちょっとしたことですぐに泣き出してしまう人の姿を小さくて弱々しい虫の姿にたとえることによって表現していると考えられる。あだ名の中で「虫」が付くあだ名はいいイメージと悪いイメージに分かれている。皮肉を込めた例を挙げてみる。すぐに泣く人を「泣き虫」と呼び、臆病で弱音を吐く人を「弱虫」と呼び、場の雰囲気にながれず、空気が読めなかったり、水をさすような発言をしたりする人を「お邪魔虫」と呼び、浪費家を「金食い虫」と呼ぶことがある。これらは虫が人間より弱い物とみなされ、下等な存在とされているためである。そのため、あだ名として使う時、人の事を軽視する意味合いが含まれている。いいイメージの角度から考えるなら、日本語で「勉強の虫」「仕事の虫」などのあだ名があり、あることに対して着実に努力する人を表す。一方、中国において、虫に関わるあだ名はほとんど悪いイメージばかりである。例えば、自分の意見がなく、人の後ろにベタベタとくっついて歩いている人を「跟屁虫」と呼び、間抜けな人を「迷糊虫」と呼び、哀れな人を「可怜虫」と呼び、よく寝る人を「瞌睡虫」と呼び、独立できず生活費を親に頼る人を「米虫」「寄生虫」と呼び、怠け者を「懒虫」と呼んでいる。中国文化では虫は弱くて小さい、平凡で取るに足らず、無知な物という存在である。そして、虫に関わるあだ名は日本ではいいイメージと悪いイメージの両方があるが、中国ではあまりいいイメージがない。

その他、しぐさに困むあだ名と言え、日本では告げ口をする人を「ちくり子」と呼び、甘える人を「甘えん坊」と呼び、何でもにおいを嗅ぐ癖がある人を「ワン公」と呼ぶことがある。中国では、どこに行っても大きな声を出すうるさい人を「大嗓門」と呼び、男らしい女を「男人婆」と呼び、とても結婚したがっている人を「结婚狂」と呼ぶことがある。さら

に、きつい言葉で憎悪の感情を表すため、ペコペコする人を「哈叭狗」「马屁精」と呼び、女々しい男を「娘娘腔」「人妖」と呼び、淫らな女を「公共汽车（バスという意味だが、誰でもいいという意味を表す）」などのあだ名もある。

本節では、しぐさに因むあだ名の代表的な例をいくつか挙げて、日中文化の角度から、詳しく分析していく。

4.3.1 日本語の「放送局」と中国語の「大喇叭」

人から聞いた話をペラペラと話す人というあだ名として、日本語では「放送局」・中国語では「大喇叭（ラッパ）」というのを聞いたことがあるだろう。「放送局」にしても「大喇叭（ラッパ）」にしても、情報をばら撒くという共通の特徴を持つ。

放送局のイメージはあちこちから情報を収集し、みんなに放送するという収集と伝達の二つの過程を含んでいる。一方、中国の場合、大喇叭のイメージでは情報をみんなに伝達するという行為のみが重視される。人から聞いた情報をペラペラと話す人にあだ名をつける際、日本人は情報の収集から拡散までの全過程を重視し、中国人はばら撒くという後半部を重視する。

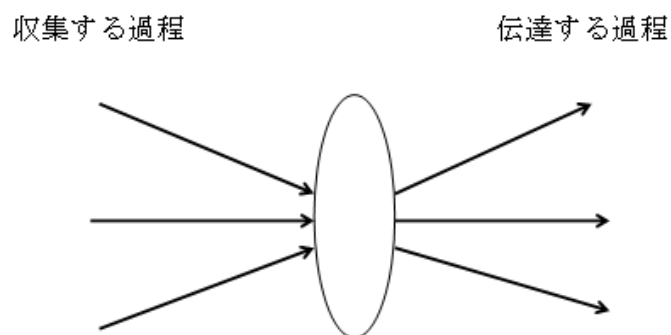


図 12 日本人のあだ名「放送局」のスキーマ

伝達する過程

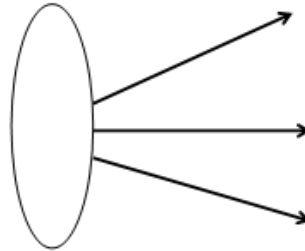


図 13 中国人のあだ名「大喇叭（ラッパ）」のスキーマ

伝達する過程で、あだ名としての「放送局」のイメージは収集した情報をそのまま伝えるというイメージがあり、情報の内容は変わらない。一方、「大喇叭」には自分の考えと想像を加えることにより、元の内容とずれが生じ、収集する情報を大げさにして伝達するというイメージがある。小さな出来事を作り話で内容を膨らまし、大げさに他人に喋ることは中国の評書パフォーマンスとよく似通っている。評書は口頭芸術形式の一つであり、清代にすでに存在していた。物語や伝説などを改編し、内容を膨らまして、豊かな言葉で観客に伝える。「大喇叭」と呼ばれた人は他人に情報を伝達する際に、元の情報を膨らまして伝達することは評書のような中国文化と関連するかもしれない。

「大喇叭」にはもう一つの特徴がある。音が大きいということだ。あだ名として使う場合も、話し手から大きな声が出るというイメージがある。日本語の「放送局」にはそういうイメージがない。

「大喇叭」というあだ名は中国人の特性と一致するところがある。日本語の発音は平らで抑揚が少ないのに対し、中国語は同じピンインでも声調が異なることで意味がまったく変わってくるので、その音の高低が独特である。中国語の声調をはっきりと発音して話すため、中国人は大きな声で話すというイメージが与えられている。なお、中国では大きな声で喋ることは、「元気」「朗らか」「賑やか」という良い印象であり、人になれ親しみやすく人なつっこく感じる。以上の中国人の大きな声という特性はラッパの大きな音と関連している。

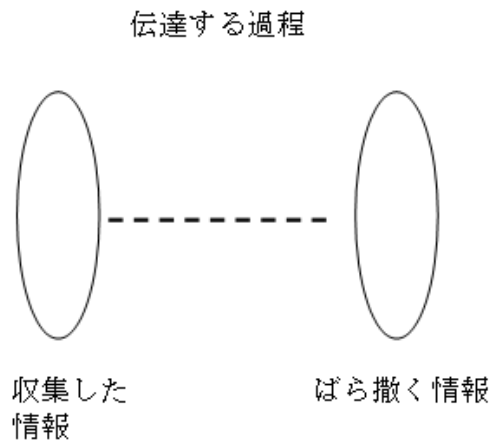


図 14 日本人のあだ名「放送局」

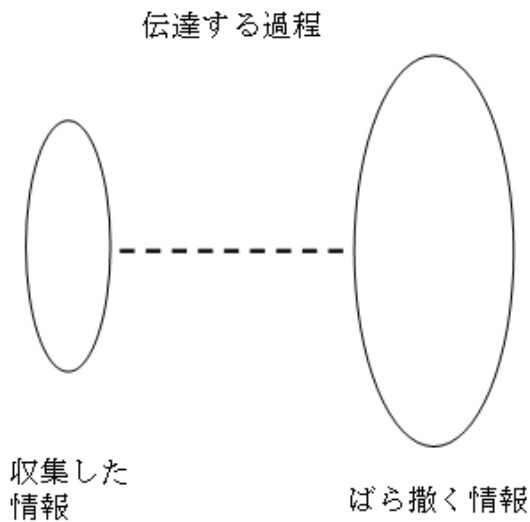


図 15 中国人のあだ名「大喇叭（ラッパ）」

放送局には、ラジオ放送局とテレビ放送局がある。日本でラジオ放送が始まったのは 1925 年、NHK の前身にあたる「社団法人東京放送局」によるものである。1926 年に、東京、大阪、名古屋放送局を統合した「社団法人日本放送協会」が設立され、日本のどこにいてもラジオ聴取が可能になるよう、整備が進められていった。1930 年代にはラジオの低価格化と品質の向上が進み、1931 年に起きた満州事変で（戦況や国内状況の情報が必要となったことから）受信者数が急増した。また、政府が国防強化の面からラジオ放送を聴取することを奨励したので、一層ラジオの普及に拍車がかかった。1960 年代に入ると、ラジオは一家に一台から一人に一台の時代になった。日本のテレビ放送は NHK が 1953 年に開始した。1959 年、白黒テレビの普及が 200 万台を超えた。その後、ニュースや災害情報等は主にラジオと

テレビの放送によって人々に伝達されている。

しかし、日本と比べると、中国のラジオ放送とテレビ放送は開始・普及ともかなり遅かった。さらに、戦後は、生活基盤も整わず、混乱した時代であり、貧富の差が激しかったため、ラジオとテレビの普及も日本より遅かった。そのため、中国における、その時代の情報伝達手段は大喇叭（ラッパ）であった。特に、戦後の中国の農村で大喇叭（ラッパ）はラジオ代わりのほとんど唯一の手段であった。大喇叭（ラッパ）は人探しや事情を説明する際に使われていた。現在でも、中国の農村で広く使用されている。中国では、大喇叭（ラッパ）を吹いたり、販売する物について話し言葉で作った韻文を唱えたりしながら販売することも珍しくない。特に、戦後から 2000 年代までよく見かけた。近年は歩き販売が少なくなり、店を構えて販売することが増えてきた。しかし、大喇叭（ラッパ）を店の前に設置し、販売する物の宣伝やはやりの音楽を流す様子はよく見られる。

日本と中国の異なる時代背景と文化背景により、日本語と中国語それぞれの言葉の特徴が形成されている。「放送局」と「大喇叭（ラッパ）」は人のあだ名として使われる際には、元々の意味ではなく、情報をばら撒くというマイナスイメージが強調されている。

4.3.2 日本語の「寝太郎」と中国語の「覚主」（寝る教の教主）

いつも眠そうな人、よく寝る人にあだ名をつける際、日本語には「寝太郎」というあだ名があり、中国語には「覚主」（寝る教の教主）というあだ名がある。

「寝太郎」というあだ名は日本の民話『三年寝太郎』から生まれた言葉である。三年間寝続けた、一見するとただの怠け者の男が突然起き出した末に灌漑など大きいことをするという話である。

「寝太郎」と呼ばれる人は民話の中の人物寝太郎のように寝てばかりいるという特徴がある。一方、中国語のあだ名「覚主」（寝る教の教主）は寝てばかりいるという特徴だけではなく、横になっている時や座っている時や立っている時、どんな時でもどんな姿勢でもどこでも寝れるという特徴を表している。「覚主」という言葉の各字を分析すると、「覚」は寝ることであり、「主」は所有者あるいは権力などを持つ人を指している。「覚主」を中国語の同音異義語で書くなら、「～教主」（～宗教の創始者あるいは一番の権力者）である。中国の金庸の武侠小説の中には、日月神教の教主である東方不敗、明教の教主である張無忌等、「教主」という肩書きがみられる。中国の武侠文化の影響で、あだ名をつける際、武侠要素も取り入れられ、そこから「覚主」には寝ることに熟達している人という意味が出てくる。

4.4 好みや優れた点からつけられたあだ名

好みによって付けられたあだ名とは好きな物の名称をそのままあだ名にする、あるいは、好きな物の名称の後ろに接尾辞を付けてあだ名にするということである。例えば、日本語の「サーモン (サーモンが好きな人)」「英語野郎 (英語好き又は得意な人)」「国語の鬼 (国語好き又は国語が得意な人)」「卓鬼 (麻雀好き又は得意な人)」、中国語の「酒鬼 (お酒が好き又は得意な人)」「肉将 (お肉が好き又たくさん食べれる人)」などである。好きな物と名付けられる人の間には、見た目上も概念上も全く似た点がない。好きなものをあだ名につける方法は両者の間の類似性ではなく、「主体-好み」の近接性によって成り立つ比喩である。

日本では、野郎は、成人男性を指す言葉である。あだ名として使う時、同じ様な特徴がある男性のことを指している。野郎は元々男性をののしりさげすんでいう語であるため、あだ名に使われる時には揶揄するという意味合いが含まれている。野崎洋光の『名人板前日本料理の秘伝』では「この凍み餅は私の大好物でした。友人たちに「凍み餅野郎」とあだ名をつけられるくらい好きでした。」と記されている。梶龍雄の『男と女の探偵小説』に登場した人物英さんは英語に秀でているので、「英語野郎」と呼ばれていた。省略して「英さん」である。原文には以下のような描写がある。「レボの英さんのこの僕も、ゲルピンで、このところはやや沈滞気味だったのである。プレボというのは、もちろんプレイボーイの略だが、“英”の字のほうは、僕の姓にも名にもない。ただともかく、英語だけは、先生もいささか感心する程度にできるので、英語野郎と、一時、渾名されたことから、その“英語”が略称になったというだけである。」と記されている。何でも人と反対の意見を言って討論するのが大好きな人は「討論野郎」とあだ名がつけられている。

中国語の「将」は本義では軍人という意味であり、軍隊や戦争と関わっているが、ある分野での優れた人物に使われている。そのため、日本語の「野郎」と比べ、「将」が付く中国のあだ名はいいイメージを表す意味合いが強い。『水滸伝』は108人の豪傑が反乱を起こす物語であるため、戦うという光景が多く描写される。108人の豪傑にそれぞれの才能があり、武芸に優れているため、著者は各自の才能によってあだ名を付けている。そして、優れた才能に因むあだ名は108人の豪傑のあだ名の中で大きな割合を占めている。例えば、水攻めに優れた单廷珪は「圣水将」と呼ばれ、火攻めの作戦に優れた魏定国は「神火将」と呼ばれる。中国語のあだ名では、特定の分野で際立った人に「…將軍」「…将」などと名付けることが珍しくない。これらの言葉はその喩えられたことに対して、抜群に優秀な人を表す。

接尾辞の「鬼」について、もう少し考察する。中国において「鬼」を接尾辞としたあだ名は鬼という字ではあるが、死者の霊魂という本来の意味がなくなり、単に同じしぐさや悪癖がある人を指している。例えば、泣き虫の人を「爰哭鬼」と呼び、ケチな人を「小气鬼」と呼び、色事が好きな人を「色鬼」と呼び、お酒が好きな人を「酒鬼」と呼び、タバコが好きな人を「烟鬼」と呼んでいる。「鬼」に関わるあだ名には悪いイメージを持つ言葉が多い。その中で、「淘气鬼（いたずらっ子）」「机灵鬼（気の利く子）」というようなあだ名は活発な姿を表し、完全に悪いイメージとは言えない。

日本においても、「鬼」を接尾辞としたあだ名がある。「勉強の鬼」「国語の鬼」「仕事の鬼」「土俵の鬼」などである。人間離れした優れた才能を表し、また、それを具えた人やある一つのことに精魂を傾ける人を言う。そして、日本では「鬼」に関わるあだ名にはいいイメージが多い。この点について、日中の鬼文化の違いと関係があると思う。

中国では、鬼は死んだ人の魂そのもので、姿かたちのないものとされていた。日本もこの影響を受けて、当初は姿の見えないものとして伝わり、「死への恐怖や恐れ」から鬼は怖いもの、人に悪さをするものというイメージがついたと考えられている。現在日本でイメージされている姿かたちのある「鬼」は、仏教が由来になっており、餓鬼道にいる「餓鬼」や「地獄の獄卒」などのこととされている。この他にも、仏教の守護神であり戦いの神様とされている「阿修羅（あしゅら）」、毘沙門天に使える鬼族で、ヒンドゥー教の鬼神ラクシャサが仏教に取り入れられた「羅刹天（らせつてん）」なども仏教の中の鬼とされている。昔から怖いもの、恐れられるものの象徴として扱われてきた鬼であるが、絵本「泣いた赤鬼」のように心優しい鬼を描いた作品もあれば、近年では子供向けの絵本にシュールなキャラクターとして登場することもある。そのため、心の優しい鬼や人間に福をもたらしてくれる鬼のイメージは日本で広がっている。つまり、日本においての鬼のイメージと言えば、恐ろしいものとして扱われるより魔除けとして扱われる傾向が強いと思う。この文化の違いが同じ鬼に関わるあだ名であるのに、なぜ中国では悪いイメージが多く、日本ではいいイメージが多いか、に対しての理由になるかもしれない。

4.5 本名から変形したあだ名

本名を変形したあだ名は「主体一名前の一部」の近接関係に基づいてつけられている。名前的一部分を取って、あだ名をつけるのはメトニミー表現である。名前的一部分を省略して使う一つの例として、苗字が「奥村」や「奥田」の人にあだ名をつけるなら、「おく」になる。

さらに、取った名前の一部の前後に接尾辞を付ける、あるいは本名を変形し接尾辞をつけることが多い。日本語は「～ぺ」「～のん」「～ちょ」など接尾辞がたくさんある。例えば、名前が「智代梨」「詩織」の人は「ちょり」と呼ばれる。名字が「安倍（あべ）」の人は、「べちょ」と呼ばれる。「加奈」という名前の人は「かなっぺ」と呼ばれる。

現代の日本において本名を変形したあだ名のつける方はよく使われている。このようなあだ名は人の特徴に基づきつけられたあだ名ではなく、愛称と考えられることが多い。

基本的には、相手から揶揄されたり軽んぜられたりしている感じの呼び名をあだ名、親愛の気持ちのこめられた暖かい感じする呼び名を愛称と考えるわけである。

あだ名と愛称の弁別法は、森岡・山口（1985:168-170）により、以下の三点になる。

- ① 人の前で、本人をさす二人称代名詞的用法が可能と考えられるものを愛称とし、不可能と思われるものをあだ名とする。

愛称：本人の前で本人を指示することができる呼び名

例：「やっちゃんは、どう考える？」

あだ名：本人の前で言いにくい呼び名

例：「はなぺちゃはどう考える？」

- ② 名前以外の事物を連想させることの少ない呼び名を愛称、名前以外の他の事物をただちに連想させる呼び名をあだ名とする。

愛称の例：「ゆかり」から作った「ゆっち」は他の事物を連想させない。

あだ名の例：「工藤麻理」から作った「くま」は熊を連想させる。

- ③ 接辞の違いによって、愛称とあだ名とをある程度区別する。

愛称を作る接辞として選んだものは親しみやすさ、可愛らしさを表現するもので、あだ名の接辞は、田舎くささや怪獣などを感じさせる接辞を選ぶ。

愛称の例： やん 佐山→さあやん

あだ名の例： ゴン 今米→ヨネゴン

本論文は愛称とあだ名を区別せずに、言葉自体の表現に基づき文化の角度から、一生の間につけられた本名と異なる呼び方をあだ名として分析していく。先に述べたように日本人は本名を元にあだ名をつける時によく使われる接尾辞がたくさんあり、親しみやすさ、可愛らしさを表している。具体的には「こ」「ぺ」「ぴん」「ち」「ぺぺ」「のん」「りん」「やん」などがそれに当てはまると考えている。

中国の場合、接尾辞では「～仔」「～子」などがよく使われている。名前の中に「国」というがあるので「国仔」と呼び、名前の中に「葉」という字があるので「葉子」と呼び、「燕」という字があるので「燕子」と呼んでいる。

また、接尾辞と比べ、接頭辞を使うことが多い。例えば、「老～」「大～」「小～」「阿～」などである。例えば、苗字が「李」なので「老李」と呼び、フルネームに「強」という字があるので「大強」と呼び、フルネームに「健」という字があるので「阿健」と呼んでいる。女の人は接頭辞を使ってあだ名をつける際に、「小～」を使う人が多い。「小」は「体が小さい」と「年齢が若い」という二つの意味がある。女の人のあだ名としてよく使う理由としては、可愛らしいからである。

接尾辞と接頭辞が付くあだ名は一般的には具体的な意味を持たない。ただ単に本名が変形したあだ名である。しかし、つけたあだ名が具体的な意味を持つ単語となることもある。例えば、「葉子」は「葉っぱ」という意味である。そう呼ばれた人は葉っぱのように活気に満ちあふれる一面もあるかもしれない。「燕子」は「燕」という意味である。そう呼ばれた人の燕のように元気で活発な一面を表すことができる。名前に同じ「強」という字が付くが「大強」と「小強」では、意味が違う。「小強」は中国語ではゴキブリのことを指す。そのため、「小強」よりも一つの読み方「大強」をつける人が多いと思う。

接尾辞がなくても、本名を変形してあだ名とすることもある。例えば、苗字が「何」の人は、「何」と「荷蘭豆」の「荷」の発音が同じなので「荷蘭豆」(サヤエンド)と呼ばれる。日本の場合、あだ名が「シャープ」の人は本名が「福井」であり、「井」はシャープ符号の形に似ているため付けられている。

今の日本社会はいじめ問題のゆえに身体や性格などの特徴に因むあだ名と比べ、本名から変形したあだ名が人気になってきた。中国では、名前の変形より人の特徴に因むあだ名が人気になっている。中国人の朗らかな性格とユーモア感覚と関係があると思う。

日本語の接辞にはいいイメージと悪いイメージがある。「ぺ」「ちょ」「こ」「ち」「のん」などさっぱり感を持つ接辞はいいイメージを持っている。「ゴン」「じ」「さく」「マン」「ぺえ」など田舎くささや怪獣を感じさせる接辞は悪いイメージを持っている。中国での接辞はいいイメージと悪いイメージをあまり区別していないが、男女によって、接辞の使用には区別がある。例えば、「～仔」は男がつけられることが多い。

4.6 雰囲気からつけられたあだ名

『水滸伝』の登場人物阮小二、阮小五、阮小七、三人の兄弟は「立地太歳」「短命二郎」「活阎罗」と呼ばれる。「太歳」は祟り神として畏怖の対象とされる。太歳を恐れる信仰は長きにわたっており、古くは後漢の王充が『論衡』で取り上げている。そこでは、「太歳」は人間の生殺与奪の権利を握る神だと扱われている。「短命二郎」というあだ名は本人が短命ではなく、彼とかかわった人間の命が短くなってしまつたためについたものである。「閻魔」とは、死者の生前の罪に対して判決を下すという地獄の王である。「太歳」と同じく畏怖の対象とされる。これらのあだ名は当時の人々から恐れられた凶悪な神の名から名付けられている。

超人的な機知と巧妙な策や予見力があり、機略に優れていて、神様のような雰囲気がある人は「神仙（仙人）」というあだ名で呼ばれることがある。马识途の『夜谭十记』では「比如鼎鼎大名的四川第一号大军阀，就请来了一个外号叫“刘神仙”的人来当他的军师。据说一切办事打仗，都要先请这位神仙在袖中卜卦，才能决定。（筆者訳：例えば一番有名な四川第一号の大軍閥は「劉神仙」をあだ名とした人を招き、軍師とした。出兵する時はいつも、まずこの劉神仙に袖の中で占ってもらってから決めるということである。）」と記されている。神仙についての話は中国古代の神話によく見られる。神通力を持ち、仙術をあやつるイメージである。日本においては人の雰囲気を鬼神に喩えることはあまりない。

その他、人に優しく接する人を「妈妈」というあだ名で呼び、体力がなさそうで反応が鈍い人を「大爷（おじいさん）」と呼び、服装が野暮ったく同じ話を繰り返して話す人を「大妈（おばさん）」と呼び、上品で金持ちの子弟を「少爷（坊ちゃん）」と呼ぶ。お嬢様のような人は「大小姐（お嬢）」というあだ名と呼ばれることもある。

日本においても、「お嬢」というあだ名がある。しかし、中国では実際にお嬢さんであるかどうかとは関係なく、雰囲気がお嬢っぽいだけ呼ばれる。揶揄や皮肉の表現として使われることが多い。日本では「お嬢」と呼ばれる人は本当に社長の娘などのお嬢さんである。その他、相撲の親方のように体も度量も大きい人に「親方」とあだ名をつけることがある。老けていたり、体力がなさそうな人は「婆さん」と呼ばれる。大人っぽく、いかにもたよりのいいがあるため「あねご」と呼ばれる。金持ちの息子は「御曹司」と呼ばれる。大辞林の解釈で、曹司は貴族の子弟で、まだ独立していない者が親の邸内に与えられている部屋を指す。「御曹司」と呼ばれる人の雰囲気はこの雰囲気と似かよっているので、そう呼ばれるかもしれない。

4.7 身につける物・持ち物からつけられたあだ名

谷口（2003：3）では、メトニミーについての定義が「メトニミー（換喩）は、近接性に基づく比喩であると定義される。近接性には、様々な種類のものが含まれる」と記述されている。言い換えれば、メトニミーの両者の間には類似性はないが近接性が存在している。近接関係とは「容器と内容」や「部分と全体」等である。あだ名の文化には、メトニミー表現も存在し、人と近接関係にある物をあだ名として使うことが多い。この場合、近接関係とは「身体部位と全体」、「所有物と持ち主」等である。

文学作品や歴史上では「大刀」と呼ばれる人物が何人も存在している。例えば、『水滸伝』の関勝、『興唐伝』の王君可、清朝後期の大刀王五などである。大刀は手に持つ武器であるが、人のあだ名として使われている。大刀は武器であるため、所有物と見なされ、そこには所有物と持ち主の近接性が存在している。武俠小説には武器に因む俠客のあだ名がよく見られる。

その他、あだ名をつける際に、いつも辞書を持つ人を「大字典（辞書）」と呼び、よくピンクの服を着る人を「粉红怪（ピンクの怪物）」と呼び、スカートをはく人を「小裙子（スカートちゃん）」と呼び、髪にリボンをつける人を「蝴蝶結（リボン）」、歯を矯正する人を「鋼牙妹」と呼ぶことがある。

一方、日本における、夏目漱石の小説『坊ちゃん』で松山に赴任した坊ちゃんは、自分を可愛がってくれた清に、はじめて手紙を出した。その手紙に、「今日は学校に行ってみんなにあだ名をつけてやった。校長は狸、教頭は赤シャツ、英語の教師はうらなり、数学は山嵐、画学はのだいこ。今に色々な事をかいてやる。さやうなら。」と書いたのである。「狸」「赤シャツ」「うらなり」「山嵐」「のだいこ」といったあだ名を用いて『坊ちゃん』の話は展開していく。この中の、「赤シャツ」というあだ名は典型的なメトニミー表現である。赤いシャツと教頭が「所有物と持ち主」の近接関係になっており、いつも赤いシャツを着ている教頭のことを指している。また、日常生活の中で、メガネをかける人を「メガネ」「メガネ君」と呼び、いつもハリセンを持って席の間を歩き回る先生を「ハリセン」と呼び、常に黒い服を着る人を「黒ちゃん」と呼び、弁当にはいつも卵焼きがある人を「たまご」と呼ぶことがある。

4.8 職業・家業・身分・環境・役割からつけられたあだ名

職業・家業・身分・環境・役割から名付けられたあだ名も人との近接関係があるため、付

けられたのである。

日本において、機関車の運転士であるため「機関車男」というあだ名と呼ばれ、元社長であったため「社長」と呼ばれ、チームや集団の中でトップであるため「リーダー」と呼ばれ、各領域で優秀な人材であるため「エース」と呼ばれることがある。夏目漱石の小説『坊ちゃん』の主人公のあだ名は坊っちゃんである。家族からは見放されている金持ちの坊ちゃんが、その家の下女清から身分の関係で、「坊ちゃん」と呼ばれている。また小説ではのだいこから「勇み肌の坊っちゃん」と馬鹿にされる。坊ちゃんを評するときによく「江戸っ子気質」という言葉が使われる。

一方、中国では、肥くみ取りの仕事をしているため「掏糞工」というあだ名と呼ばれ、廃品を回収するという仕事を務めるため「破烂王」と呼ばれ、良縁を結ばせる仲人であるため「紅娘」と呼ばれ、占う仕事をするため「神婆」と呼ばれ、チームや集団の中でトップであるため「老大」と呼ばれることがある。汪曾祺の作品『詹大胖子』の登場人物謝大少は本名が大少ではなく、彼が金持ちの息子であるため、人々に「謝大少」と呼ばれている。『水滸伝』の登場人物張青はもと孟州の光明寺で菜園の番人をしていたので、「菜園子」というあだ名と呼ばれている。もう一人『水滸伝』の登場人物張横は潯陽江の渡し船の船頭だったので、「船火児」と呼ばれている。さらに、きつい言葉で憎悪の感情を込めたあだ名もある。例えば、「老鴛（やり手ばばあ）」、「鴨子（女性客を接待する男性）」、「鷄（娼婦、売春婦）」「交際花（ホステスという意味。尻軽女のことを表す。）」などである。

4.9 出来事からつけられたあだ名

嶋沢秋生の『再びの青春』の登場人物大山は「ニワトリ」と呼ばれる。見た目や性格とは関係のないあだ名で、「大山というその級友は鳥獣に詳しく、学校でも鶏の話をよくするので、ニワトリという渾名が付いていた。」と説明されている。小松重男の『御庭番の明治維新』では「つい最前までの兄弟子たちに、「お師匠様」と呼ばれた邦明は、たちまち頓馬な失敗を連発して「ずっこけ師匠」という渾名を付けられてしまった。」と記されている。たちまち頓馬な失敗を連発したので、「ずっこけ師匠」というあだ名をつけられた。運動会で、走っている途中にアキレス腱を切ったため、その後「アキレス腱」と呼ばれた人もいる。

『水滸伝』に出てくる登場人物郝思文のあだ名は「井木犴」である。彼の母親が妊娠中に、神話伝説にある井木犴という動物を夢で見た、その後郝思文が生まれたのでこのあだ名がつけられた。

五代十国呉越の建国者である錢鏐は水利の建設に力を尽くしたため、民間では「海龍王」というあだ名で呼ばれていた。

趙樹理の小説『三里湾』の登場人物袁天成は政府が土地を分配した時に自分の土地と弟の土地を一緒にもらったため、「两大份（二つの分）」というあだ名で呼ばれている。

現代では、新聞記事に以下のようなあだ名が記されていた。

「他当校长的第一年，学校“创收”就破天荒地由前几年的 10 万元左右猛增到 102 万元。老师们高兴得给他送了个外号——“章百万”。」

（1995 年『人民日報』）

（筆者訳：彼が校長になって最初の一年間で、学校の収入は数年前の 10 万元から 102 万元に急増した。教員たちは彼に「章百万（百万という意味）」というあだ名を付けた。

階下に住んでいる女の子のことが好きだが、告白する勇気がない。毎日女の子を見守るだけなので、ルームメイトに「旺仔」と揶揄って呼ばれる。「旺仔」は中国で有名な食品メーカーである。「旺」と「望（眺める）」の発音が似ているため、「旺仔」というあだ名で「望仔（眺める男）」の意味を表す。

4.10 失言・口癖・独特の口調・話題からつけられたあだ名

もと日本テレアナウンサー福澤朗さんに、「ジャストミート」というあだ名がついていたのはなぜなのか？プロレス中継のときに「ジャストミート」と連呼していたからだそうである。何か物事を説明する時に、「通例」という連発するので、「通例」と呼ばれる人もいる。喋り始めに必ず「あっ」と言う人が「小林製薬」と呼ばれることもある。小林製薬（医薬品と衛生雑貨の企画・製造・販売をおこなう日本の企業）のテレビコマーシャルの冒頭のシーンには必ず「あっ！小林製薬」というセリフが入る。このコマーシャルを連想して、つけられたあだ名である。いつも「さあ皆、頑張ろう」と言うため、「ガンバロン」と呼ばれている。「She is Jane」の読み方に独特の癖があったため、「シーイズジェーン」と呼ばれている。

一方、中国では趙樹理の『三里湾』には「人家做过的活儿，他总得再修理修理，一边修理着一边说“使不得，使不得”，因此人们给他送了个外号叫“使不得”。（筆者訳：人がやった作業は、彼がいつももう一度修理しなければならず、修理しながら「使不得，使不得（使えない、使えない）」と言い、そのために「使不得（使えない）」とあだ名をつけられた。）という描

写がある。口癖を取り上げられて、あだ名をつけられたのである。

1995年の『人民日報』には以下のように記されている。

「二狗叔长到 20 多岁，没见过这日子，天天吃、顿顿都吃白面馍，他怎能不高兴？逢人就说：“现在是天天过年、顿顿过年”。于是，有人又给二狗叔送了一个外号：“顿年”。」

(1995 年『人民日報』)

(筆者訳：二狗おじさんは二十歳過ぎまで、このような生活を見たことがない。毎日ご飯を食べられ、毎回小麦粉の蒸しパンを食べられる。彼はどうして喜ばずにいられようか？彼は人と会うたびに、「现在是天天过年、顿顿过年。(今は毎日年越し、毎食年越しの気分だ)」と言う。そのため、「顿年」というあだ名とつけられた)

「二狗叔家的“摇把子”电话也换成了程控电话。邮电局的同志给二狗叔装完电话，让他试一试，他看了看，大声嚷道：“这不成，没把儿。打不成，没把儿”。从没见过程控电话的二狗叔的这句话，惹得安装人员哈哈大笑。村里人听说了这件事，给二狗叔又起了一个新外号——“没把儿”。」

(1995 年『人民日報』)

(筆者訳：二狗おじさんの家にもダイヤル式電話からプッシュ式電話に変えた。郵便局の人は電話を設置して、二狗おじさんに試してもらおうとしたが、二狗おじさんは一目見るなり「这不成，没把儿。打不成，没把儿」。(これはだめだ。ダイヤルがない。電話できない。ダイヤルがないからだ。))と大声で文句を言い、郵便局の人を大笑いさせた。村の人はこの話を聞くと、二狗おじさんに「没把儿」という新しいあだ名をつけた。)

この例から見れば、発言に因むあだ名はよくつけられるが、口癖や失言が変わるとあだ名も変わっていく。

変わった発音を取り上げられて、あだ名をつけられることもよくある。

香港の有名な俳優である張家輝はテレビの取材で名乗った時の下手な普通話が中国の皆に可愛らしいと思われたので、「渣渣輝」と呼ばれている。

中国では「普通話」を標準語として使っていて、その他の言語はほとんどが方言である。

日本の約 25 倍の面積がある中国大陸には膨大な数の方言がある。それぞれの方言は、まるで独立した外国語のように全く違う。主なものは粵語、北方語、呉語、贛語、湘語、閩語、客家語の 7 つである。粵語はよく「広東語」、いわゆる「香港語」と呼ばれる言語である。現在、多くの香港の芸能人は中国大陸で活動しているが、大陸のファンのため、普通話を勉強している。しかし、このようなことはよくあるのである。

日本においても、失言・口癖・独特の口調・話題からつけられるのはよくあることである。しかし、日本の国土面積が狭いため、全国の方言はアクセントと言葉遣いの違いがあるが、ほとんど通用している。そのため、日本で方言による失言であだ名をつけることがあまりない。

4.11 年齢・生年・性別・出身地からつけられたあだ名

年齢によってあだ名をつけるのはよくあることである。日本において同じ苗字の人が二人いるときに、若い方の人に「ヤングスト」というあだ名をつける場合である。中国においても、グループ、クラスなどで一番若い女の子が「幺妹」と呼ばれることがある。

性別によって、男が「～哥」と呼ばれ、女が「～姐」「～妹」と呼ばれることは多い。例えば、「发哥」「张哥」「杨姐」「花妹」などのあだ名がある。

年齢によって、同じ名前の人が二人いる時に、「大～（年上の方）」「小～（年下の方）」で呼んで区別する。例えば、中国の女優「大宋佳」と「小宋佳」である。

生年に基づいてつけたあだ名と言えば、兎年に生まれた人を「小兎兎」と呼び、90 年代以後に生まれた人を「90 後」と呼ぶことがある。

日本では出身地に因むあだ名はほとんど聞いたことがない。日本社会にはさまざまな差別の問題があり、部落差別の問題もまた重大な社会問題のひとつである。近年、解決の方向へと進みつつあるが、結婚や就職など、さまざまな場面における差別が今もなお生じている。部落差別、排除を目的とした身元調査は人権侵害だとみなされている。そのため、日常生活、さらに就職の時でも出身地について聞かなくなってきた。この日本社会の状況は出身地に因むあだ名がほとんどないということに関連している。一方、中国では、面積が広くて、各地域にはそれぞれ誇りがある。中国には「落葉帰根」という言葉がある。人間は落ち葉が根元に帰るように死んだら故郷に帰るという意味である。もう一つ「衣錦還郷、顕祖耀宗」（故郷ににしきを飾り、一族を誇示する）という言葉もある。中国人の考えでは出世しても、死んでも、出身地との絆は永遠に変えられないのである。そのため、日本と違い、中国では出

身地に因むあだ名が少なくない。

出身地によって広東省出身の人が長年で広東省に住んでいたため、「老広東」と呼ばれることもある。この「老」は年齢と関係なく、長期間で住んでいてその地域の事をよく知っているという意味である。長年間山東省で住んでいる人を「老山東」と呼び、長期間上海で住んでいる人を「老上海」と呼び、長期間北京で住んでいる人を「老北京」と呼ぶことがある。それ以外に、出身地だけを表すためつけられたあだ名「小天津」「小重慶」「小瀋陽」などもある。コロナの時に、偶然に武漢に入って、ボランティア医療者として活動していた若い男の人は「大連」と呼ばれていた。出身地が大連だからである。

4.12 歴史上の人や典故から付けられたあだ名

歴史上の人物を喩える時や典故に因んで付けられたあだ名には人の抱負や才能等の要素が含まれていることがある。ここからは『水滸伝』の登場人物のあだ名を見ていきたい。小説『水滸伝』の記述によると、呂方は「小人姓吕,名方,祖贯潭州人氏,平昔爱学吕布为人,因此习学这枝方天画戟,人都唤小人做小温侯吕方。(姓は吕であり、名は方です。潭州の出身です。吕布の人柄を尊敬するため、方天画戟という武器を学ぶ。「小温侯吕方」とよく呼ばれる。)」と自分のあだ名の由来を紹介した。呂布は温侯という職をしていたからである。

仁貴とは唐初期の人物で、突厥との戦いで活躍した名将薛仁貴のことである。郭盛はライバルである呂方と違い、仁貴の武勇にあこがれていたわけではなく、自身の戟の腕は薛仁貴にも勝ると標榜していた。その表れとして呂方のあだ名が「小」温侯と謙遜したものになっているのに対し、郭盛は「賽仁貴」と言い、それは「仁貴にも勝る」という意味を示していた。

漢代の將軍李広とは、岩を虎と見誤って弓を射たが、その弓が岩を射抜いたといわれるほどの弓の名手として知られた。花栄もまた空を飛ぶ雁の頭を射抜くほどの弓の名手なので「小李広」と呼ばれる。

『史记·李将军列伝』では「广出猎,见草中石,以为虎而射之,中石没镞,视之石也。因复更射之,终不能复入石矣。广所居郡闻有虎,尝自射之。(李広は狩りに行った。草の中にある石が見えた。虎だと間違えて、石を射たが、矢が突き抜けた。近くに行ってみると、石だったと気づいた。また射たが、二度と石に当たらなかった。李広は各郡に駐屯している時に、虎がいると聞いて、よく自分で狩りに行く。)」と記述している。これは「没羽箭」の典故である。「没羽箭」とは羽のない矢という意味である。中国語で「没」は「mei」「mo」という

二つの発音があり、「なし」と「潜る」と二つの意味をかけている。この場合、射る腕前が優れて、羽までも石の中に入り、力が強くて百発百中ということを表しているので、「mo」と呼ぶ。近代になると、「mei」の発音と誤解し、そこから張清のあだ名が「没羽箭」となった。それは張清が飛び道具といっても弓矢ではなく、錦袋に入った石つぶてをまるで流星のように投げ飛ばして次から次へと敵をやっつけたため、羽のない矢であると解釈したことからである。

元代の雑劇作家である高文秀は才能が優れ、金末から元初にかけて活躍した元曲の作家である関漢卿と似かよっていたため、「小漢卿」と呼ばれていた。

中華人民共和国解放軍の中将であった劉昌毅は勇猛だったので、「猛張飛」と呼ばれていた。第二代中華人民共和国主席などを務めていた劉少奇は当時「小諸葛」というあだ名で呼ばれていた。三国時代、蜀の丞相の諸葛亮は全身全霊をかけて、後主の劉禅を補佐した。劉少奇は諸葛亮のように慎重に事に当たり身命をなげうって奉公するという精神があったため、「小諸葛」と呼ばれていた。

趙樹理の小説『小二黒結婚』の登場人物劉修徳は何をやっても陰陽八卦にすぎり、吉か凶かを確かめる。諸葛亮のように「八陣図」を敷くのが得意なため、「二諸葛（二番の諸葛亮）」というあだ名と呼ばれている。中国の漫才『五人義』に登場した占い師は「賽諸葛（諸葛亮より才能がある）」というあだ名で呼ばれる。

中国では、勇敢だったり有徳だったりして有名な歴史的な人物も神格化されると聖人、仙人として崇拝されるようになったり、神に高められたりする風習がある。例えば、三国志に登場する赤い顔で顎髭のある英雄関羽を崇拝し、神として扱われ、関帝廟が作られた。そのため、歴史上の人や典故から付けられたあだ名は中国人の古人崇拝という思想と関係があるようである。

4.13 親族・長幼関係があるため付けられたあだ名

ここでも、『水滸伝』の登場人物を例に挙げる。

兄は暴れだすと止められない、向かうところ敵なしで、さえぎる者が無いため、「没遮拦（さえぎる者がいない）」と呼ばれる。弟は兄のあだ名のから、「小遮拦」と呼ばれる。

孫立と孫新兄弟も同じようにあだ名を付けられる。尉遲は武勇に秀でた唐代の武将で鉄鞭の使い手である。兄のあだ名「病尉遲」は尉遲敬徳（尉遲恭）になぞらえて付けられたのである。そのため、弟は兄のあだ名から、「小尉遲」と呼ばれる。

解珍（两头蛇）と解宝（双尾蝎）も兄弟である。兄は「两头蛇（二つの頭がある蛇）」と呼ばれ、弟は「双尾蝎（二本のしっぽがある蠍）」と呼ばれる。

親族関係に因むつけ方は現代文学作品にも存在している。王朔の『看上去很美』では「韓立克老爱学电影《青松岭》里钱广的一句话：去，给我烙两张糖饼。结果大家都管他叫“糖饼”，连累得他爸也被叫成“老糖饼”，他弟五克刚生下来就有了外号“小糖饼”。（筆者訳：韓立克さんは映画『青松嶺』の中で銭広さんの一言をまねする。「去，给我烙两张糖饼。（二枚の餡味のクレープ頂戴。）」その結果、みんなが彼のことを「糖餅（水餡が入ったクレープ）」と呼んでいる。そのため、彼のお父さんは「老糖餅」と呼ばれ、生まれたばかりの弟には「小糖餅」とあだ名が付いた。」と記されている。自分を含む家族が三人そろって「老糖餅」「糖餅」「小糖餅」と呼ばれている。

梁鴻の『中国在梁庄』では「周利和当过会计，周利忠小巴结，父子三人，外号“大积极”、“二积极”、“三积极”。（筆者訳：周利は会計を担当したことがある。周利忠は人に取り入ることが上手だ。親子三人は「大積極」、「二積極」、「三積極」と呼ばれている。）」と記されている。順番に「大」「二」「三」と並んでいる。

その他、「老不死（死に損ない老いぼれ）」「老東西（老いぼれ）」「小東西（チビ餓鬼）」「这孫子（こいつ）」「那孫子（あいつ）」など憎悪の感情を込めたあだ名（外号）もある。

中国文化の中では、「長幼の序」がかなり重んじられて、儒家思想の関係から、「長幼の序」は人間の徳行に繋がっている。

『礼記』の楽記篇では以下のように記載されている。

合父子之亲，明长幼之序，以敬四海之内，天子如此，则礼行矣。

（『礼記』）

（訳：父子の親を合はせ、父子の親愛を互いに守り、長幼の序を明らかにし長幼の順序を明らかにすれば、以って四海の内を敬す。敬が天下に行なわれることになる。天子（テンシ）此（かく）の如くなれば、則ち禮（レイ）行（おこな）はる天子の政治がこのようになるならば、禮が広く行き渡ったことになる。）

孟子は、親や年長者に対する親愛・敬愛が肝要であることを説いて、『孟子』滕文公上篇において、五つの徳の実践が重要であることを主張した。

父子有親,君臣有義,夫婦有別,長幼有序,朋友有信。

(『孟子』)

(訳：父子親有り、父子の間には親愛の情がなければならない。君臣義有り、君臣の間には礼儀がなければならない。夫婦別有り、夫には夫の役割、妻には妻の役割がある。長幼叙(序)有り、長幼の間には順序があり、年少者は年長者を敬うこと。朋友信有り、朋友はたがいに信頼の情で結ばれなくてはならない。)

孟子は、以上の五つの徳を守ることによって社会の平和が保たれるのである、と説いている。

宋代(北宋から南宋にかけて)に形成された、新しい儒学・儒教を宋学という。宋学を大成したのが朱子(朱熹)であったので一般に朱子学ともいう。宋学の成立は、中国思想の中でも革新的なものであり、その後の中国の主要な思想となった。儒学思想は唐代から発展し、宋代にかけて盛んになった。『水滸伝』は北宋の後期が舞台となっている。

中国の文化には「長幼の序」を重んじる儒教思想があり、あだ名(外号)を付ける方法もこの儒教思想の影響を受けている可能性がある。また、中国の昔からの長幼の序列、祠堂の順位、家族に対する複雑な呼び名からも長幼の序を重視していることが分かる。あだ名を付ける際に親族・長幼関係から名付けるのは中国文化に基づいた独特なものであろう。

第5章 動物のイメージに基づいてつけられたあだ名

5.1 動物のイメージに因む人のあだ名

人を動物化する名づけ方はよく用いられる。動物は人間の身近に存在し、外貌・形態・性格など人との類似点も多くあるので、あだ名を付ける時に動物を比較対象とし、その類似から名づけることはめずらしくない。特に、あだ名を付けることは、その人の外貌、性格など特徴を大げさに表すものである。こう考えると、人間と密接に関わる動物をイメージし、人のあだ名に用いるという現象は面白いのではないだろうか。

中国では、身長が高く体が大きな人に対して、馬をイメージしたあだ名をつけることが多い。『黄河东流去』では「给他推车的的是冯四圈，一个破落户子弟，因为个子大，外号叫“大洋马”。（筆者訳：彼のために車を運んでくれたのは、馮四圈という没落した家の子である。背が高いので、あだ名は「大洋馬」である。）」という描写がある。この「大洋馬」は本義で外国の馬を指している。中国において元々馬のイメージといえば、背が高く体格がいいというイメージであるが、外国の馬は中国本土の馬と比べもっと巨大なイメージがある。馬は家畜の中でも足が長く大きい。人は馬にまたがる時、馬の左肩横に立って、左足を鐙（あぶみ）にかけて鞍へ座る。体格は人と比べかなり大きい。なお、中国語の四字熟語には「人高馬大」という言葉もある。「人高」は背が高いという意味であり、「馬大」は馬のように体が大きいという意味である。そのため、馬のイメージに基づき、背が高くガッシリした人を表している。しかし、日本では馬のイメージと繋がらない。あだ名をつけるなら、「のっぽ」と呼ぶことが多い。そのほか、前節で述べたように植物のイメージと結びついて、大木に喩えることもある。しかし、「ウドの大木」というあだ名は体格が大きいというよりむしろ用途がないため役に立たないことを強調している。「大洋馬」というあだ名は主に馬の立派な体格と長い脚が連想される。同じく馬のイメージに基づいたあだ名だが、「马脸（馬の顔）」と呼ばれる人は身長の高さと関係なく、顔が長いという特徴から付けられ、面長な人を指している。日本では面長な人にあだ名をつけるなら、そのまま「面長」と呼ぶことが多い。日本でも中国語の「马脸（馬顔）」と同じ意味で、馬面（うまづら）という言葉があるが、主に悪口として使われている。

日本で馬の見た目に因んで人にあだ名をつけるのはあまりないが、馬の性格に基づいてつけられた言葉がある。「じゃじゃ馬」という。暴れ馬に喩え、わがままで扱いにくい人や性質が激しくて、他人の言うことを聞かずに暴れまわる者を指す。特に利かん気なおてんば

娘を表すことが多い。気が強く暴れる女と言え、中国では虎のイメージと結びついて、「母老虎」という。しかし、同じ女のことを表すが、「母老虎」は怒りやすく凶悪な面を表し、日本語の「じゃじゃ馬」はわがままという特徴を表す。中国の「母老虎」については次の節で詳しく説明したいと思う。そのほか、日本語では「野次馬」という言葉もあり、火災・事故などの現場に物見高く集まる人を指しているが、あだ名としてはあまり使わない。つまり、中国では馬の見た目に基つきあだ名をつけることが多いが、日本においては馬の性格からあだ名をつける。

中国において、面長な人は「马脸（馬顔）」と呼ばれる以外に、「驴脸（驢馬の顔）」と呼ばれることもある。「马脸（馬顔）」と同じく人の面長という特徴を表すが、「驴脸（ロバの顔）」は面長の特徴に加え、機嫌が悪そうで鬱々とした表情を表す。中国語の使い方として「奂拉个驴脸（仏頂面をしている）」と言えるが「奂拉个马脸」とは言わない。「驴脸」は面長な人のあだ名として使える以外に、不満などがあり、むっとした顔つきをした人を表したあだ名としても使える。そして、ロバのイメージに基つきつけられたあだ名は馬に関するあだ名と比べ、ほとんど良いイメージがないと思う。したがって、「驢」が付くあだ名には、見た目の特徴から、髪が薄い人につける「秃驴（秃のロバ）」というものがある。中国のあだ名「秃驴」を調べると、この言葉は元々お坊さんのことを指している。そして、お坊さんのように坊主頭の人が「秃驴」と呼ばれる。お坊さんとロバが関連される理由はロバの見た目と関係なく、背景に中国文化の影響がある。中国でお坊さんが四方八方を放浪する時に、よくロバに乗って行くことが多かったからである。

それに対して、日本ではタコにつるつるとした頭があるため、禿げの人に喩えることがあり、タコのイメージと繋がっている。映画『男はつらいよ』に登場したタコ社長は禿げなので、このあだ名をつけられたのである。しかし、中国においてはタコのイメージを連想されずロバに喩えることが多く、「秃驴（禿げのロバ）」と呼ぶ。タコにつるつるとした頭の特徴から禿頭の人に喩えるが、タコの足を特徴として考えると、足の動きが器用な人に喩えている。日本のプロ野球選手である中河美芳のニックネームは「タコ足」であった。一塁守備で足を大きく前後に開くと、どんな送球も吸い付くように捕球するからである。足を掛けたら絶対に離さずにそのまま倒れこむことを得意とした力士、新海幸藏には「タコ足の新海」というあだ名がある。しかし同じくタコの足に基づいてつけられたあだ名であるが、中国では浮気好きな人を指している。中国語で「劈腿（二股をかける）」は同時に二人の異性と付き合う、二股のことを表す。そのため、タコには八本の足があるので、「八爪鱼（タコ）」と呼ばれる

人が浮気好きな人であると思われる。中国語で「劈腿（股割りする）」は同時に二人の異性と付き合うという意味であるため、八本の足があるのは何人もの人と付き合っていることだと解釈される。

ロバの性格に注目するなら、愚かな様子を表す「蠢驴（間抜けな驢馬）」や「笨驴（間抜けな驢馬）」というあだ名がある。ロバと馬は両方ともウマ科の動物である。しかし、馬は見た目がきれいでかっこいいし、走る速度が速く、頭がいいという特徴があるが、ロバは見た目や速度、賢さなどが全く馬と比べられないほど劣る。そのため、馬と比較され愚かで怠け者のイメージと重なり中国語で愚か者を表す「蠢驴」「笨驴」というあだ名となる。同じく間抜けな人にあだ名をつけるとしたら、日本語には「おたんこなす」「ぽんこつ」などがある。また、動物に関わるものでは「馬鹿」という言葉がある。しかし、「馬鹿」という言葉はあだ名として使われるのではなく、相手をからかったり、罵倒したりする言葉としてよく使われる。なぜ愚か者を表すため、馬と鹿この二つの動物を使うのか。「馬鹿」については色々な説がある。その中に、中国の史書『史記』に記されている「指鹿为马（鹿を指して馬となす）」からきたものだろう、という説がある。秦の始皇帝の死後に丞相となった宦官の趙高が、己の権勢を試すために、二世皇帝に鹿を献じて馬だと言い張り、群臣の反応を見たという話によるというものである。しかし、これは、「馬鹿」という当て字からこじつけた、日本で生まれた俗説であろう。馬と鹿を区別できないため、「馬鹿」という罵倒する言葉で愚か者を指す。しかし、中国の『史記』から出てきた言葉であるが、この言葉について中国と日本の理解は異なるところがある。日本においては、愚か者と解釈されているが、中国では理非曲直を混同し、善悪をあべこべにするという意味と解釈されている。

中国ではロバは怠け者と思われることもある。そのイメージに基づき「懒驴（怠けるロバ）」というあだ名が生み出された。中国語では「懒驴上磨屎尿多（訳：怠けるロバは石うすを引く前に糞と尿を排泄することが多い）」という諺がある。これはロバが怠け者と言われる原因になるかもしれない。日本語にはそういう表現がなく、「怠け者」や「怠け者さん」という言葉があだ名として使われている。

また、性格を表す「犟驴（頑固なロバ）」というあだ名があり、強情で忠告を聞かず頑固な人を表している。ロバは動かないと決めると、動かすのがなかなか大変である。そのため、中国では頑固な人によく「犟驴」というあだ名がつけられる。中国と比べ、日本では頑固な人は動物のイメージを喩えることがあまりない。動物以外であだ名として使うなら前節に述べた「罐詰め」や「石頭」などが存在している。ものの硬さで人の考えを変えにくいこと

を説明し、頑固な性格を表している。

ロバの鳴き声から歌が下手な人を喩えた「叫驴（音痴のロバ）」というあだ名もある。ロバの鳴き声は音調があまりよくなく耳障りと思われるため、音痴な人をロバのイメージと結びつけ、「叫驴」と呼ぶ。莫言の小説『生死疲労』の登場人物の一人小常はいつも大会で歌うので、人に「大叫驴」と呼ばれている。あだ名の理由として小説では「我听到许多心怀嫉妒的年轻小伙子给他起了一个外号叫“大叫驴”（多くの嫉妬心を持った若者が彼に「大叫驴」とあだ名をつけたらしい）」という説明がある。嫉妬の気持ちで付けたあだ名はいいイメージではないと分かっている。一方、日本においては動物のイメージがなく、そのまま「音痴」というあだ名をつけることが多い。つまり、中国においてはロバの性格や鳴き声などの特徴に基づいて人にあだ名をつけることがよくあることであるが、日本ではあだ名としてあまり存在していない。中国文化では馬のイメージと比べ、「驢」に関わるあだ名はほとんど悪いイメージだと思う。

首が長い人にあだ名をつけると、中国においてガチョウに喩え、「大白鹅（ガチョウ）」というあだ名がある。中国ではガチョウは家禽の一つであり、首が長いという特徴がある。唐の詩人、駱賓王は「鹅鹅鹅，曲项向天歌（訳：「ガァ、ガァ、ガァ」青空に向け、ガチョウが長い首を曲げたまま歌を歌っている）」という詩文でガチョウの首長という特徴をしっかり捉え、生き生きとしたその場の躍動感を読み手に伝えた。それ故、中国文化ではガチョウのイメージに基づいて人にあだ名をつける時には、首が長いという特徴を表すことが多い。他にもガチョウのイメージとして、白い毛と優雅な体つきもよく捉えられる。その白い毛と優雅な体つきを人の白い肌と優雅な姿に喩えることもある。そのため、ガチョウのイメージに因む「大白鹅（ガチョウ）」というあだ名は、肌がきれいでふるまいが優雅な人を表して使われることもある。中国においてガチョウは鶏や鴨などと同じく家禽として飼育されている。人間の身近にいる動物であり、親しまれていると考えられる。それゆえ、ガチョウの見た目のイメージに基づき人にあだ名をつけることが多い。長くきれいな首をガチョウの首に喩え、白くきれいな肌を白い毛に喩え、優雅で美しいガチョウの姿に喩える。一方、日本人はガチョウに対する感情が中国人と比べ薄いと思う。それはガチョウの飼育環境と関係があるかもしれない。日本で飼育されるガチョウは公園など公共施設や動物園などの展示飼育が多く、あまり食用にはされない。日本人の飲食習慣は主に鶏を中心としている。そのため、中国人と比べ、ガチョウに対する意識があまりなく、人にあだ名をつける際にも使わないのだと思う。日本においては首が長い人を表す時、ガチョウのイメージではなく、鶴

や麒麟のイメージと繋がっている。鶴のような長く美しい首を表す「鶴首」という言葉がある。鶴は日本人にはとても親しみのある存在である。それは昔話に登場したり、折鶴であったり、昭和 59 年に発行された千円札のデザインに使われたりと、日本人と鶴の間にはさまざまな絆がある。日本を代表するエアライン「JAL」のジャンボジェットにも鶴が描かれている。JAL のジャンボジェットのデザインは、日の丸と鶴を表すデザインとなっている。鶴は、日本を象徴する鳥として、世界から認識されていると言える。「鶴首」の他に「麒麟」というあだ名もある。麒麟は首が長いという特徴があることは中国でも認識されている。しかし、「麒麟」をあだ名として使う場合、中国では首が長いことを表すだけでなく、背が高いことも喩える。つまり、麒麟の見た目に基づいてあだ名をつける際に、日本では首という一部分の特徴に注目し、中国では全体的な特徴を考える。

「狼」はあだ名としてもよく使われる。中国においては、痩せている人も狼のイメージと結びついて、「瘦干儿狼（痩せて細い狼）」と呼ばれる。中国では狼は痩せているというイメージである。狼が太ったら、体が重たくなり動きが鈍くなって獲物を捕れない。狼は痩せているイメージがあるため、痩せた人のあだ名として使うことがある。一方、日本において、痩せた姿は狼のイメージと繋がって使うことがあまりない。痩せて細い人のあだ名と言えば、動物に喩えず「骨」や「もやし」、「ボッキー」などがある。痩せているという見た目のイメージ以外に、雰囲気から考えると、狼は凶悪なイメージがある。倪方六の小説『中国人盗墓史』には「盗墓这行中也是以强凌弱，谁强势谁发财，一个外号“白狼”的土匪头子以强欺弱，吓退了其他的盗墓团伙。（筆者訳：墓泥棒も、強い者が弱い者を虐げ、強い者のみが財を成す。「白狼」というあだ名の土匪の親分は、自分の強い力を用いて弱い者をいじめ、ほかの墓泥棒のグループを退けた。）」と記されている。この「白狼」というあだ名は狼の凶悪な姿からつけられたのである。中国文化では、狼は確かに凶悪な動物である。なぜなら動物の中での凶悪の代表者「虎」と一緒に使うことが多いからである。例えば、「如狼似虎（まるで狼や虎のようである。悪事を働く人間が貪欲で飽くことがない。凶暴で残酷である。）」「虎狼之势（虎や狼のように残忍な勢い）」「豺狼虎豹（恐ろしいものばかり）」などがある。そのため、あだ名をつける際に、狼を凶悪な人に喩えることは珍しくない。

「狼」の凶暴で残忍なイメージから、恩知らずな人を「白眼狼（白目の狼）」と呼ぶこともある。中国語の「白眼」は目が悪くて何も見えないことである。中国語で何も見えないことは深い意味で人間性がなく冷血なことを意味する。そこから「白眼狼」は恩を仇で返す人を指している。同じ意味を日本語では「恩知らずな人」と言う。

中国でスケベな人も狼のイメージと結びついて、「色狼」と呼ばれる。日本語で「痴漢」に当たる。「色狼」という言葉のように下心がある男の人を表す角度から考えると、日本語に「送り狼」という言葉もある。親切を装って女性を送っていき、途中ですきがあれば乱暴を働こうとする危険な男を指している。語源となるのは狼の姿をした妖怪である。この狼の妖怪は山中などで旅人の後ろをついて行き、旅人が転ばなければ何もしないが、転んだら嘯み付くという。中国での狼のイメージに因むあだ名は、ほとんど悪い意味である。

中国文化では狼に関わるあだ名は確かにほぼ悪い意味であるが、日本にはいい意味を表すあだ名がある。一人でも仕事ができる人は「一匹狼」というあだ名をつけられることがある。自ら好んで単独行動し、一人でも仕事ができる人はよくこのようなあだ名をつけられる。「狼」という言葉のイメージが先行して、攻撃的なニュアンスで使われることもあるが、人間嫌い・協調性がないなどといったネガティブな意味の言葉ではない。また、「一匹狼な人」は、しっかりとした信念を持つ人が多いというのも特徴である。したがって、このあだ名は日本語ではプラスのイメージが強い。「一匹狼」を中国語に置き換えたら、「孤狼」「独狼」になるが、中国人はいいイメージをもたない。さらに、中国人は独りぼっちが嫌いで、にぎやかな雰囲気で生きることが好きだという民族的性格を持っている。中国人は食事する時に円卓を囲んでにぎやかにしている光景がよく見られる。一方、日本においては、店に入るとどこでも一人用のカウンター席が見える。中国人は賑やかな環境を好むが、日本人は孤独に恐れがなく、一人で行動しても構わないという気持ちがあるのだろう。したがって、日本では「一匹狼」をあだ名にするといい意味で使われ、完全に協調性がないことではなく、一人で行動してもうまく仕上げることを強調している。中国では「独行侠（一人で行動する人）」というあだ名をつけることがある。正義感があり、自由な人を表している。日本語の「一匹狼」と比べると、一人でもうまくやれる優れた能力より自由自在な生活の仕方を強調している。

中国では、痩せて細い人は狼のイメージと結びついている以外に、猿のイメージと連想されることも多い。痩せて細い人は中国語の「瘦猴（痩せている猿）」というあだ名をつけられる。日本では豊臣秀吉のあだ名が「猿」だったというのは皆知っていることである。しかし、日本では体が全体的に痩せているイメージではなく、顔つきが猿と似かよっているイメージである。日本の『絵本太閤記』では、母が日吉権現に願をかけて生まれた秀吉は、はじめから歯が生えていて面相は猿に似ていた、と語られている。『真書太閤記』にも、彗星が現れて白昼のような夜中に誕生した秀吉の容貌は、色あかく猿眼、鋭い瞳が二つあったと

書いている。また、明智光秀等宛織田信長黒印状には、「猿帰り候て、夜前の様子つぶさ言上候」とみえる。もちろん顔が似ているため「猿」は豊臣秀吉のあだ名になっている。森村誠一の長編推理小説『人間の証明』の登場人物横渡は警視庁捜査第一課の刑事であり、猿のような容貌から「猿渡」と呼ばれる。日常生活でも顔つきが猿と似ている人はよく「猿」と呼ばれる。同じく見た目に因んでつけられた「猿」というあだ名であるが、中国では細い体が注目され、日本では顔つきが注目されている。

性格から見れば、活発な性格を持っている人を猿に喩えた中国語の「猴子」というあだ名がある。日本では小賢しく小利口な人も猿のイメージと結びついて、「猿」というあだ名をつけられることもある。「猿」について、大辞林には「小利口な者を罵っている語」と記されている。したがって、日本では性格に基づいて「猿」を人のあだ名として使う場合、悪いイメージである。

そのほか、日本ではあるグループの中で一番調子に乗っている人のことを「猿山の大将」と呼ぶこともある。「猿山の大将」は狭い範囲の中で自分が一番だと得意になっている人を表す。「猿山」は狭い範囲、小さい集団のことを指している。小さい領域でも自分一人が威張った態度を取り、自分一人の考えで動いていることに満足する人を表す。あまりいいイメージではないと思う。つまり、猿のイメージに因むあだ名の中で、特に性格に基づくあだ名といえば、日本ではほとんど悪いイメージであるが、中国のあだ名の方はいいイメージが多い。

力の強い人に「牛」をあだ名として付けることが珍しくない。中国のあだ名に「大牛」「鉄牛」「大黒牛」などがある。趙樹理の小説『三里湾』では「黄大年是个大力士，外号“黄大牛”，一个人可以抵两个人。（黄大年は力持ちであるため、「黄大牛」と呼ばれている。一人ですぐ二人分の力に相当する。）」という人物描写がある。『三国志』の登場人物李逵はあだ名が「黒旋風」であることが人々によく知られているが、もう一つのあだ名を持っている。李逵は子供の頃から力が強く、「鉄牛」と呼ばれていた。日本にも、同じく牛の力強い特徴に基づいた「猛牛」というあだ名がある。強い力の持ち主と言えば、日本においては力士の姿がすぐに思い浮かぶ。力士たちも個人の特徴による独特なあだ名を持っている。鳥取県出身の大相撲第53代横綱である琴櫻は立ち合いの威力があるので、「猛牛」というあだ名で呼ばれている。

中国では、まじめにこつこつと働く人や誠意をもって黙々と人民に奉仕する人はよく「老黄牛」というあだ名をつけられる。「黄牛」とは牛の一種で、その多くは役用種であり、中

国においては耕作の時に活躍している。耕作や運搬に使えるほか、皮は革製品に、肉は食用に使い、用途が広い。生きていた間にコツコツ働き、死んだ後も肉から皮まで使用される。中国文化ではコツコツ働く精神と犠牲になる精神を表し、仕事に当たって苦勞をいとわず恨み言を言わず、不平を訴えないということである。

一方日本ではコツコツ努力する人は牛に喩えず、「虫」に喩えている。例えば、「勉強の虫」「本の虫」「仕事の虫」などのあだ名がある。コツコツ努力する様子だけ見れば、日本語の「虫」に当たると思う。『大辞林』では「虫」について、「一つの事に熱中する人」と解釈されている。あだ名では「本の虫」や「勉強の虫」、「仕事の虫」、「芸の虫」などもある。古い本などに付き、それを餌とする紙魚という昆虫がいる。そこから、本に食らいつくようにしていたり、本に張り付いていたりする人のことを「まるで本の虫のようだ」と言い始めたという説がある。その後、本だけではなく、ほかの色々なことに熱中する人のことを「虫」と呼ぶようになったのかもしれない。例えば、「勉強の虫」、「仕事の虫」、「芸の虫」などである。あだ名をつける際に、中国語の「牛」と日本語の「虫」は両方ともコツコツ努力する人を表すが、「牛」の方は苦勞を言わないことを強調し、「虫」の方は熱中するという特徴を強調している。そのほか、日本ではゆっくり歩く人やあまり動かない人が「牛」と呼ばれることもある。食べてすぐ寝る人を牛に喩え、「食べてすぐ寝ると牛になる」という諺があるがあだ名として喩えることは少ない。

日中文化において鶏に関わるあだ名と言え、日本では周囲の状況を眺めて都合のよい側にばかりつく人が呼ばれる「風見鶏」がある。中国ではケチな人は「铁公鸡（鉄の鶏）」と呼ばれている。風見鶏は屋根の上部などに取り付けられるもので、下部には東西南北の四方位が十字型で示されており、その十字の中心部分に取り付けられた鶏の向く方向によって風向を知ることができる。風向きによって向く方向が変わるため、現在では優柔不断な人や日和見主義者を形容する言葉として使われることが多い。中曽根康弘元首相は、政権に就く過程でしばしば変わり身の早いところを見せ、政界の「風見鶏」というあだ名で揶揄された。中国では、このような人は「墙头草（塙上の草）」と呼ばれる。日本文化の中では、動物の鶏と風の組み合わせで時流に合わせることの巧みな人を表すが、中国文化では植物の草と風の組み合わせである。絶えず風に揺れ動き、風向きによって寄せる方向が変わるため、日和見主義者を指している。中国文化では、風は鶏と連想されることがあまりないが、草と結びついて、詩や文章などでよく表現される。例えば、「林暗草惊风（林は暗くなって、草は風に騒ぎ。）」「秋草风吹春复绿（風が吹いて、秋の草がまた緑に返る）」などの詩文では

風と草は繋がっている。鶏にはきれいな羽がたくさんある雄鶏というイメージがあるが、鉄の鶏では羽1本も抜くことができない。そのため、ケチという意味である。『呂梁英雄傳』では「他兄弟吳士登可就完全兩樣：心毒眼小，一個麻錢都能看到眼里，外号人叫“鉄公鶏”，意思是指他一毛不拔。（彼の兄弟の吳士登はまったく違っている。悪辣で心が狭いので、麻錢一つも見逃さない。『鉄公鶏（鉄の鶏）』と呼ばれている。毛1本さえ抜こうとしないくらい、ひどく利己的だからである。）」という描写がある。日本において、ケチな人と言えば、動物に喩えることがない。「けちん坊」というあだ名がある。そのほか、中国文化で単独で「鶏」という言葉を言うと、売春婦のことを指している。そのため、あだ名として使う場合、特に女性のあだ名としては慎重に使われなければならない。

鴨に関わるあだ名と言えば、中国では泳げない人は「早鴨子（陸上の鴨）」というあだ名がつけられることがある。日本では同じように泳げない人は「金槌」と呼ばれ、騙されやすい人は「いい鴨」と呼ばれる。好都合な話を次々と持ち込んでこられて利用されるお人よしが「鴨」と呼ばれることもある。日本の場合、泳げない人は動物に喩えることがあまりないが、「金槌」と呼ばれることがある。金槌は重くて沈むため、泳げない人を表している。日本において、「いい鴨」は騙されやすい人を指している。鴨は非常に騙されやすい動物で、デコイという鳥の模型を罠に使って、鴨の鳴き声に似せた笛の音でおびき寄せるという方法で比較的簡単に獲れたようである。そこから騙されやすい人を鴨に喩える。そのほか、「鴨が葱を背負ってくる」という諺がある。鴨鍋に付きものであるネギをカモ自身が背負って食べられにやってくるという状況を描き、運の悪い人が運の悪い友達をつれて運の強い人のところへ麻雀をしにやってきたような状況をいう。ここで「運の悪い人」は「カモ」、つれられてきた「運の悪い友達」は「ネギ」、「運の強い人」は鴨鍋をおいしくいただく人であることはいうまでもない。以上の日本語の鴨に関わる言葉はあだ名として使うより、一般的な言葉としてよく使われている。そのほか、中国文化で単独に「鴨」という言葉を言うと、男娼のことを指している。そのため、あだ名として使う場合、特に男性のあだ名としては慎重に使われなければならない。

他にも、日中両国で動物に関わるあだ名はまだたくさんある。例えば、馬識途の『夜譚十記(让子弹飞)』では着飾ってしゃなりしゃなりと歩むあでやかな女は「蝴蝶（蝶々）」と呼ばれる。莫言の『丰乳肥臀』の登場人物郭福子は鼻筋を寄せてぐるぐる回る小さな目をしているため、「土撥鼠（タルバガン）」と呼ばれる。『努尔哈赤』に登場したジャンプに長じている人は「黄鼠狼」と呼ばれている。莫言による『四十一炮』では「万小江外号水老鼠，小

个頭、尖嘴猴腮、三角眼、一身好水性、都说他在水下能睁着眼睛抓魚。(万小江のあだ名は水老鼠(水ネズミ)である。小さな頭、とがった口と猿のような頬、三角の目があり、水泳が得意である。皆は彼が水中で目を開けて魚を捕まえることができると言っている。)という描写がある。目が大きい人は「金魚(金魚)」や「青蛙(カエル)」と呼ばれる。日本では、痩せて細い人に「カマキリ」というあだ名を付ける。口が大きくてみっともない人に「カバ」と付ける。目が大きな人に「でめきん」と付ける。体が太っているや大きい人が「豚」や「ゴリラ」と呼ばれることも少なくない。毛深い人は「熊」と呼ばれる。走るのがはやい人は「チーター」と呼ばれる。目の隈がひどい人は「パンダ」と呼ばれることもある。

日中両国で動物のイメージを人の特徴に喩えるあだ名は色々ある。本章では「狸」や「狐」、「虎」、「犬」のイメージに基づいてつけられたあだ名を中心に、日中文化の共通点と相違点を分析していきたいと思う。

5.2 日中の「狐」と「狸」のイメージとあだ名

夏目漱石の小説『坊ちゃん』の中に、「校長は薄髯のある、色の黒い、眼が大きな狸の様な男である」という描写がある。狸校長の典型的なイメージは読む人の心の中に残っている。『坊ちゃん』の中国語の訳本には様々あるが、中国では校長のイメージを日本語の「狸の様な」ではなく、多くは「活像个狐狸(狐の様な)」と翻訳されている。人のイメージをあだ名にする時、日本の場合は「狸」、「狸みたいな人」という言葉で表すことが多いが、中国の場合は「狐狸」「老狐狸」(中国語の「狐狸」は日本語の「狐」の意味)で表し、「狸」はあまり使わない。三河の大名時代、領内での一向一揆に手を焼いていた徳川家康は、いったん一揆側と和睦を結び、彼らを解散させる。しかし、一揆側が解散するや否や、途端に手のひらを返して、武力で一揆側を弾圧した。後の「大坂の陣」でも、最初の「冬の陣」で豊臣秀頼と表面的には和睦しながらも、その陰で大坂城の外堀を埋め、翌年の「夏の陣」で豊臣家を滅ぼした。このやり方も狡猾である。「ずる賢さ」や「狡猾さ」から、徳川家康は「狸親父」というあだ名を付けられた。狸とは昔から人を化かすと言われ、そこから表面は善人でも、考えや行動がずる賢く狡猾な人のことを狸と呼ぶ。

中国ではずるい人を表す場合、狐のイメージと結びついている。中国語の表現では、「狐狸(キツネ)」のずるさの度合いと男女の違いによって、「老狐狸」「狐狸精」という言葉がある。「狐狸」「老狐狸」はずるく、化ける人を表す。「狐狸精」は、化けて男を惑わす女を指す、また淫らな女を指す。

本節では日中両国の「狸」と「狐」に関するあだ名を詳しく分析していく中で、両国文化の共通点と相違点を研究したいと思う。

5.2.1 あだ名としての日本語の「狸」と中国語の「狐狸」

日常生活や文学作品には「狸」という言葉で人のことを象徴して表すことが珍しくない。以下に例を挙げる。

「家康にすれば、『新しくいただいた関東諸国が、まだ不穏でよく治まっておりません。それに兵力を用いなければならないので、朝鮮に渡るとはどうかお許してください』と願い出て許された。秀吉はおそらく、『このたぬき親父め。うまいことをいって、朝鮮に渡ることを逃がっている』と思ったに違いない。」

(『童門冬二の"出处進退"の研究』 童門冬二)

「校長は薄髯のある、色の黒い、眼が大きな狸の様な男である。」

(『坊ちゃん』 夏目漱石)

「及川はコップの水をひと口飲むと、そう言って笑った。『内心、このたぬきと思いましたがよ。』」

(『日本を想い、イラクを翔けた』 松瀬学)

日本で「狸」と呼ばれる人は、一体どのようなイメージなのか、次の資料を踏まえて研究していく。筆者は高槻(2016:72-96)に基づいて、動物の狸の特徴と「狸」をあだ名とした人のイメージを以下のようにまとめている。

表6 動物の狸の特徴とあだ名の関係

メタファー身体部位	狸の特徴	人の特徴
体色	① 茶色の体色	不細工、薄汚れた中年男 (狸おやじ)
目	② 垂れ目	愛嬌がある

	(目のまわりにある黒い毛が左右に下がっている)	しょぼくれた格好 優しい感じ
頬	③ 顔の両側には長い毛が生えている	下ぶぐれの中年男 (狸おやじ)
顔	④ まん丸な顔	優しい感じ
腹	⑤ お腹が膨らむ	太鼓腹 (ビールを大量に飲んで、お腹が出てきた男)
性格	⑥ 化ける	裏表がある せこい、騙す

日本では、あだ名で「狸」と呼ばれる人は、外見や内面的性格の特徴がタヌキに似ていることが多い。外見の特徴は最も直観的である。例えば、狸の毛色は茶色であり、まるで服の汚れ、コーヒーの染みのようなので、不細工な中年男のイメージである。狸の頬の両側に毛があり、中年太りで、頬の肉が垂れているおじさんに似ている。狸のお腹は丸くて、中年男のビール腹のようである。中年男に似ているところが多いので、「狸親父」という言葉が出現し、人のあだ名として使われている。もちろん、狸の外見にも良いところがある。狸の目は垂れ下がっていて、顔は丸くて、愛嬌があるために「狸」というあだ名で呼ぶ時、マイナスのイメージは弱い。外見の特徴以外にも性格の特徴があるが、この点では日本の文化と関わっている。例えば、日本の児童文学の作品では、狸は人を化かしたり騙したりするので、あだ名をつける時にも、裏表のある人を「狸」と呼ぶことが珍しくない。

前述の通り、日本において「狸」と呼ばれる人は中国において「狐狸」と呼ばれる人と同じように見なされている。中国の狐は漢字で「狐狸(きつね)」と書き、「狸」という字が含まれているが、「狐」だけの意味になる。

中国では、「狐狸」と呼ばれる人は一体どのようなイメージだろう。

魏巍の小説『東方』では「那老狐狸，看到你借地图，就会猜咱恐慌了！（筆者訳：あの老狐狸はあなたが地図を借りたのを見て、私たちが混乱していると予想する。）」という描写がある。僅かな手掛かりを発見して相手の計画を推測する。豊富な経験と鋭い観察能力を持つ狡猾な姿を表している。

李国文の小説『那年故事』では「郭东林是老狐狸，他不冷笑，也不热笑。（筆者訳：郭東林は老狐狸である。冷笑も熱笑もしない。）」という描写がある。顔の表情が読めず、裏表があるという特徴を表している。

つまり、中国において「狐狸」「老狐狸」と呼ばれる人のイメージには、ある程度裏表があり、その狡猾な姿は日本で「狸」と呼ばれる人のイメージと似ていると言える。

5.2.2 動物としての日本の「狸」と中国の「貉」

日本において、「狸」は身近な野生動物であり、目のまわりにある黒い模様がちょうどパンダのように左右に下がっているために、垂れ目のような印象になっている。狸みたいな人は化けるのが上手であり、愛嬌があり、人にかわいがられる。

日本の狸は実際には中国で「貉」と呼ばれる動物である。中国の「貉」は化けたり、裏表があったりという細かいイメージがなくて、「悪者」とまとめて指す言葉である。四字熟語に「一丘之貉（同じ穴に棲む。全員は、悪者の仲間だ。）」という表現があるが、化けることと関係がない。

「たぬき」

イヌ科の哺乳動物。山地や草原に穴を掘ってすむ。古くから人を化かすと信じられた。毛皮は防寒用。毛は毛筆の材料とする。むじな。／対応中国語：貉、狸

（『日汉双解 学习词典』（2015：1028）外语教学与研究出版社）

「狸」語源

この語は本来ヤマネコを意味する。ニーダムらは爾雅・積獣の「狸」を豹猫（*Prionailurus bengalensis*、ベンガルヤマネコ、中国名豹猫）に同定している（中国古代動物史）。食肉目ネコ科の動物で、体長は50～65センチ。尾の長さは体長の半分もある。黄色の地に黒色の斑点がある。語源は斑点が筋をなしてきちんと並んでいる姿を捉えたものである。なお、ヤマネコを馴化したイエネコを猫といい、別名を家猫（かり）、狸奴（りど）という。

日本では『和名抄』が狸をタヌキと読んで以来、これが慣用されているが、読み間違いであった。タヌキを表す漢字は貉である。和語「たぬき」の語源は皮で手貫（たぬき）を作るからという（賀茂百樹）。

「貉」語源

イヌ科の哺乳類 *Nyctereutes Procyonoides*（タヌキ）を意味する。体形はずんぐりしている。四肢は短く、尾は太い。背は灰褐色で、中央に黒色が混じる。顔に八の字のような黒紋がある。驚くと仮死状態になる。これが「たぬき寝入り」の由来。中国では「よく睡を好む獣」とされて、とく寝ることを貉睡という。また、獾（アナグマ）と同じ穴に棲むとされ、「一丘之貉」の語がある。これが「同じ穴のムジナ」の由来。和名の「たぬき」は毛皮で手貫（籠手の類）を製したことによるという。和訓の「むじな」はアナグマの別名。アナグマとタヌキはよく混同された。なお貉がタヌキで、狸はヤマネコが本来の意味である。

（『動物の漢字語源辞典』 2007：17、140）

「狸」と「貉」の語源資料から見ると、「たぬき」という動物に対応する漢字は「貉」のはずであったが、実は、読み間違いであったことがわかる。中国に居る「貉」（日本の狸）は一体どういうイメージであろうか。

「貉」は、前文で述べたように「悪者」と思われる。漢字の形から分析しても、「豸」部のある漢字はほとんどが荒々しく凶悪な動物、例えば「豹」「貔」などである。つまり、「貉」の字は中国人にとって凶悪なイメージであり、普通使わない。さらに、中国では「貉」は日本の狸のように愛嬌がある、化けるなどのイメージを持っていない。中国であだ名を付ける時、「貉」は使わない。

つまり、中国では狸という動物が存在していて、中国語で「貉」という。ずるく裏表がある人にあだ名をつける際、日本においては特徴に基づき「狸」というあだ名にするが、中国では日本の狸に相当する「貉」ではなく、ほかの動物の狐に喩える。

5.2.3 あだ名としての中国語の「狐狸」と日本語の「狐」

前節に述べたように、狡猾で裏表がある特徴を表すならば、「狐狸」「老狐狸」というあだ名がよく使われるが、女のあだ名として使うと、狡猾な姿の上にさらに意味が加わった、「狐

狸精」「骚狐狸」というあだ名もある。


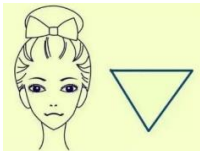
刘醒龙の小説『天行者』では「他说余校长不再是老狐狸了，而是狐狸精。老狐狸只会骗人，狐狸精却能迷人。（筆者訳：余校長はもう老狐狸ではなく、狐狸精になった。老狐狸は人を騙すことだけに長け、狐狸精は人を魅了する力を持っている。）」という描写がある。この文を分析すると、老狐狸は人を騙すが、狐狸精は人を騙す上で魅了術を使う。言い換えれば、「狐狸精」というあだ名は主に人を惑わすことを強調する。

「狐狸精」と呼ばれる人の描写と云えば、刘玉民の小説『骚动之秋』と格非の『江南三部曲』に「骚狐狸精（淫らな狐狸精）」という言葉がある。「骚」は「淫ら」という意味である。中国文化で狐狸精は淫らな女のイメージと結びついている。

筆者は動物「狐狸」の特徴とあだ名の関係を以下のようにまとめた。

表7 動物の狐狸の特徴とあだ名の関係

「狐狸」をあだ名として使う時、相手の性別、年齢、強調する意味によって、使い方も違う。以下の例文は BCC コーパスから検索したものである。訳文は筆者が訳したものである。

	性別	年齢	表す意味	あだ名との関係	例文
骚狐狸 狐狸精	女	無制限 「小狐狸精」と「老狐狸精」を使う場合は、ほとんど単純に異性をまどわす意味（狐狸精の意味）だけでなく、そんなに若いのに異性をまどわすことができる、こんな年になったのに、まだ異性	化けて、異性の心をまどわす狐みたい、淫らな女。	①顔 狐の顔型→「瓜子の顔型」「逆三角形の顔型」=美人の顔  ↓  逆三角形 ②特性 化けて、男を惑わす	准是那骚狐狸夜里勾引他。（筆者訳：きっとあの淫らな狐めは夜中彼を惑わした。） 你这个狐狸精 盯着男人不放、勾走男人的魂。（『朱門』林語堂） （筆者訳：この狐狸精め、男を引き付けて離さないで魂まで奪いやがって。） 他忍不住骂万站长是老狐狸，又骂蓝飞的母

		をまどわすことができる、という意味が含まれる。		<p>(文学作品でのイメージ) →淫らな女</p> <p>③特性 変身、化ける(文学作品でのイメージ) →女は化粧し、様々なきれいな服を着替える。</p>	<p>亲 藍小梅是 <u>老狐狸精</u>。(『天行者』劉醒龍)</p> <p>(筆者訳:彼は万駅長が老狐狸だと罵り、また藍飛のお母さんである藍小梅が老狐狸精だと悪罵した。)</p> <p>你知道那个 <u>小狐狸精</u> , 现在家事都由她管。(『京華煙雲』林語堂)</p> <p>(筆者訳:の小狐狸精を知っているだろう。今、家庭のことは全部彼女が掌握している。)</p>
老狐狸	男 / 女	通常は、30代以上に使う人が多い。「老」はずるさの程度が深いという意味。	あることでベテランになった、能力を使い、すごくずるい人である。	<p>化ける(文学作品でのイメージ) →裏表があり、ずるい人</p>	<p>都当他是 <u>老狐狸</u> 放长线钓大鱼的一出戏。(『茶人三部曲』王旭烽)</p> <p>(筆者訳:彼は老狐狸で、獲物を泳がせておき後で一気に捕まえる芝居である。)</p>

中国語の「狐狸」は日本語の「狐」の意味である。「狐狸」「老狐狸」「狐狸精」「骚狐狸」をあだ名としてつける時、ほとんど外見と関係なく、狐の性格の特徴や文化の特徴から考えて名づける。例えば、狐はずるいので、男女問わず、狡猾な人にあだ名をつける時、「狐狸」

という言葉で表す。「老狐狸」はずるさの程度が深いという意味合いがある。狐のずるさの上に、文化の特徴から考えると、女の媚びる姿を表した「骚狐狸」「狐狸精」というあだ名があり、主に淫らな女を指す。そして、中国文化において「狐狸」を女のあだ名として使う場合、一番悪印象をもたらすことになるであろう。「小狐狸精」と「老狐狸精」を使う場合があれば、ただ単純に異性をまどわす意味（狐狸精の意味）だけを表すのではなくて、そんなに若いのに異性をまどわすことができる、こんな年になったのに、まだ異性をまどわすことができる、という意味が含まれる。

中国語「老狐狸」「狐狸精」を日本語の訳本には一体どのように翻訳されているのか、以下のように示した。

表 8

猫城记(原文)	这么一来，老人们可得了意，老人们一样没有知识，可是处世的坏主意比青年们多的多。青年们既没真知识，而想运用政治，他们非求老人们给出坏主意不可，所以革命自管革命，真正掌权的还是那群 老狐狸 。青年自己既空洞，而老人们的主意又极奸狡，于是大家以为政治便是人与人间的敷衍，敷衍得好便万事如意，敷衍得不好便要塌台。
猫の国（訳文）	こうなると、年寄り連中は、わが意を得たりってことになります。年寄りたちだって同じように知識はないものの、世渡りの悪知恵だけは青年連中よりもずっと豊富ですからね。青年たちは本物の知識がないくせに、政治を運用しようなんて思うと、年寄り連中に頼んで悪知恵を働かしてもらわないことにはどうしようもないのです。ですから、革命をやるものは革命だけにかかりっきり、本物の元締めは相変わらず、あの 古狐 どもというわけです。青年自身には、中身がないし、年寄り連中の考えというのが、これまた極め付きの老獯とくれば、政治なんて言ったところで、人間と人間のごまかし合い、上手にごまかしたほうが万事意のまま、ごまかしが拙けりや、それでおじゃんになるものだ。

表 9

陆犯焉识（原文）	出版社发现陆焉识原来是个 老狐狸 ，把出版社利用了，现在他房产
----------	--

	到了手，什么承诺都可以毁。
妻への家路（訳文）	出版社は陸焉識は立派な <u>古狸</u> で、自分たちは利用されたことを知った。いま彼は不動産を手に入れたのだから、どんな約束も平然と反故にすることができた。

「老狐狸」に関する例文から見ると、面白いのは同じ中国語の「老狐狸」なのに、「古狐」と「古狸」という二つの翻訳があることである。両方とも、長く経験を積んだ老獯な人を表す。現代日本語書き言葉均衡コーパスを検索したが、日本の文学作品、社会新聞ニュースなどで、「古狐」のある文章はほとんどなかった。「古狸」についての文章は、「実権は宦官長だの將軍だのという古狸のような側近に握られていました。」「チャーチル、トルーマン、スターリンの三人も、レンナーという狡猾な古狸の本心はまだ分りようもなかったのである。」「政治界の妖怪古狸をやっつけて日本をたて直すジャンヌ・ダルクを演じるつもりです。」などの例文があった。このような例から考えれば、人を動物のイメージにする時、「狸」を使用することは日本人の文化に適合にしている。一方、中国の場合、悪知恵を働く、ずるい人を描いている「老狐狸」（狐）の方は中国文化にぴったりだと思う。

表 10 「狐狸精」の例文

活动变人形（原文）	呸！你勾画的那个影，只有去窑子里找去！我是正经人家、知书知礼的人家的闺女！我怎么能做那种卖弄风情的 <u>狐狸精</u> ！你也太狂了，太云山雾罩了，你总该睁开眼睛四下里了一了。人家都野蛮，人家都齷齪，人家都白痴。连我们的爹妈祖宗全都白痴，就你一个人文明！就你一个人文明！
応報（訳文）	フン、貴方の思い描く幻の女は、女郎屋にでも探しにくいのね！私はまともな家柄、学問礼節をわきまえた家の娘です。男にこびる <u>娼婦</u> のような真似はできないわ！正気の沙汰ですか、いい加減目を醒してしっかり周りをご覧ください。人はみな野蛮で、クソ食えで、白痴だなんて、私の父母先祖までみんな白痴で、貴方一人だけが文明的、貴方一人だけがね！
朱门（原文）	“你这个小巫婆、丫头、 <u>狐狸精</u> ，如果你心不甘情不愿，那就不要

	做好了。你简直忘了自己的出身。当初要不是我收留你，现在你也不知道在哪里呢！穷人家的丫头片子！你这个 狐狸精 盯着男人不放、勾走男人的魂、凭你淫荡的…”太太说。
朱門（訳文）	「本当に小僧らしいね。あんた、女中だろ。それとも 狐の精かえ 。そんなに私の仕事をしたくないなら、今すぐここをやめてもいいんだよ。身の程知らずもいい加減にしたらどうだね。私が最初に雇ってやらなければ、あんたなんかここにはいられなかったんだよ。貧乏人の女中風情のくせに！ 狐の精 は男を掴んで放さないっていうからね。男の魂まで抜き取るんだろ。淫売と同じだよ……」と夫人は罵りだした。

以上の例文から見ると、中国語の「狐狸精」は日本語で翻訳する際、直訳の「狐の精」と意識の「娼婦」になっている。「狐の精」の言葉だけで表現すれば、化ける狐のイメージだけと思われ、実際の「狐狸精」の淫らで媚びる姿、男を惑わす魅了術などが伝えられない。実は、「狐狸精」は中国であだ名として女のイメージを表す時、よく使われ、何も説明しなくても、このような女の媚びる姿も想像できる。もう一つの例文の中では、「狐狸精」を意識して、「娼婦」になっている。文脈に従って、女郎屋に言及したので、「娼婦」に翻訳することは間違いではない。現代中国語では、「狐狸精」は淫らな女を表すが、水商売の女を特定して指すことはない。

例文の中、「狐狸精」のイメージを豊富にするため、補助の描写が幾つかある。例えば、「男にこびる」、「男を掴んで放さない」、「男の魂まで抜き取る」、「淫売」など。これらは一般に思われる「狐狸精」の特徴と一致している。日本語には「女狐」という言葉もある。コーパス資料より検索した際、「この淫売（インバイ）！」、「売女（バイタ）！！」、「女狐（メギツネ）！！」とかね。」という例文があり、この点においては、「女狐」は中国語の「狐狸精」の意味と近いと思う。しかし、日本語の「女狐」は主に女の悪知恵や狡さを強調するが、中国語の「狐狸精」は主に淫らな女を表現している。

5.2.4 あだ名と文化背景の関わり

なぜ同じ裏表がある人を表すが、日本においては狸に喩え、中国では狐に喩えるのか、日中文化の差異に関わると思う。

狸についての民話はいろいろとある。狸の話と言えば、日本人なら誰でも子供の頃に聞いたはずである。一つは「かちかち山」、もう一つは「ぶんぶく茶釜」である。

「かちかち山」の話について、高槻（2016:68）では、「話し手の背景にタヌキやウサギを見た時に受けた印象があったと考えるのが自然であろう。タヌキの垂れ目は、どこか悲しさを連想させるところもあるから、話し手はそういう脚色をしたかもしれない。そしてこの話を聞いた子どもは、この話を通じてタヌキに対してイメージを湧かせたであろう。ウサギに負けて悲しそうにするくだりを聞いた子どもは、タヌキは弱い動物なのだと感じるであろう。」と述べている。

確かに、狸の垂れ目から悲しさを連想させられる。話を聞く前に、狸に対するイメージもある程度形成される。しかし、狸が弱いというイメージは話から感じられない。話だけから見ると、狸は完全に悪役の設定だと思われるが、反対にウサギの方が英雄だとは言えない。なぜなら、仇を取る手段が残酷すぎるからである。この話は、おじいさんにおばあさんの汁を食べさせることから、ウサギが仇を取る手段まで、すべて残酷な内容の話である。そして、狸とウサギのマイナスイメージのバランスがとられてしまった。そのために、この話で、狸の設定は自業自得の悪役であるはずであるが、人に憎まれるまでにはなっていないと思う。

さらに、「ぶんぶく茶釜」。この話において、狸の悪いイメージは完全には描かれていない。焼かれた狸は体が茶釜のままになってしまったが、恩返しの間抜けな狸の姿を単純に描いている。

二つの話に共通しているのは、狸が化けるということである。いろいろなものに変身でき、人を騙す。

昔話の中で、狸は人を騙す、化けるものであった。狸に対するイメージは良いイメージと悪いイメージの両方ある。昭和10年に、京都の陶芸家の藤原鏡造が作ったユーモラスな狸の置物がある。ギョロツとした目に大きなお腹、笠をかぶり片手に徳利、片手に大福帳を下げ、やたらにでかい金玉というかわいい姿である。確かに、かわいい姿と縁起の良い狸の置物が人気になってきた。現代の日本人にとって、狸にはたまに畑を荒らすことがあるが、垂れ目の可哀そうな目つきと太鼓腹の可愛らしいさがあり、悪者というイメージはあまりない。狸を人のあだ名に付ける時にも、化かして人を騙すというイメージは、狸のように、異なる状況で姿を変え、柔軟に対応できることを強調する。このずるさ、化けるイメージに、おっとりとした姿、可愛いらしさも含めて考え、名づけられると思う。

中国では、ずるいイメージと言えば、狐の印象が一番頭に浮かぶ。イソップの「カラスと

キツネ」と中国の故事成語「虎の威を借る狐」の話は誰でも子供の頃に聞いたことがあるだろう。

「カラスとキツネ」のあらすじは以下の通りである。カラスが大きな肉をくわえて高い木にとまった。いざ食べようとしたときに狐に声をかけられ、容姿についていろいろと褒められる。カラスは肉を食べることを忘れ、しばし聞き入ってしまう。そして狐が「きつと素晴らしい声をしているんだらうなあ。ああ、声を聞いてみたい」と言うと、カラスは「カー」と高らかに鳴き、くわえていた肉は下にいた狐の口に収まってしまう。

「虎の威を借る狐」のあらすじは以下の通りである。トラが獲物を探している時キツネを捕まえ、これを食べようとした。キツネは「あなたは私を食べるわけにはいきませんよ。なぜなら私こそ天帝が百獣の王としてこの世に遣わされたものなのですから。あなたが私を食べたら、天の命令にそむくことになりましょう。もしそんなことは信じないとおっしゃるなら、私のあとについてきてみてください。百獣たちは私を見てみな逃げていってしまうでしょう。」と言った。トラは「わかった」と言い、キツネとともに歩いていった。百獣はその様子を見てみな次々に逃げ去っていく。しかしトラはそれらが自分を恐れて逃げていくことに気づかず、キツネを恐れて逃げていくのだと思うのであった。

「カラスとキツネ」と「虎の威を借る狐」は両方ともよく知っている話であり、小学校の教科書にも載せられている。これらの話は優しそうな顔で甘い言葉ばかり言いながら、心の中で何かを企んでいる狐のずるさを十分に描いている。「狐狸（きつね）」をあだ名として使う場合、さらに「老狐狸」この言葉を使う時、ほとんどがマイナスイメージであり、人のずるさを強調している。

日本で狐はずるいものと思われるだけではない。神使として扱われることもある。

中村（2001）と中村（2003）に基づいて、狐のイメージの変遷（古代—近世）を以下の表7ようにまとめた。

表 11 狐のイメージの変遷

時期	イメージの変遷
古代	白狐瑞兆 ↓ 瑞兆視が消滅する。 狐の怪異と見る観念が発達した。（中国から妖狐のイメージが入ってきたことと

	関連する) ↓ 狐の信仰が始まる ①狐の子孫伝承 ②農耕信仰 ↓ 妖狐と狐神の観念 狐憑きと狐落としの話 善悪両方の狐のイメージ
中世	狐とダキニ天のコンビが稲荷と縁を結ぶ。狐→霊獣 ↓ 支配階級における狐憑き騒動 ↓ 狐と陰陽道の結び ↓ 関東に稲荷信仰が入り、次第に狐信仰を吸収していった。 狐—稲荷—仏教—僧侶の連鎖の成立
近世	狐付きの記載が頻出した ↓ 近世江戸における稲荷社は、狐信仰を基盤として発達した。 農耕神の稲荷—狐信仰も、商業繁栄の神とみなされるようになる。

現代に至るまで、狐のイメージは文学作品によく見られる。筆者は KOTONOHA 現代日本語書き言葉均衡コーパスに基づいて、狐のイメージを以下のように考える。

現代：

- ① 稲荷信仰は残されている。稲荷神の話はよく知られている。
- ② 文学作品の中で、狡猾は狐の最大な特徴になっている。下の例文でも、狐のイメージは狡猾な悪者か信用できないものになっている。

シーマンというのは狐のように狡猾な男だった。

(『遺産』D.W.バッファ|著、二宮馨|訳)

個人的な感情を抜きにすれば、それは狡猾な狐を鶏小屋へ招待するようなものだ、と分かっていたからだ。

(『遠ざかる祖国』 逢坂剛)

「あの頭のでっぺんから出すきいきい声は、最初から信用できない奴だと分かっていた。虎の威を借りる狐なんだ」高井は、いまいましげに言った。

(『黎明の艦隊』 檀良彦)

現代の日本では、狐に対するイメージは狐文化の伝承と現代文学作品の影響で稲荷信仰や人を騙す狡猾な印象がある。「狐みたいな人」と言えば、狐の見た目や性格のみで、人を評価している。見た目から考えると、狐の見た目の特徴は目が長細く、吊り上がる。そんな顔の人はよく「狐」をあだ名にされる。他方では、狐の特徴から考え、上手にずるく、人を騙し、利益を取る狡猾な悪者を「狐」というあだ名にする。

塚本(2014)の調査の中にも、「きつねと友達になりたくない」、「きつねは最後に裏切りそうだ」、「きつねはずるそうだ」などネガティブな印象が多く記述されていた。

つまり、日本人にとって、「狐」は「狸」と比べ、化けるイメージよりは、ずるく狡猾なイメージが強く、悪者の代表者と思う人が多い。「狸」は人を騙して化けることがあるが、途中でばれることもある。逆に、「狐」の方は化けることもあるし、人を騙す特徴もあるが、最後までばれない、上手にずるく、陰険なところもあると言える。

日本人にとって、狐は、稲荷信仰の神使のイメージ以外、中国から伝えられた伝説で人を化かす悪いイメージが存在し、さらに、イソップの話の影響で、狐に対するイメージはもっと悪くなっているため、プラスイメージと思う人がほとんどいない。特に、「狐」をあだ名にする時、ほとんど狐の狡猾さという特徴に注目している。化ける人を表すため「狸」と「狐」をあだ名にする時、両方使えるが、「狐」のイメージはすごく悪く、単に化けることだけでなく、ずるく、人を騙し、裏切ることも表すので慎重に使う。「狸」をあだ名として使うなら、化けるというイメージを十分に伝えた上で、「狸」のまん丸とした顔、垂れ目、愛嬌がある姿、太鼓腹の可愛らしさも含まれ、イメージ的には「狐」より柔らかくなっている。このような理由で、日本人にとって、あだ名を付ける場合、「狸」は「狐」より多く使われると思う。

中国における狐のイメージは日本より豊富である。昔は、中国でも神様とみなされていた。現存の日本の狐神使のイメージは中国から伝わってきたのである。しかし、時代の流れで、狐に対するイメージが変わってきた。

戦国時代の作である『山海経・海外東経』に「青丘国在其北，其狐四足九尾。（筆者訳：北の方にある青丘国で、狐がいる。この狐は足が四本、尻尾が九本ある。）」とある。『呉越春秋』には「禹三十未娶，行至塗山，恐时之暮，失其制度，乃辞云：“吾娶也，必有应矣。”乃有九尾白狐造于禹。禹曰：“白者，吾之服也；其九尾者，王者之证也。”塗山之歌曰：绥绥白狐，九尾庞庞。（筆者訳：禹は30歳になったが結婚していない。しきたりに反する恐れがあり、神に祈る。塗山に行って、白い九尾の狐と会った。禹は、「白は我々が尊重する色である。九尾は王者の印である。」と言った。数日後、禹は塗山の女と結婚した。禹の妻が九尾の狐の化けたものだという話もある。）」このように、狐は中国の先秦・両漢時代には良い兆しのある動物として認められていた。

しかし、漢代以後、「狐狸（きつね）」のイメージは急激に悪くなっていく。文献資料、文学作品などで、「狐狸（きつね）」に関する良い兆しのある言葉もどんどん減っていく。逆に、狐を悪い妖怪にする話は増えていた。『説文解字』の記述「狐，妖兽也，鬼所乘之。（筆者訳：狐は妖怪、怪獣である。鬼に乗られる。）」によると、狐に対する解釈は「良い兆しのある神様のような生き物」から「恐ろしい怪獣」になった。さらに、話の中での狐に対する記述も悪いイメージを伝えている。前漢の『列女伝』に述べられた妲己は中国の九尾の狐の代表である。狐が化けた妲己は殷の紂王を惑わし、賦課を重くして、酒池肉林にふけり、反対する者に炮烙の刑を行い、国を滅ぼした、古代中国の悪女である。『搜神記』の記述によると、「狐者，先古之淫妇也，名曰阿紫。（狐は、昔から男を惑わす女である。名は阿紫である。）」、清朝時代の『聊斋志异』では、さまざまな独特な性格と豊かな感情を持つ「狐狸」が化けた女の姿を描いており、イメージ的には悪くはないが、狐の化身と人を惑わすという印象は変わっていない。

上記述しているのは主に雌の狐のイメージであり、化けて人を惑わす特徴を中心にしている。主に淫らな女を指している。

5.2.5 結び

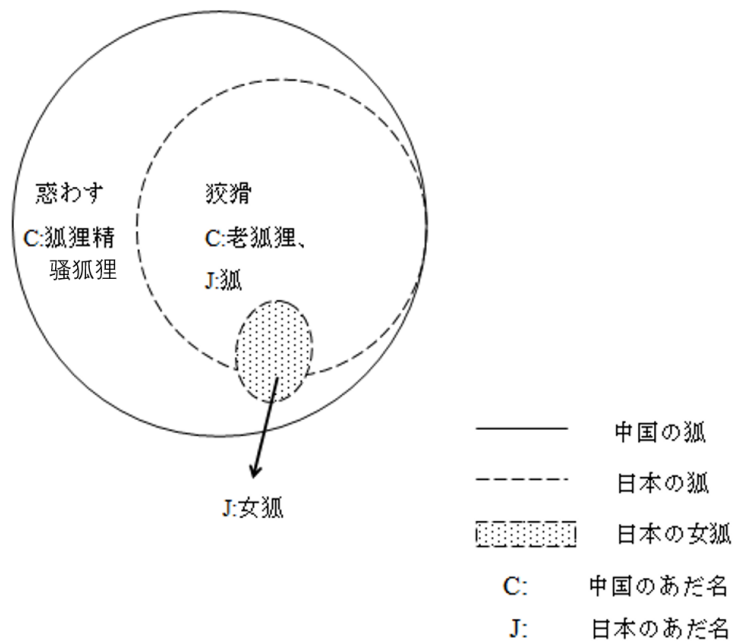


図 16 あだ名としての、日中の狐の比較

中国の狐と日本の狐を比べて、イメージでもあだ名としての表現でも、中国の方は日本より幅広いと思う。中国語の「狐狸精」は狡猾でするいという意味を持ち、「男を惑わす女」の特徴を鮮明に表している。日本の文献資料に「女狐」という言葉が存在しているが、現代社会ではあだ名として、ほとんど使わなくなった。使ったとしても、「男を惑わす」よりもむしろ「女のずる賢さ」を強調している。しかし、中国では、「狐狸精」は女性のあだ名として普通に使われており、特に、女の媚びる魅了術を強調している。一方、「狐」を男のあだ名として使う時、イメージ的には日中どちらも人のずるさを表し、ほとんど同じだと思う。

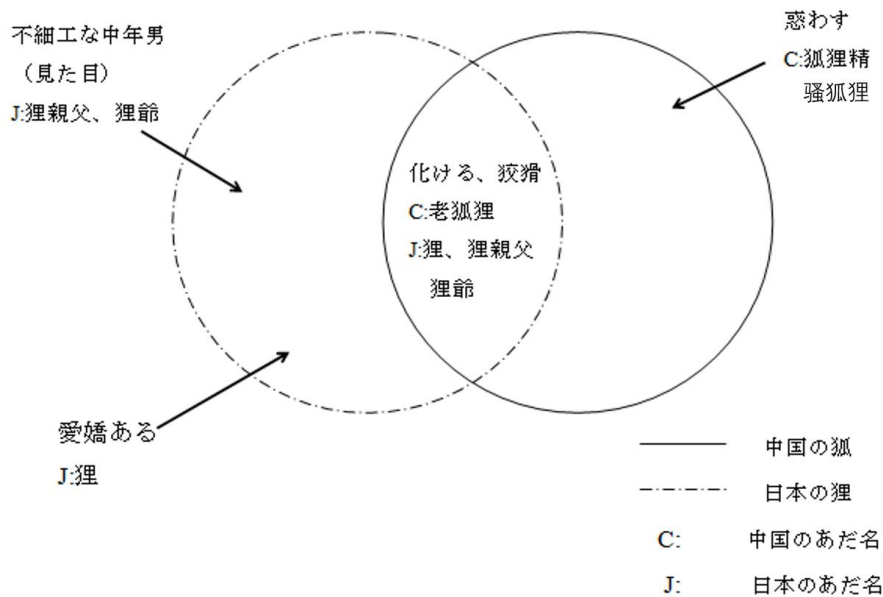


図 17 イメージとしての中国の狐と日本の狸

裏表があり、狡猾な人にあだ名をつける時、中国語では「老狐狸」、日本語では「狸」「狸親父」がよく使われている。同じタイプの人を表す際に、日中両国では文化の違いによって、「狐」と「狸」という二つの異なる動物を比喩対象として用いている。動物のイメージとして、両国の文化の中で一致する部分（狡猾）はあるが、独自の特徴（狸の愛嬌、不細工な狸姿、狐の魅了術）もある。日本で狸は愛嬌があるため、狡猾なイメージは狐より弱い。そして、あだ名として使う際に、日本語の「狸」「狸親父」は中国語の「老狐狸」より否定的要素が少ないと思う。さらに、中国語で「狐」の付く女性のあだ名の中で、「狐狸精」という言葉は中国文化の妖狐の影響から最も悪印象をもたらすものであろう。

5.3 日中の「虎」のイメージとあだ名

中国の古典小説『水滸伝』の登場人物は「花项虎」、「跳涧虎」、「笑面虎」、「插翅虎」、「青眼虎」など「虎」をあだ名にする人が少なくない。日本においては、戦国大名武田信玄と上杉謙信がその武威からそれぞれ「甲斐の虎」、「越後の虎」と後世でも呼ばれる。

中国のあだ名では「虎」に関わるあだ名がたくさんあり、勇猛な特徴だけではなく、虎の表情や形態、性格、性別によって「老虎（怒りやすく、凶悪な人）」、「母老虎（怒りやすく、凶悪な女）」、「笑面虎（本性を隠し、偽りの親切を見せる人）」、「紙老虎（見掛け倒しな人）」、「虎子（素朴で実直的でむてっぽうな性格を持つ男）」、「虎妞（素朴で実直的でむてっぽうな性格を持つ女）」などがある。

独特な日本文化の影響を受けた、泥酔者を虎に喩えた「大虎」と主体性がない人に喩えた「張り子の虎」もある。

本節では、日中両国の「虎」のイメージに基づきつけられたあだ名を詳しく分析する中で、両国文化の共通点と相違点を研究したいと思う。

5.3.1 あだ名としての日中の「虎」

① 虎の逞しい体や勇猛な姿、力が強い及び山の君主という特徴に基づきあだ名をつける

日本では戦国大名武田信玄や上杉謙信が、その武威からそれぞれ「甲斐の虎」、「越後の虎」と呼ばれ、「虎」に喩えられている。

「甲斐の虎」は甲斐（現在の山梨県）を支配していた武田信玄のあだ名である。武田信玄は戦国最強の騎馬隊を有し、上杉謙信と並んで無類の強さを誇る将であった。「竜虎相搏つ」ということわざがあり、これは同じくらいの優れた実力を持つ英雄や強豪同士が勝敗を争うことのたとえである。そのため、有能な英雄や強豪を「虎」に喩えることは珍しいことではない。

同じ虎に喩えられた上杉謙信は越後（現在の新潟県）を支配していたため、「越後の虎」と呼ばれる。「越後の虎」というのは謙信の初名である「長尾景虎」からとったという話がある。また、上杉謙信は「越後の龍」と呼ばれることもある。これは、謙信が合戦の際に「龍」の旗印を使用していたからである。

川中島の戦いでの激闘にみるように、信玄とライバル上杉謙信との優劣はつけがたい。竜と虎は強い動物の双璧のたとえである。「虎」と「竜」を恐ろしい強い者のあだ名として呼んでいる。

現在に至るまで、虎に対しての力強いパワーの持ち主というイメージは変わっていない。日向小次郎は、高橋陽一の漫画『キャプテン翼』に登場する架空のサッカー選手である。豪快な突破力と強力なシュートに優れ、努力型天才ストライカーである。そのパワーと闘志あふれるプレイや必殺技のため「猛虎」と呼ばれる。

一方、中国においても、虎の逞しい体や勇猛な姿、力が強いという特徴に基づき人にあだ名をつけることもある。典型的なあだ名と言えば、『水滸伝』に登場した豪傑のあだ名である。

「力健声雄性粗卤，丈二长枪撒如雨。邨中豪杰霸华阴，陈达人称跳涧虎。」

（『水滸伝』）

(筆者訳：力が強く、声が太い。行動が荒っぽい。長い槍は雨のように動きが速い。鄴では豪傑が華陰を制覇して、陳達は「跳涧虎（谷を跳ねる虎）」と呼ばれている。)

「拽拳神臂健，飞脚电光生。江海英雄当武勇，跳墙过涧身轻。豪雄谁敢与相争。山东插翅虎，寰海尽闻名。」

(『水滸伝』)

(筆者訳：腕を引っ張ると逞しい腕が見える。足をけりあげると稲光がみえる。江海の英雄は武勇となり、塀を跳んで谷間を渡る時に軽やかである。豪雄の中で誰が争うことができるか。山東省出身の「插翅虎（翼がある虎）」は、世界的に有名である。)

「赤发黄须双眼圆，臂长腰阔气冲天。江湖称作锦毛虎，好汉原来却姓燕。」

(『水滸伝』)

(筆者訳：赤い髪に黄色い髭があり、目はぎょろっとしている。腕や腰ががっしりとして勢いが空に届くほどに強い。世間では「锦毛虎（りりしい容貌がある虎）」と呼ばれ、この気性のさっぱりしたよい男は苗字を燕と言う。)

以上は『水滸伝』に登場した人物についての描写である。「跳涧虎」、「插翅虎」、「锦毛虎」は豪傑三人のあだ名として各自独特な特徴を描写している。中国にしても日本にしても、「虎」はよく豪傑のイメージと結びついて、あだ名として使われている。『水滸伝』全書では「虎」に関わるあだ名がたくさんあり、先に述べた三つ以外に、矮脚虎、青眼虎、中箭虎、花项虎、虎威大将、金眼虎、龙虎二将なども記載されている。主に虎の見た目の特徴に基づいて付けたあだ名である。例えば、たくましい体や強いジャンプ力、りりしい眼差しなどである。

同じく中国の小説で四大奇書の一つである『三国志』で、諸葛亮の「臥龍」や龐統の「鳳雛」のように司馬懿にも「塚虎（墓の虎）」というあだ名がある。「朝廷で機会を伺っている虎」という意味で賞賛の込められたあだ名である。龍と虎はライバルとしてよく対にされる組み合わせである。また「司馬」と「諸葛」が共に中国では珍しい二字姓であることもあって、あだ名でも二人の特別なライバル関係を更に強調したように見える。勇猛果敢な性格で

あり、力が強く実力があるが、機会を伺っているのである。

許褚は曹操の近衛隊長であり、「虎痴」と呼ばれている。『三国志』では「许褚字仲康, 谯国谯人也。长八尺余, 腰大十围, 容貌雄毅, 勇力绝人。(筆者訳：許褚は字を仲康といい、谯国の出身である。身長は八尺(180cm以上)あり、腰回りは十围(110cm以上)である。容貌が雄々しく、人と比べ圧倒的に勇猛である。)」という描写がある。牛の尾をつかんで百歩(140m以上)引きずって歩いたことも記述されている。『三国志』の記述「军中以褚力如虎而痴, 故号曰虎痴。(許褚は虎のように力があるが普段はぼんやりしているから、軍中では虎痴と呼ばれている。)」によると許褚が虎痴と呼ばれる理由は、虎のようにたくましい体があり、力が強いが、一方で性格は慎み深く寡黙だった。日頃はぼんやりしているように見えたことから、軍隊の中で虎痴とあだ名とされていた。

今に至るまで、文学作品の中に虎に関わるあだ名はよくある。倪方六の小説『中国人盗墓史』には「当地有个外号叫“小老虎”的土匪刘振山, 纠集上百人, 公开对金陵进行盗挖。(筆者訳：地元には「小老虎」というあだ名の匪賊が居る。劉振山である。彼は百人を集めて、金陵を盗掘する。)」という文がある。現代中国語で虎は「老虎」とも言う。虎は山の君主と称されている。この匪賊は、地元で覇を唱える君主である。したがってこの匪賊は虎の山の君主のイメージと似ているため、虎に喩えられ、「小老虎」と呼ばれる。

中国において地元で覇を唱える人は「虎」と呼ばれることが多い。虎の行動範囲を一つの領域とすれば、虎はその地域で覇を唱える山の君主である。虎のイメージに基づき、地元で覇を唱える人のことを表す。しかし、日本では虎は在来種ではなく、「山の君主」と言うと、本来日本に居る動物のイノシシ、熊などを連想することが多い。そのため、中国と違い、日本では山の君主という特徴に基づいてあだ名をつけることがほとんどない。

② 虎が怒りやすく、凶悪で威嚇するイメージに基づき人にあだ名をつける

「蒋纪周用的第一个中层干部是外号“老虎”的陈师傅。这位 40 多岁的老技工平时谁也不买帐, 看到不顺眼的事就发火动气, 怕他的人真不少。」

(1994 年報刊精選)

(筆者訳：蒋紀周が初めて任用した中級幹部は「老虎」をあだ名とした陳である。この 40 代のベテラン技術者は普段誰の言行にも応じず敬服しない。自分が気に入らないことを見たらすぐ怒り出す。彼を恐れている人が少なくない。)

「外号张老虎的训育主任找我去盘问，我矢口否认，但还是受到了严厉的警告，并勒令我不准离开校门一步。」

(1998年人民日报)

(筆者訳：「張老虎」をあだ名とした訓育主任は私に問い詰めた。私はきっぱり否認したが、厳しい警告を受けた。なお校門から出てはならないと命じられた。)

中国では虎は荒々しく凶悪な動物だと思われている。中国語では「伴君如伴虎（君主に仕えるのは虎に仕えるがごとし）」という言葉がある。君主に仕えるのは虎に仕えるのと同じという意味である。君主の喜怒哀楽はしょっちゅう変わるもので、いつも身の危険があるという意味である。喜怒哀楽を把握しにくく怒りやすい人は、よく虎に喩え、「老虎」と呼ばれる。なお、中国語では「苛政猛于虎（苛政は虎よりも猛し）」とも言われる。百姓に対する厳しい政治は虎より恐ろしいものなのである。政治の過酷さと虎の恐ろしさを並べ、言い換えれば、実は虎は恐ろしいものの代表者と考えられているということである。虎の恐ろしさに基づき、人のことを虎に喩え、人の厳しさや凶暴な姿を表している。

- ③ 同じく虎の怒りやすく凶悪で威嚇するイメージに基づき女性にあだ名をつけるなら、「母老虎」というあだ名になる。

『水滸伝』に出てくる登場人物顧大嫂のあだ名は「母大虫」であり、雌の虎という意味である。顧大嫂について以下のように描写されている。

「眉粗眼大，胖面肥腰。」

(『水滸伝』)

(筆者訳：眉毛が太く目が大きい。顔が大きく腰が太い。)

「有时怒起，提井栏便打老公头；忽地心焦，拿石碓敲翻庄客腿。生来不会拈针线，正是山中母大虫。」

(『水滸伝』)

(筆者訳：時々怒って、井戸のわくを取って旦那の頭を打つ。急にいらいらして、石臼を持って小作農の足を叩く。女だが針仕事ができない。まさに山の中にいる「母大虫」である。)

この顧大嫂のあだ名は「母大虫」であるが、実は中国語では母大虫は「母老虎」と同じ意味である。鄭（2005）の記述によると、唐の李肇による『唐国史外』の卷上にも「大虫老鼠，俱為十二相属（虎も鼠も十二支にある）。」という記述がある。「老虫」や「老大虫」も虎の別称であるが、これは「大虫」から来たものである。つまり、「母老虎」と「母大虫」は同じように扱われる。気が短い、怒りやすい、声が大きいい、表情が怖い、人が恐れている等の女性のことを「母老虎」「母大虫」と言う。

「母大虫」と呼ばれる顧大嫂は見た目はいかつい顔であり、体もスリムではない。性格やしぐさと言え、怒りやすくて、不満があればすぐ殴るなど、豪放で粗野な女である。このような女の姿が「母大虫」というあだ名と結びついている。

『水滸伝』にある人物顧大嫂以外に、「母老虎」に関する描写や「母老虎」をあだ名とした人物についての描写もたくさんある。以下の例文のように凶暴な姿を表している。

「陆小凤叹了口气，苦笑道：“小姐是条母老虎，想不到丫头比小姐还凶，若不是我机伶，现在身上说不定已多了十七八个洞。”」

（『陆小凤传奇』古龙）

（筆者訳：陸小鳳はため息をついて、「お嬢さんは母老虎です。下女はお嬢さんよりもっと凶暴な人です。私が気の利く人でなければ、今までに17、8回は刺されているかもしれない。）」

「她婆婆是个有名的“母老虎”，刁得象锥子似的尖。一时做不到，不是打就是骂，谁也不拿她当人待。」

（『苦菜花』冯德英）

（筆者訳：彼女の義理のお母さんは有名な「母老虎」である。きりのように言葉がとげとげしい。すぐにできないと義理のお母さんに殴られ、あるいは叱られ、誰も彼女のことを人として扱わない。）

「母老虎一把抓住母亲的前襟，猛地一揪，哗啦一声撕下一大块。」

（『苦菜花』冯德英）

（筆者訳：母老虎は母親の胸ぐらをつかんで、シュッと服を大きく引き裂いた。）

一般的な女性のやさしくて弱々しいイメージと違い、「母老虎」と呼ばれる人は粗野なふるまいで、人を殴ったり叱ったりすることがよくある。前節で述べたように、中国語の「母老虎」は日本においては暴れた馬に喩え、「じゃじゃ馬」という。しかし、同じ女のことを表すが、「母老虎」は怒りやすく凶悪な面を表し、日本語の「じゃじゃ馬」はわがままという特徴を表す。さらに、日本語の「じゃじゃ馬」はおてんばの娘を表すことが多いが、中国語の「母老虎」は既婚女性のことを表すことが多い。

- ④ 基本的には虎は荒々しく、凶悪で恐ろしいイメージを人に与える。しかし、見た目は虎のように凶悪で恐ろしいイメージであるが、実際は弱々しく見掛け倒しな人は「紙老虎」と呼ばれる。

「辽宁小将罗男没有在女子 100 米蛙泳决赛中给世界冠军罗雪娟造成特别大的威胁,因此有人调侃称她为“纸老虎”。」

(新華社による 2001 年 11 月の新聞記事)

(筆者訳：結局、遼寧出身の羅男さんは女子 100 メートル平泳ぎの決勝で世界チャンピオンであるライバルの羅雪娟さんに大きな脅威を与えなかったので、「紙老虎(張り子の虎)」と呼ばれた。)

例文から見れば、羅男さんは決勝で一番有力な優勝候補であったが、100 メートル平泳ぎの決勝で負けたので、「紙老虎」と呼ばれて揶揄された。中国の紙老虎は、竹や木などで組んだ枠に紙を張りつけた虎の形の置物やおもちゃである。中は空洞で、外観より軽く感じられる。つまり、表は凶悪な虎の形で怖そうだが、実際に使った材料が主に竹や紙などであるので、破れやすくて、見掛け倒しなのである。それで「紙老虎」をあだ名として使う時に、見かけだけ強くて、本当は弱い人を喩えている。この新聞記事の最後に、「紙老虎」と呼ばれて悔しかった羅男さんは「走着瞧, 看谁是纸老虎。(今に見てろよ。誰が「紙老虎」だ?)」と言いながら、200 メートルの決勝で勝った。そうして、羅男さんは実力で自分が紙老虎ではないことと証明して「紙老虎」というあだ名を取り去った。

中国語の「紙老虎」を日本語で表すと、「張り子の虎」という。日本語の故事ことわざ辞典では「張り子の虎とは、主体性がなく人の言うことにただ頷いている人や、首を動かす癖

がある人のこと。また、弱いくせに虚勢を張っている人のたとえ。」とある。

中国語の「紙老虎」と比較すると、弱いくせに虚勢を張っている人のたとえは同じであるが、主体性がなく人の言うことにただ頷いている人や、首を動かす癖がある人を指すのは日本文化には特有なものである。なぜなら、元々張子の虎の形が日本と中国では異なるからである。

香川県三豊市観光交流局のホームページの記述によると、日本の「張り子の虎」は中国の虎王崇拜が日本に伝わり、作り始められたと言われている。虎はその昔から勇猛果敢な動物であり、虎の武勇にちなんで、子どもの健やかな成長を祈る気持ちを込めて端午の節句や八朔祭の縁起物として飾られている。日本の張り子の虎は首を振る動きが工夫されている。それゆえ、日本で生産された張り子の虎はほとんど首が動く。しかし、日本と違い、中国の張り子の虎のおもちゃは首振りのタイプではなく、単に紙で作られたものというイメージである。以上から、日本語の「張り子の虎」は主体性がなく人の言うことにただ頷いている人や、首を動かす癖がある人に喩えることがあると明らかになった。

⑤ 裏表があるが、虎のように凶悪で恐ろしい姿が表なら「紙老虎」と言う。逆に、裏側が虎のように凶悪で恐ろしい姿であれば、「笑面虎」と言う。

『水滸伝』の登場人物朱富も「虎」が付くあだ名を持っている。「笑面虎」と言う。宋代の庞元英は『谈藪』で「先墓在会稽西山，为掌墓人奚泗所发，公衮诉之郡，杖之而已，公衮愤甚。奚泗受杖，诣公衮谢罪，公衮呼前劳以酒，拔剑斩之，持其首诣郡……公衮性甚和平，居常若嬉笑，人谓之笑面虎。」と述べている。王公衮は北宋の官吏であり、烏江尉という職を務めたことがある。王公衮の母の墓は、無頼嵇泗徳に盗掘された。王公衮は死刑を求刑したが、嵇泗徳は、兵役で辺境に行かされただけで済んだ。悲憤の下、王公衮は嵇泗徳が捕らえられた獄中に入り、わざと獄卒と酒を飲みながら懇談し、獄卒を酔わせた。その後一気に嵇泗徳を殺した。王公衮は普段ニコニコして優しそうで人を殺せると思えないため、世間では「笑面虎」というあだ名で呼ばれた。

「李文华人称“笑面虎”，平时很会做人，谁的坏话也不讲」

（『杜拉拉升职记』李可）

（筆者訳：李文華さんは「笑面虎」と呼ばれている。普段彼はとても上手に身を処する。誰の悪口も言わない。）

「他历练得为人十分灵活而且善于处理各种关系，平时见人未曾开口先带三分笑，人称笑面虎。李文华比较有城府，平时轻易不肯得罪人，小事情上不计较能吃亏，顺便的话也愿意帮人家一把。」

（『杜拉拉升职记』李可）

（筆者訳：彼は非常に融通が利き、いろんな関係を適切に処理できる。彼はいつも人と会ったら何も話さずただにニコニコしている。それで「笑面虎」と呼ばれる。李文華は他人に対する警戒心が強い人である。普段は人を怒らせない。小さなことで損をすることを気にしない。ついでに、人を助けてあげることができる。）

「这种方法在内地原很普遍，但冯云卿是有名的“笑面虎”，有名的“长线放远鹞”的盘剥者，“高利贷网”布置得非常严密，恰像一只张网捕捉飞虫的蜘蛛，农民们若和他发生了债务关系，即使只有一块钱，结果总被冯云卿盘剥成倾家荡产，做了冯宅的佃户。」

（『子夜』矛盾）

（筆者訳：この方法は内陸ではよくあるやり方である。馮雲卿は有名な「笑面虎」であり、有名な搾取者で、高利貸しの手配りは非常に周到である。網で虫を捕らえるクモのようである。農民たちは彼と債務関係があれば、たとえ一円の借金でも、結局は馮雲卿に搾取されてすべての財産を取られ、馮家の小作農になってしまう。）

表向きはにこにこしていて優しそうだが実は冷酷であり、いつ牙をむくか分からないことを形容する。笑顔の裏側に何を企んでいるが分からない。笑顔の仮面の下に恐ろしい本性を隠し、偽りの親切を見せる人に「笑面虎」というあだ名を付ける。

⑥ 前文では虎は勇猛果敢な姿だからこそ、豪傑のあだ名としてよく使われていると記述した。しかし、勇敢で大胆であるが、無鉄砲に行動する人も虎に喩え、「虎子」というあだ名で呼ばれる。「虎子」のあだ名は男性に多い。女性は「虎妞」と呼ぶことが多い。

「最沉不住气的是三连长黎芝堂。没带人，他独自跑到营部去。“虎子”这个外号的确足以说明他的形象与性格：身量不矮，虎头虎脑，刚二十五岁，什么也不怕，他不但

是虎形，而且有一颗虎胆。每次带队出击，他总是说这一句：“不完成任务不回来！”」

（『无名高地有了名』老舍）

（筆者訳：最も気が納まらなく、落ち着かないのは三連の連長黎芝堂である。人を連れずに、彼は一人で兵営に行った。「虎子」というあだ名は確かに彼のイメージと性格を表すに足る。背は低くなく、たくましく素直である。二十五歳になったばかりで、何にも怖くない。彼は虎の外形だけではなく、虎の胆力もある。チームを率いて出撃するたびに、彼はいつも「任務を終えないと帰らない」と言う。）

中国では親が子供に名前を付ける際に、虎のイメージに因んで、「虎子」を付けることが多い。虎のイメージと言え、たくましく健康で丈夫な体である。「虎子」は幼名として使うことが多く、子供を虎のように成長させたいという親心を表す。しかし、「虎子」をあだ名として使う場合、主に虎のような勇気があるが、知恵がなく軽率で無鉄砲な性格を表す。

「知道刘四爷的就必也知道虎妞。她也长得虎头虎脑，因此吓住了男人，帮助父亲办事是把好手，可是没人敢娶她作太太。她什么都和男人一样，连骂人也有男人的爽快，有时候更多一些花样。」

（『駱駝祥子』老舍）

（筆者訳：劉四爺のことを知っているなら必ず虎妞のことを知っている。彼女は体が丈夫で、性格が素直である。男を驚かせる。父の仕事を手伝うのは得意であるが、嫁にする人はいない。彼女は何でも男と同じで、人をののしる時さえ男の豪快さがあった、更に言葉がもっとひどい。）

『駱駝祥子』は老舍の代表作の一つである。小説の人物虎妞は虎のイメージとすごく合っている。見た目は、虎のようなたくましく丈夫な体がある。性格から見れば、「虎子」と同じく軽率や無鉄砲な性格を表す。

虎のイメージに因んで女性にあだ名をつけるなら、前文に述べた「母老虎」というあだ名も存在している。『駱駝祥子』では「屋里呢，他越来越觉得虎妞像个母老虎。（筆者訳：部屋の中で、彼はだんだん虎妞が暴れる女ようになってきたと気がする。）」という文が記載されている。つまり、母老虎と比べ、「虎妞」は「母老虎」のように男まさりの積極的な女性で

あり、人を罵倒する姿以外に、主に無鉄砲で素直な特徴を表す。

5.3.2 日本語の「大虎」と中国語の「醉猫」

日本文化では酔っ払いのことを虎に喩え、「大虎」と言う。例えば、国会内で泥酔事件を起こし、蔵相と議員を辞任した泉山三六は「大トラ大臣」と呼ばれている。ここでの「大トラ大臣」は虎の勇猛果敢のイメージと全く関係がなく、眠りこけた泉山の醜態を表している。虎を酔っ払いと結びつくのは江戸時代からである。酔っ払いを虎と呼ぶ理由は、四つ這いになって手のつけられない様を虎に例えたというものや、酒は「ささ」とも読むことから、酒を笹（ささ）とした洒落であり、水墨画に見られるように笹の横には虎がいることから、虎を酔っ払いとしたなど諸説ある。また、泥酔状態の人を「大虎」と呼び、派出所にある酔っ払いを預かるための収容所をトラ箱という。

中国人は酔っ払いを「虎」と呼ぶのではなく、「猫」に喩えることがある。中国語では「酔っ払い」は「醉猫（酔っばらった猫）」と言い、「醉虎」とは言わない。お酒が好きな人やよく酔っ払う人に「醉猫」というあだ名をつける。

「没事就喝，喝完就睡，外号醉猫。这还能算优点么？这不叫醉生梦死么？」

（『大陸作家』王朔）

（筆者訳：何もない時に飲む。飲んだらすぐ寝る。あだ名は「醉猫」という。これは長所と言えるか？何のなすところもなくいたずらに一生を送ることではないか？）

「他的好朋友胡铁花更是个大酒鬼，“醉猫”就是他的绰号，楚留香就直呼他老酒鬼。」

（CCL コーパス）

（筆者訳：彼の親友の胡鉄花は更にお酒好きな者と言える。彼は「醉猫」と呼ばれる。楚留香は彼のことを老酒鬼と呼ぶこともある。）

「张二搬走了，搬走的那天，他又喝得醉猫似的。」

（『柳家大院』老舍）

（筆者訳：張二は引っ越した。引っ越しの日、彼はまた醉猫（酔っばらった猫のよう）になった。）

以上の例文から見ると、中国語で酔っ払いを「酔猫」と呼ぶことが明らかになった。お酒が好き、よく酔っ払う人が「酔猫」というあだ名で呼ばれる。猫が酩酊状態になる姿に喩えている。

「酔猫」という言葉は元々猫がキャットミントの匂いに興奮してきて酔っ払うという状態から生まれた言葉らしい。キャットミントの精油には、ネペタラクトンという成分が含まれている。この成分は、マタタビにも含まれているもので、猫を引き寄せる作用がある。欧阳修による『帰田录』では「至于薄荷醉猫、死猫引竹之类，皆世俗常知。（筆者訳：猫がミントを食べたら酔っぱらったり、死んだ猫が竹の根の先端を引っ張ったりするという話は、世間ではよく知られている。）」と記述されている。猫がミントを食べたら酔っ払うことは中国で人々によく知られていることである。

中国では虎のイメージはあくまでも勇猛であり、百獣の王のイメージである。したがって、酔っ払って騒いだり、人に絡んだりする酔漢の言動や仕草の特徴はイメージとして、虎ではなく猫に似ている。これは中国人の捉え方である。

一方、日本においては、よく酔っ払う人を虎に喩え、「大虎」というあだ名で呼ぶことが多い。『中日大辞書』を調べると、中国語「酔猫」についての解釈には「喝醉了。不是乱唱就是胡闹，竟闹醉猫。」という文がある。文の下に「酔うとむやみに歌うかどなるかदैいつも大虎になる」という日本語の訳文がついている。したがって、確かに泥酔者を喩え、中国語で「酔猫」と言い、日本語で「大虎」と言う。

『日本国語大辞典』には「酔っ払い＝虎」の語源説として、以下のように記されている。

- (1) 四つん這いになって手がつけられない様子から。
- (2) 酒を女房ことばでササというところから。ササを笹と解し、笹に酔う者の意で虎といったもの。
- (3) 酔った者が張子の虎のように首を左右に振るところからか。
- (4) 酔ってあばれるところが猛獣に似ているところから。

今一番有力な、民間によく認められているのは二番目の説である。「牡丹に唐獅子、竹に虎」というのが『明鏡国語辞典』に「取り合わせのよいもののたとえ」とあるように、古来より耳にし目にする絵図であり、よくある組み合わせである。その「竹＝笹（ササ＝酒）」とのセットで、「虎」というわけである。

では、なぜ笹はお酒と繋がっているのか、色々な説がある。萩原(1999)の記述によると、女房詞では「酒」を「ささ」という。「さけ」の「さ」を重ねた語とも、酒を勧めるときに

「ささ」というからともいう。さらに酒を中国で「竹葉」といい、「ささ」は日本語の「竹葉〔ちくよう〕」を和語的にいいなおした表現であることからともいう。また、「さけ」を「ささ」といった小児語が女性言葉になったという大槻文彦説もある。

萩原（1999）の記述によると、『蔭涼軒日録』には「泉里より桃花飯一盆ならびに竹葉酒一瓶」、「夜来御影の間において茶子を盛り、楊花飯・竹葉を喫す」と記載されている。井原西鶴の『好色一代女』には、「竹葉の一滴を玉なす金盃に移し」と表現され、「竹葉」は「酒」の文章用語として使われている。したがって、日本文化では笹はお酒と繋がり、「竹に虎」ということで虎とも繋がり、そして、お酒と虎はかかわっている。よくお酒を飲んで泥酔する者を「大虎」と呼んで、さらにあだ名をつけるのは珍しいことではない。

5.3.3 日中文化におけるの「虎」

中国での虎は従来から存在した動物であり、東北部に生息している。『説文解字』では「虎，山兽之君也。（虎は山獣の君王である。）」、『風俗通義・祀典』では「虎者，阳物，百兽之长也。能执搏挫锐，噬食鬼魅。（虎は陽物であり、百獣の中での一番である。争いを支配し、争いを鎮めることができる。鬼を喰う。）」と記載されている。鄭（2005:113）の記述によると「虎」の原型は中華民族の形成期にまでさかのぼる。原始の時代に、獐猛な野獣と向き合った先人たちは、彼らを征服したいと考え、それをイメージ化して自分のシンボルとしたが、中でも「虎」を選んだのは虎の雄々しさに魅せられたからである。中華民族の始祖の一人とされている伝説の神「伏羲」は虎神である。

一方、日本最古の和歌集『万葉集』にも伝え聞いた虎を詠んだ歌がいくつかある。例えば、「韓国の虎といふ神を生け捕りに、八つ捕り持ち来、その皮を畳に刺し八重畳」「虎に乗り古屋を越えて青淵に蛟竜捕り来む剣大刀もが」などである。また、虎が登場する最古の記録『日本書紀』には 546 年に妻子を伴って百済へ派遣された膳臣巴提便が現地で退治した虎皮を持ち帰ったと記されている。

このように、日本における虎についてのイメージが主に中国から伝わってきたため、虎に喩えたあだ名の種類は中国の方が多く、日本より豊富である。なお、日本では虎のイメージに基づいてあだ名をつける際に、中国文化から受けた影響が大きいと思う。

虎は現実に存在していない神様のような動物の龍とよく繋がっている。万葉集には、「虎に乗り古屋を越えて青淵に蛟竜（みつち）捕り来む剣大刀もが」と歌われている。虎に乗るのは、「竜虎」と並称されるように、虎が竜と対等の強さがあるためであろう。

日本には「雲は竜に従い風は虎に従う」ということわざもある。実は日本の「龍虎」についての印象もほぼ中国から伝わってきたのである。中国の『史記』の、「伯夷列伝第一」にある「雲従龍 風従虎」がその出典である。「雲従龍 風従虎(聖人作而萬物觀)」の一節を「雲のあるところに竜は躍り、風の吹くところに虎はうそぶく。すべて物は、同じ類のものが互いに呼応するものだ。してみると聖人の作(おこ)るときにのみ、万物は世に現われて繁栄することであろう。」と解釈されている。中国の伝統文化において、権力や威厳があることを象徴する際は、しばしば中華民族のシンボルである龍と対にして言い、「龍騰虎躍」や「藏龍臥虎」などの成語がある。

虎は、昔から中国のトーテムのひとつであった。中国の神話では天の四方の方角を司る靈獣は東青龍、西白虎、南朱雀、北玄武であり、虎は四つの中の一つになっている。漢代には、人々は大晦日の夜に家の門に虎の絵を描き、妖怪変化を追い払うようになり、その後、家の門の守り神の絵には、虎が描かれるようになった。民間では虎を神聖な獣と見なし、虎の勇猛なイメージから魔よけとしている。

中国における虎が神様としてみなされていたため、虎が靈力を持つという話も日本で広がってきた。

濱田(2010:183-185)の記述によると、日本の中世では、虎皮は唐皮と呼ばれていた。これは、中国から舶来した皮という意味である。当時の皇族たちは、異国情緒豊かな舶来品として、虎皮を珍重した。虎が目に見えない靈力を持ち、虎皮などの品が人の命を守るために効果を発揮するという信仰は後の時代に現れてくる。そして虎が当時の貴族社会で信仰と結びついていった。

平安時代の末、武士が台頭する源平の戦い以降の時代になると、虎の民俗的信仰は、武士たちにも広がっていった。武士たちが虎皮にこだわったのは、それを身につけることによって強い虎と同一化し、また虎の靈力によって我が身を護ろうとする願いからであった。そして、虎に対する信仰は武士の階層で広がってきた。

それは、戦いの場面によく登場する。摂政となり活躍した聖徳太子が、朝敵物部守屋を討伐しようと山に来て、戦勝の祈願をすると、天空遙かに毘沙門天が出現して、必勝の秘法を授けた。その日は寅年、寅日、寅の刻であった。聖徳太子がこの神の加護で、敵を亡ぼすことが出来たため、その後毘沙門天は虎に縁のある神として信仰されることになった。これに因んで、虎像が境内に置かれ、毘沙門天の神使として扱われている。

江戸時代になると、無病息災や護身にありがたい虎の靈力をたのむ信仰が庶民の間にも

広がっていった。虎が魔除けや商売繁盛の力を持つと思われ、さまざまな虎の玩具が縁起物として飾られた。中国においても、昔から子供たちが健やかに成長できるよう、虎模様の靴を履かせたり、帽子をかぶせたりする風俗習慣がある。両国ともに虎の模様を使う理由としては、虎は元気で丈夫なイメージがあるからだ。

戦国時代、関東の有力武家、小田原北条氏は、うずくまった虎の絵が入った印章を用いていた。また、大阪城天守閣の金の虎のレリーフは、豊臣時代の大阪城天守を描いた「大坂夏の陣図屏風」に基づいて、平成の大改修（1995～1997年）で再現されたもので、獲物を狙い身をかがめるポーズのこの虎を「伏虎」という。東西南北の四面にそれぞれ二頭ずつ、合計八頭を配している。昔の日本文化で虎は力の持ち主であり勇猛なイメージがあるため、武家や武将と結びつくことが多い。今日において、力の強さとパワーにおける有力者と言えば、日本の伝統国技の一つである相撲の力士のことが頭に浮かべる。力士が現役時代に名乗る名前は四股名という。名づける際に力強いイメージの言葉や、自身や所属する相撲部屋に所縁のある文字、尊敬する先輩などから文字をもらうことがある。力士の四股名の中で強いイメージを持ち、武勇や王者の代表者である「虎」に因むしこ名が少なくない。例えば、虎太郎、白虎丸、荒虎、猛虎、虎徹、虎受、虎渡、安虎などである。ここからも「虎」は力が強い動物とされていることは明らかである。

勇猛で頼もしいイメージを持つ虎は、中国では「百獣の王」と呼ばれる。強者や王者のイメージなので、文学作品の中で英雄豪傑のシンボルとして受け取られている。虎はたくましい体格があるため、元気でたくましいことを象徴することは言葉からもわかる。「虎虎生威（虎のように勢いがあって元気がいい。）」や「生龍活虎（活力にあふれた竜や虎のようである。）」「虎背熊腰（虎の背に熊の腰。体格の逞しいことを表す。）」などの言葉がある。虎は一番強い動物であるため、威厳のある力強い感じ、つまり、周りの人を圧倒するようなパワー、押しの強さ、勢いのよさに満ち溢れているという意味がある。

両国ともに虎は強者のシンボルとみなされ、崇められている。このイメージに基づいてあだ名をつけるということは日中両国で共通点であり、そのため、逞しく勇猛で、強者としての虎に関わるあだ名をつけることは少なくない。例えば、前節に述べたような「甲斐の虎」や「越後の虎」、『水滸伝』にある「跳涧虎」、「插翅虎」などである。

勇猛なイメージ以外に、虎は獰猛、危険、残酷を象徴する恐ろしい動物である。「虎口」「虎穴」などの言葉や一部の民話はこのマイナスのイメージを反映している。虎は人を食う凶悪な本性ゆえに、悪者の象徴とされ、「龍争虎斗」は横暴の限りを尽くす虎のイメージを

映し出している。そして、中国では怒りやすく、迫力があり、凶悪なイメージを持つ人に「老虎」というあだ名をつける。さらに、性別によって、怒りやすく豪放で粗野な女に「母老虎」というあだ名をつける。

中国語には「虎头虎脑」「虎里虎气」という言葉もある。元々の意味としては、虎の逞しい体に基づき丈夫で健康な体のことだけを言うが、今は人の素直で温厚な性格を表す。その上、軽率や無鉄砲な性格を表すこともある。

以上の二点のイメージは日本のあだ名にあまり反映されていない。泥酔者のことを「大トラ」と呼ぶのは日本文化には特有な表現であり、中国語には存在していない。中国語には日本語の「大トラ大臣」のようなあだ名もあまり聞いたことがない。

つまり、日本において虎に関するイメージはほとんど中国文化から伝わってきたのであり、虎の勇猛や力が強いという特徴を表すことが多い。あだ名として使う場合、中国はさらに豊富な特徴を表す。

5.3.4 結び

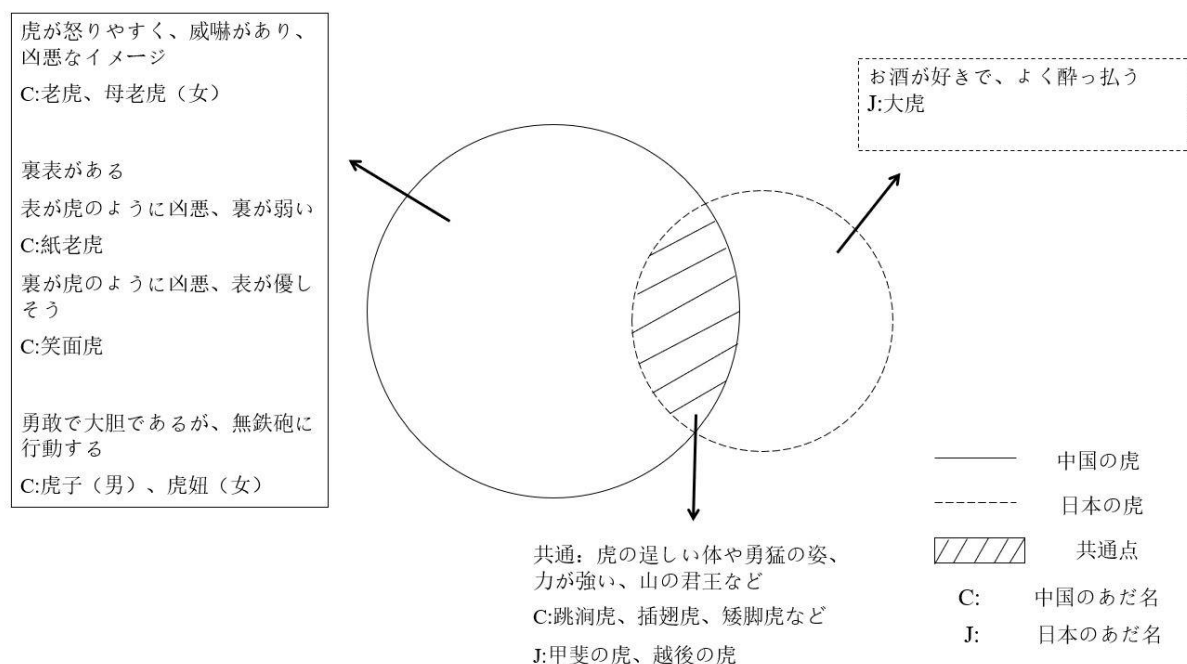


図 18 日中の虎のイメージに関するあだ名の比較

中国の虎と日本の虎を比べると、イメージでもあだ名としての言葉の表現でも、中国の方は日本よりかなり幅広いと思う。縄文時代に日本には野生の虎は存在せず、ほとんどの人々が実物の虎を見ることができなかった。日本人の虎に対するイメージは、外国から帰国

した人の見聞から理解したものであった。そのため、日本における虎文化は外国、特に中国から伝わってきたことが明らかになった。そして、虎に関するイメージも昔の中国にあるイメージとほぼ同じと言える。虎というあだ名は、日本と中国は同じように、虎の逞しい体や勇猛な姿などの特徴を豪傑に喩え、日本の武将や中国の英雄などによく使われる。本当は弱いのに虚勢を張っている人を表す時にも、日中両国とも虎に因んで、日本では「張り子の虎」と言い、中国では「紙老虎」と呼ぶ。ただ、元々張り子の虎の形が日本と中国では異なるため、日本では「張り子の虎」で主体性がなく人の言うことにただ頷いている人や、首を動かす癖がある人を指すこともある。また、同様に独特な日本文化の影響を受けた、ひどく酒に酔った人を表す「大虎」という言葉もある。一方、中国において、虎について日本との共通なもの以外に、虎のイメージに基づき人に付けるあだ名は数多くある。迫力があり恐れられる動物のイメージから、怒りやすく凶悪な人に喩えた「老虎」というあだ名がある。女の粗野な姿や凶暴なイメージを表す時には、「母老虎」というあだ名がよく使われる。基本的に虎は凶悪な姿であるが、人の裏と表のどちらの面にそのような凶悪な姿が見られるのかによって、中国ではあだ名が異なる。表面が虎のように凶悪だが内面が弱い人は「紙老虎」と呼ばれるが、逆に内面が虎のように凶悪だが表面が優しそうに見える人は「笑面虎」と呼ばれる。また、勇敢で大胆であるが、無鉄砲に行動する人を虎に喩えることもある。「虎子」と「虎妞」というように男女によって使い分けられるあだ名も存在している。

中国文化における虎に関する言葉は絶えずに豊かになっている。あだ名としての使用は日本より豊かであり、文学作品の舞台にも日常会話にも活躍している。

5.4 日中の「犬」のイメージとあだ名

日本において、見た目が醜い人を「ブルドック」や「チンクシャ」と呼び、足が短い人を「ダックスフント」と呼び、可愛らしい人を「チワワ」や「犬」、「ワンちゃん」、「ワンワン」、「ポチ」と呼ぶことがある。その他、愛犬家の吉田茂が呼ばれていた「ワンワン宰相」がある。犬のことをよく知っている人は「犬博士」と呼ばれることもある。

一方、中国では眼鏡をかけた人を「四眼狗」と呼び、足が短い人を「柯基（コーギー）」と呼び、執事やボディガードなどの仕事を務めている人を「看門狗（番犬）」と呼び、卑劣で恥知らずな人を「癩皮狗」と呼び、ペコペコする人を「哈叭狗」と呼び、手先として何でもやれる卑しいやつを「走狗」「狗腿子」と呼ぶことがある。その他、文学作品の中では、家柄や身分が卑しい人も犬に喩え、「紅眼狗」「机灵狗」「花脖狗」などのあだ名もある。

本節では、日中両国の「犬」のイメージに基づきつけられたあだ名を詳しく分析する中で、両国文化の共通点と相違点を研究したいと思う。

5.4.1 あだ名としての日中の「犬」

犬は人間にとって身近な動物である。日本において、犬に因んで人にあだ名をつけるのはよくあることである。ネットで検索してみると、「職場の人に、あだ名でイヌとよばれている。」「『犬』は、いぬが好きなのでつけられました。」「『犬博士』というあだ名は犬のことをよく知っているからである。」「犬みたいに人懐っこくしていたら、顔が童顔だし、あだ名がチワワになりました。」「私はよく性格と顔が犬っぽいと言われます。そのおかげであだ名もポチです」などのコメントがある。犬に因むあだ名の中で、「犬」という字が付くあだ名だけではなく、「ポチ」や「ワンワン」、「ワンちゃん」なども犬のことを指し、人のあだ名として使われる。

ポチという呼び方はフランス語で「かわいい・小さい」という意味のある「petit」（プチ）と言う単語からきていると言われている。日本では、江戸時代頃に外人が日本の犬(狆)を見て「プチ(小さい)」と言ったのを聞き、犬のことをよく分からなかった日本人がプチをポチと聞き間違えて、これはポチと言うものだと思い込み、ポチとは犬のことだと言う認識で広まってしまったという説がある。そしてポチという呼び方は、犬のイメージに因んで人にあだ名をつける時に使われる。

「犬」、「ワンちゃん」、「ワンワン」、「ポチ」をあだ名として呼ばれる人は可愛い姿や犬の誠実で頼りがりがあるという特徴が取られることが多い。日本では「犬」に対する印象は中国より犬の優しさや可愛らしさというポジティブな面が多い。かつて一世を風靡した言葉である「犬系男子」「犬系女子」は、犬のように明るく、誠実で信頼できる人間像が描かれている。犬系男子の特徴と言えば、人懐っこく感情表現が豊かである。いつも笑顔で柔らかい表情をしていて、素直でつい構ってあげたくなるかわいさがある。思いやりを持って人と接することが出来るため、周りから尊敬される人柄の持ち主である。また、心が清らかで愛嬌のある雰囲気を持ち合わせているため、人気者になれる素質がある。犬系女子の場合、同じく人懐っこいという特徴が取られている。無邪気で明るい天真爛漫な女性のことをいう。素直で感情がすぐに表に出てチャーミングである。また、楽しいことが大好きなため、誰とも楽しくコミュニケーションを取ることが出来る。

そして、犬のイメージに基づき、人の可愛らしさや明るさを表すため、犬に喩えたあだ名

をつけるのは珍しくない。特にカップルの間によくあることだと思う。

その他、吉田茂は、大物政治家である。一方で、熱心な愛犬家でもあった。彼の犬好きは有名であり、ドラマで見たシェパードを欲しがったり、公務の帰りに犬を買ったりしてしまう、多いときには10匹以上の愛犬と暮らしていたほどの愛犬家であった。その様子に、周囲から「ワンワン宰相」とあだ名がつけられた。

森岡・山口（1985:185）の記述によると、「犬」に見立てられる人は多く、「犬」という普通名詞のあだ名のほかに、「ブルドック」「ブルちゃん」「チンクシャ」といった種別を示したあだ名もある。犬の種類によって、あだ名として表す特徴が異なっている。

「肝っ玉のすわったやくざ者だったって話だ。大男で、ブルドッグって綽名があったらしい。組が解散になって、やくざの足を洗ったそうなんだが、いまはどこにいて何をしてるのかわからない。」（『闇の刃』勝目粹）

「その隣りにいたブルドッグのような顔をした人が、当直将校のほうに向かって、「前任将校、軍医長のベッドはどこにしますか？」と聞く。」

（『鉄の棺』齋藤寛）

「手前側の食卓では、眼球の馬鹿に大きな男のほかに、真っ黒に陽焼けしたブルドッグそっくりの男と、見るからに剽軽そうな額の大きな男が、雑然と休んでいるようであった」

（『鉄の棺』齋藤寛）

「ブルドッグ」と呼ばれる人は、ブルドッグのような顔をしているためあだ名をつけられたのである。肌は多少の弛みがあり、顔が醜いことを表している。同じくみっともない顔を表すため、「チンクシャ」というあだ名もある。日本語の国語辞書を調べると、「狎（ちん）のように目・鼻・口が中央に集まった、くしゃっとした顔。一説に、狎がくしゃみをしたような顔とも。容貌が醜いこと。」と解釈されている。夏目漱石の代表作『吾輩は猫である』に登場する主要人物珍野苦沙弥は中学校の英語教師であり、あばた面でくちひげを生やした見た目である。珍野苦沙弥の読み方は「ちんのくしゃみ」である。夏目漱石はシャレが好きなことはよく知られ、これは色々な作品の登場人物のあだ名からそうとわかる。珍野苦沙

弥（ちんの くしゃみ）は言うまでもなく、「チンクシャ」に由来する可能性が高い。つぶれたような顔の中国の珍犬狽（ちん）がくしゃみをした時の顔、という表現が『ちんくしゃ』で、勿論人の容貌を笑い物にすることはあまりいいことではないが、文学作品の中では諧謔に富んだ絶妙な喩えであると思う。

ダックスフントは足が短いという特徴がある。そのため、あだ名として使う時にも、人の足が短いことを表している。そのほか、チワワは犬の品種の中で小さくて可愛らしいため人々に好まれている。きゃしゃで小柄な人や目が大きな人、可愛らしい人がよく「チワワ」と呼ばれる。

中国では、人の可愛らしさを犬の可愛い姿に喩えるという発想があまりない。そのため、可愛らしい人に「犬」というあだ名をつけることはあまり聞いたことがない。人の見た目に基づいて、犬のイメージに喩えるあだ名はある。鼻が低い人は「京巴（ペキニーズ）」というあだ名で呼ばれることがある。日本と同じ、ダックスフントに喩えて、あだ名をつけて呼ばれる人がいる。しかし、日本のあだ名「ダックスフント」は主に足が短いという特徴が取られてつけられる。中国では、体形の釣合がとれていない、体が長いという特徴に注目する。「ダックスフント」は中国語で「腊肠狗（ソーセージのような犬）」という名前と呼ばれることから見れば、体つきに注目されたことが明らかである。中国では足が短い人は「ダックスフント」よりも、「柯基（コーギー）」というあだ名で呼ばれることが多い。見た目から言えば、一番典型的なあだ名は「四眼狗」である。一般的には「四眼狗」と呼ばれる人はほとんどメガネをかけている。見た目は四眼犬と同じで、四つの目があるように見える。

「因为他总戴着洋眼镜，俺就给他起了个浑名，叫：四眼狗。」

（『白桦文选』）

（訳：彼はいつもメガネをかけているので、私は彼に「四眼狗（四つの目がある犬）」というあだ名をつけた。）

「张老师说：“你是班里的‘卫生干事’，你应该好好地劝他，不应该学他，嘲笑他。你还喜欢给同学起外号，比方说你管范祖谋叫‘四眼狗’，因为他戴眼镜……”」

（『陶奇的暑期日记』冰心）

（訳：張先生はこういうように言っていた。「あなたはクラスで『衛生幹事』を担当している。彼を宥めるべきだで、彼のことをまねしたりからかったりしな

いようにしなければならぬ。あなたはまたクラスメートにあだ名をつけることが好きで、例えば范祖謀が眼鏡をかけているから「四眼狗」と呼ぶなんて……。)

これらの文学作品の中で、眼鏡をかけている人が「四眼狗」と呼ばれている。中国では、柴犬のように目の上に丸い模様がある犬は、「四眼犬」または「四眼」と呼ばれている。メガネをかけている人も四眼狗と同じように、四つの目があるように見える。そのため、「四眼狗」は単に人の見た目に因んでつけたあだ名である。

同じ人の見た目に因んで、犬に喩えるが、日本ではいいイメージを持つ「チワワ」というようなあだ名があるし、悪いイメージを持つ「ダックスフント」「チンクシャ」などのあだ名もある。中国では、見た目に因むが、犬に喩えるあだ名はあまりいいイメージがない。

中国語では犬に関するあだ名は犬の見た目、習性、文化の特徴という三つの角度からつけられる。あだ名をつける時、犬の見た目と習性から、更に言えば犬という本体から離れ、文化の特徴にまで広がっていく。見た目より、習性、文化の特徴に基づいて、つけるあだ名は大きな割合を占めている。以下に例をいくつか挙げる。

- ① 番犬としての職能や犬としての習性に基づいて人にあだ名をつける。

「我认识你，你是袁腮的保镖，人家都管你们叫看门狗。」

(『蛙』莫言)

(訳：私はあなたのことを知っている。あなたは袁腮の用心棒である。みんなは「看门狗(番犬)」と呼んでいる。)

「方才那个大胡爪的老头说道：“朋友，你问也是白问，我是知府的大管家，外号人称长毛狗，姓王行三。后边那位是二管家，人称短毛狼李七。」

(『三侠剑集藏』倪钟之)

(訳：さっきの大きな胡爪のおじいさんのような人は「聞いても無駄ですよ。私は知府の執事です。「长毛狗(長い毛がある犬)」と呼ばれ、苗字は王です。兄弟の中で三番目です。後に立っている人は二番目の執事で、「短毛狼(短い毛がある狼)」李七と呼ばれています。」と言っている。)

「看门狗」は番犬という意味である。番犬としての職能は留守番をするというものである。

さらに、主人の話をよく聞き、安全などを守る。あだ名として使う場合、番犬と同じ職能を持つ人、昔なら執事、現代ならボディガードなどがよくあだ名をつけられる。中国語の「看門狗」を日本語に置き換えたら「番犬」になる。『平家物語』では武士を朝廷の番犬に喩え、「平清盛の誕生から始まった長大な物語は、朝廷の番犬にすぎなかった武士が自ら擁する実力に気づいて、堂上に這い上がり、ついに奪取した権力の重みに押されて次々に身を滅ぼしていく過程を描きつづけてきた。」と記されている。「K課長は当時、人望の厚かった部長に番犬のようにつかえ、かわいがられた。」(『「困った上司」とつき合う法』中川昌彦)にも、K課長は部長の番犬と喩えられている。したがって、日本語では中国語「看門狗」のように人のことを喩える言葉の使い方が存在している。見張り役や組織の比喩として使うことがあるが、日本語でそういう職能に因んで人につけられたあだ名はあまり見つからなかった。しかし、中国語では、あだ名としても使えるようである。

② 中国文化において犬の奴隷根性に基づいて人にあだ名をつける。

冯志の小説『敌后武工队』では「哈叭狗」というあだ名をつけられた偽警察所長という人物が登場した。この偽警察所長について以下の描写がある。

「苟润田——外号“哈叭狗”，伪警察所长。」

(訳：苟润田のあだ名は「哈叭狗」という。偽警察所長である。)

(『敌后武工队』冯志)

「他叫苟润田，是铁路西南苟庄人。原先在满城干，因为坏得流了油，保满支队净指名点姓地找他。他觉得实在不能呆了，才花了个钱，在清苑弄了个警长的缺。乍来到大冉村，还和联络员们点头哈腰，说些天官赐福的话。」

(『敌后武工队』冯志)

(訳：彼の名前は苟润田と言う。鉄道の西南苟庄村の出身である。もとは満城で働いていたが、悪さは油が溢れるように多かったので、保満支隊に指名されていた。彼はもう居られないと思って、お金をかけて、清苑で警察長の仕事を見つけた。大冉村に来たばかりの時、連絡員たちにぺこぺこして、甘い言葉ばかり言っていた。)

文の中にある「点头哈腰」という言葉は「哈叭狗」と呼ばれる人の姿やしぐさを十分に表す。意味としては、ぺこぺこ頭を下げて人にへつらうという意味である。「哈叭狗」と呼ば

れる人は相手の喜ぶようなことをことさらに言ったり行ったりする。岑凯伦の『还你前生缘』には「如今有个女人对他千依百顺，唯命是从，跟在后面哈巴狗一样，还懂看面色、奉承，有什么不好？（訳：今では、ある女性が彼に対して何でもいいようにして、言いなりになっている。いつも後ろについてくる。また、顔色を見たり、お世辞を言ったりしている。何が悪いところがあるのか？）」という文がある。この中で「哈叭狗」は「哈巴狗」と書かれているが、意味は同じである。相手の言いなりに行動し、顔色を見たり、おべっかを使う人を指している。

「哈叭狗」と呼ばれる人が相手にペコペコすることはまさしく犬の奴隷根性を表している。同じく奴隷根性を表し、人の使い走りという意味になるあだ名は「狗腿子」と「走狗」がある。権力者や反動派、悪人などの手先を指している。

「他的狗腿子苏沛霖，听他的使唤，在镇里煽阴风，点鬼火，散布谣言，到处破坏。」

（『上海的早晨』周而复）

（訳：彼の手先である蘇沛霖は、彼の指図を聞き、町で人を唆して悪事を働かせ、うわさをまき散らす。あちこちで騒ぎを起こす。）

「她们骂姚金凤是走狗，是出卖了工人利益，情形就顿时恶化。」

（『子夜』矛盾）

（訳：彼らは姚金鳳を「走狗」と罵る。労働者の利益を売ったので、状況はすぐに悪化した。）

「哪里都会冒出一批向他摇尾哈腰的奴才走狗，倾其所能地取悦他，有献计献策的，也有献身献宝的。」

（『风声』麦家）

（訳：どこでもペコペコしてしっぽ？を振る奴隷のような手先が現れる。相手の喜ぶようなことをことさらに言ったり行ったりする。献策する人もいるし、献身的に宝を捧げる人もいる。）

「狗腿子」という言葉の由来は以下の説がある。昔、金持ちの足が折れた。一人の奴隷が

主人を喜ばせるために、自分の足を切って主人に捧げた。主人はこの人に「自分の足はどうするのか？」と聞いた。奴隷は「私は犬の足を取ることができます。」と返事した。また、「では、その犬の足はどうするのか？」と聞かれ、「泥で足を作ってあげます。」と返事した。そのため、犬はおしっこをする時、いつも後の片足を上げている。それが泥で作った足なので、おしっこで壊れることを心配しているからである。このようにぺこぺこ相手の喜ぶようなことをわざわざ言ったり行ったりする人は「狗腿子」と呼ばれる。

「走狗」とは、他人の手先となって使われる者である。『語源の由来辞典』には、「狗は犬のことで、走狗は狩猟で鳥や獣を追い立てるのに使う獵犬が原義。獵犬は善悪など考えず飼い主の指示に従い、鳥や獣を追うことから、他人の手先となって使われる者を呼ぶようになった。」と記されている。

③ 中国文化において卑劣で恥知らず人に「癩皮狗」というあだ名をつける。

「他癩疮疤块块通红了，将衣服摔在地上，吐一口唾沫，说：“这毛虫！”“癩皮狗，你骂谁？”王胡轻蔑的抬起眼来说。」

（『阿Q正传』鲁迅）

（訳：

全部の禿げをまっ赤にして、かれはうわ着を地面に叩きつけ、ペッと唾を吐いてどなった。。

「毛虫野郎め！」

「禿げ犬、そりゃ誰のことだ？」ひげの王はさげすむように視線をあげた。）

（竹内好 訳 1955:112）

『阿Q正伝』は魯迅の代表作であり、中国文学にとって記念碑的な意義を持つ作品である。阿Qという人物は、当時の中国の民衆のなかにあったあらゆる種類の悪徳を体現する人物像として描かれている。彼は権威に弱く、卑屈なのである。小説の中にあるもう一人の人物王胡と喧嘩したり、殴ったりするというシーンでは、阿Qは王胡を「毛虫」と呼び、王に「癩皮狗」と呼ばれた。王胡は顎に絡まるひげがあるため、「毛虫」と呼ばれたのである。阿Qはなぜ「癩皮狗」と呼ばれたのか、原文から読めば、「最恼人的是在他头皮上，颇

有几处不知于何时的癩疮疤。这虽然也在他身上，而看阿 Q 的意思，倒也似乎以为不足贵的，因为他讳说“癩”以及一切近于“赖”的音，后来推而广之，“光”也讳，“亮”也讳，再后来，连“灯”“烛”都讳了。（訳：最大の悩みの種は、頭に数カ所、いつからともなく、疥癬のあとが禿げになっていることである。これだって自分の肉体の一部にはちがいないが、こればかりはさすがの阿 Q も自慢にはならぬらしく、その証拠に「禿げ」ということば、および一切の発音がそれに近いことばをきらった。その範囲がだんだんひろがって、のちに「光る」も禁句、「明るい」も禁句になった。もっと後になると「ランプ」や「蠟燭」までにして怒りだす。）と記されている。もちろん、「癩皮狗」という呼び方はタブーに入っている。王胡は自分のひげが「毛虫」と揶揄われたので、怒られるためわざと「癩皮狗」と呼んだと考えられる。「毛虫」と「癩皮狗」はいずれにせよ、相手を人間扱いせず、人間以下の者として見下し、自らを相手よりも優位に置こうとするところに特色がある。

そのほか、阿 Q は自尊心が強く、未荘の住民どもは一人として彼の目に留まらないことや、自分より弱い者に対しては横柄に振る舞うことがあるため、下劣で恥知らずな人と判断される。そして、「癩皮狗」とつけられるのも卑屈な奴隷根性の象徴として描かれている。

『阿 Q 正伝』の訳本では、「癩皮狗」を日本語の「禿げ犬」に訳した。しかし、見た目に関わったことを表しているものの、忌まわしく恥知らずで下劣で卑怯な奴隷根性を表せていない。原文のあだ名は中国の犬に関する奴隷イメージと結びついていると思う。

④ 中国文化においては犬の地位が低いため、人のあだ名として使う時に地位が低いことを表す。なお、賤称として使うこともある。

「护院的进来十数个人，外号儿叫夹尾巴狗、长尾巴狼、无毛鸡、花脸野猫。怎么都是这宗外号？真正有本领的谁上他这儿来！这都是些无能之辈，狐假虎威，在他这里混碗饭吃。」

（『续小五义』）

（訳：庭の中に十数人の人が入ってきて、あだ名は夹尾巴狗（しっぽを巻く犬）、长尾巴狼（長尾のオオカミ）、无毛鸡（無毛の鶏）、花脸野猫（花顔の野良猫）などである。どうしてこのようなあだ名なのか？本当に腕のある人は誰がここに来るものか！これらはすべて無能のやつらであり、虎の威を借りるだけである。生計を立てるために。）

元々ここで記述された夹尾巴狗は無能な奴のあだ名である。上下関係では下に居る人だ
と思う。他人のために働いている人であり、人間扱いされず、人間以下の者として見下され
ていた。そのため、犬のイメージと関わっている。なお、しっぽを巻く犬について、中国語
では「夹着尾巴逃跑（ほうほうのていで逃げる）」という言葉があり、怖がっている弱い犬
のイメージに基づき、無能な人の姿として描かれている。

「那步军都头，姓刘名玉，因自幼红眼边，外号叫红眼狗。」

（『续水浒传』）

（訳：あの歩兵隊の隊長は姓が劉であり、名が玉である。幼い時から目が赤
かったため、「红眼狗」というあだ名で呼ばれる。）

「只见一小校头领，姓魏名铎，外号叫机灵狗的，这人在毛江部下颇有武艺。」

（『续水浒传』）

（訳：フツと見ると、師匠である魏鐸は「机灵狗」というあだ名で呼ばれる。この
人は毛江の部下で武芸が優れている。）

「二座为护国军师刘尖子，此人是白衣秀士王伦的同班的好友，幼年因脖项生疮，留
些斑点，以此大家口顺外号叫花脖狗。」

（『续水浒传』）

（訳：二席は護国軍師の劉尖子である。この人は白衣秀士である王倫の同じクラス
の友達である。幼い時に首のあたりにできものがあった、斑点が残った。そのた
め、みんなは彼のことを「花脖狗」と呼んでいた。）

「狗」と呼ばれる人は家柄や身分が低い百姓が多い。中国文化では、犬は人に見下される
傾向があり、上流の階層に入れられないというイメージである。中国には昔から賤名をつける風
習がある。現在に至るまでも中国の一部地域で残っており、特に田舎では賤名がある人が多
い。中でも「犬」や「狗」を含む呼び方は少なくない。例えば、「狗剩（犬が食べ残した食
べ物）」、「狗蛋（犬の生殖器）」等がある。「红眼狗」と「机灵狗」と呼ばれた二人は確かに
社会階層では身分が低かったので、犬のイメージと結びつきこのようなあだ名をつけられ

るのは普通だと思う。しかし、「花脖狗」と呼ばれた劉尖子は白衣秀士と同じく書生であったため、家柄や身分が低い「紅眼狗」と「机灵狗」とは違うと考える。昔から犬は賤名の中でよく使われたことと関連すると思う。

日本語ではほとんど犬の奴隷性に注目した用法がないので、あだ名をつける時に、犬の奴隷性という面から名づけることもあまり存在していない。自分が人間であるのに動物と呼ばれているという悔しい思いがあるかもしれないが、中国文化で考えられる犬の奴隷性や他人より地位が低いという屈辱感はあまり存在していない。これは中国との大きな違いである。

5.4.2 日中文化におけるの「犬」

日本の『大辞林』には「犬」について以下のように解釈されている。

- ① 食肉目イヌ科の哺乳類。オオカミを家畜化した動物と考えられている。よく人になれ、番用・愛玩用・狩猟用・警察用・介助用・労役用などとして広く飼育される。品種が多く、大きさ・色・形なども様々である。
- ② (比喩的に)まわし者。スパイ。
名詞に付く。
 - (1) 卑しめ軽んじて、価値の劣る意を表す。
 - (2) 似て非なるものの意を表す。
 - (3) 役に立たないもの、むだであることを表す。

(『大辞林』)

中国の『説文解字』には、「狗，犬也。大者为犬，小者为狗。(筆者訳：狗は犬である。大きい方は「犬」という。小さい方は「狗」という。)」と記されている。したがって、中国語ではいぬと言え、ば、「狗」と「犬」という二つの語がある。

中国の『漢典』には、「狗」について以下の説明がある。

「比喻坏人。

该死的。表示极端蔑视。如:狗汉奸;狗腿子;狗爪牙;狗才(狗材。骂人的话。狗东西);狗杀才(骂人的话。该杀的狗东西)

谄媚，奉承。」

(『高级汉语词典』)

(筆者訳：

名詞として使う時、犬という本義以外に、悪い人を喩えることもある。

形容詞として使う時、ののしる言葉であり、極端に軽蔑の意味を持つ。例えば、狗汉奸（民族の裏切り者）、狗腿子（手先や下劣なやつ）、狗爪牙（手先や下劣なやつ）、狗才（人の手先）」と記されている。

動詞として使う時、上の人にこびへつらう。）

「犬」を調べると、以下の説明がある。

「旧时常用为自谦或鄙斥他人之词。如:犬妇(对人谦称儿媳妇);犬马之齿(谦称自己的年龄);犬子(谦称自己的儿子);犬马(旧时臣子对君上的自卑之称;喻小人)」

(『高级汉语词典』)

(筆者訳：

昔から謙讓語あるいは軽蔑語としても使う。例えば、「犬妇」（人に息子の嫁さんのことを言う）、「犬马之齿」（自分の年齢を言う時の謙讓語）、「犬子」（人に自分の息子のことを言う）、「犬马」（犬や馬のように卑しい者。臣下が君主に対して自分を指して言う言葉）など。下劣な人を喩えることもある。）

まず、定義から見れば、日中両国には犬に対してのマイナスのイメージの解釈には差がある。日本における、比喩表現として、「まわし者やスパイ」と解釈されている。中国においては、「表示极端蔑视（極端に軽蔑の意味を持つ）」「喻小人（下劣な人を喩える）」と記されていて、軽蔑の程度がより深い。そのため、あだ名として使う際に、中国では込められる憎悪の感情はより多いかもしれない。また「犬」のイメージに基づいてつけたあだ名はあまりいいイメージを持っていない理由が何となく理解できる。

縄文時代に日本列島で生息していた家畜としては犬が唯一のものだったようだ。縄文時代は13000年ほど前に始まった。日本列島が大陸と分離したのとほぼ同時期である。分離以前は旧石器時代時代である。旧石器時代は30万年も前からの古い時代である。イノシシはあるいは飼い慣らされていたかも知れないが、牛や馬はいなかった、羊も同じである。犬は

日本最古でまた人類最古の家畜である。

縄文人の生活の中心は狩猟採取だったから、イヌを猟犬として使っていたと考えられる。今から約2千3百年前の弥生時代になると、大きくイヌの用途が変わった。実は、長崎県原（はる）の辻遺跡から、たくさんのイヌの骨、それも殺されて食べられた跡のある骨が発見された。弥生人は農耕生活をしており、イヌは「食用」としての存在だったようである。

それが6世紀頃になると、仏教の伝来とともに、イヌだけでなくウシ、ウマ、ニワトリなどの肉を食べることが禁じられるようになった。実際にはその後も、わずかながらイヌを食べる習慣が残っていたが、明治時代以降は欧米の動物愛護思想の影響から、ほとんどなくなった。

近代では軍用犬や警察犬、麻薬探知犬などへの用途も広がり、現代ではペットとしての存在価値が増大している。

日本の文化の中で犬のイメージは積極的であることが多い。「犬は三日飼えば三年の恩を忘れぬ」という諺は、犬のポジティブな姿を表している。一つは恩返しであり、もう一つは忠誠を表している。「犬の心/犬馬の労」は主君または他人のために力を尽くして奔走するという意味である。他人に対して自分の労苦をへりくだって言う言葉である。

昔の中国の文化では、犬のイメージはポジティブなものであった。神話の記述によると、犬は神力があると見なされて、天地開闢の盤古の姿は犬頭人身である。原始社会では、生産力が低く人口死亡率が高かったため、出産する女性は尊敬されていた。同時に犬は多産の動物のひとつとして、女性と強く結びついていた。犬は女性のトーテムとして尊ばれ、特に白い犬は縁起の良いものだと思われていた。その後、犬は六畜の「馬牛羊鶏犬豚」の一つとして十二支にも数えられた。これらは昔の人の犬に対するトーテム崇拝がうかがえる。

犬に対する最初の印象はトーテム崇拝であったが、『三字経・訓詁』の六畜類の細かい分類「牛能耕田，馬能負重致遠，羊能供備祭器，鶏能司晨報曉，犬能守夜防患，猪能宴飧速賓。」は、犬が人間に安全な生活環境を提供するという価値を表している。鄭（2004:194）の記述によると、犬は生まれながらにして勇猛で闘争本能が強く、嗅覚、視覚、聴覚、触覚がいずれも抜群に鋭いことに加え、活動的で眠りが浅いため、夜警に打って付けであり、狩猟の場では人に協力して、獣を巧みに追い詰める。動物の家畜化が始まったのは旧石器時代のころであり、犬は人類が最初に飼い馴らした動物の一つ、つまり人類にとって最も付き合いの長い友であることは、世界の考古学界の共通認識となっている。古代、犬は豚小屋を見張り、羊の群れをまとめ、狩りに出れば獲物を追い立てるなど、さまざまな面から生活を支えてく

れる人類の良き片腕であった。

なお、犬は人間社会の中で、留守番という役割があり、「番犬」という言葉も生まれた。そのため、執事、従者、用心棒などの役割を持つ人は「犬」というあだ名で呼ばれている。犬は人類のための「番犬」という特性があるため、卑しい地位と見なされるようになった。

春秋戦国は、人間社会の大変革の時期であり、犬の歴史にも変化があった。『晏子春秋』の記述によると、楚の国は晏子の背が低いという理由で小さい扉から入らせた。晏子は「使狗国者，从狗門入。今臣使楚，不当从此門入。（筆者訳：使節として犬の国に行くなら、犬の穴から出入りする。私は楚の国を訪れたので、犬の穴から出入りするべきではない。）」と言った。したがって、晏子は「狗国（犬の国）」という言葉で楚の国と喩えた。犬は卑しい地位を表すと考える。

『史記・猛嘗君列伝』には「最下坐有能为狗盗者……乃夜为狗，以入秦宫藏中，取所献狐白裘至，以献秦王幸姬。（訳：最下の坐に能く狗盗を為す者有り。及ち夜、狗と為り、以て秦宮の藏中に入り、献ぜじ所の狐白裘を取りて至る。寵姫に贈る。）」と記されている。

『新明解四字熟語辞典』の記述によると、「狗盗」は犬のようにこそこそとわずかばかりの物を盗むことで、卑しいことをして人をあざむく者のたとえである。「狗」の悪いイメージというものが良く分かる。

現代の中国の文化では、犬のイメージは「権力者の手先になる」「おべっかを使う小人」「厚顔無恥な人」などと悪いイメージが多い。その悪いイメージは成語やことわざの中でもよく使われている。例えば、「狗仗人势（犬が人の勢力を笠に着ている）」「狗眼看人低（イヌの目には人間が低く見える；自分がつまらない人間のくせに他人よりも優れていると思いきや）」、「狼心狗肺」「狐朋狗友（悪友）」などである。「狗腿子（犬の足）」「哈叭狗（ペコペコする人を喩える）」「走狗」などというあだ名は犬の奴隷性を表している。「忠義」は犬の大きな特徴だが、この特徴には二面性があり、いい意味から見れば、忠勇の精神を表す。悪い意味から分析すると、権勢に媚びるイメージを表す。犬の卑賤な地位は犬の肉にもひきづかれ、例えば「狗肉上不了席面（犬の肉は食卓の上に出せない）」「挂羊头卖狗肉（羊の頭を吊って犬の肉を売る）」などの言葉も存在している。

曹雪芹の『紅樓夢』では「你就狗仗人势，天天作耗，在我们跟前逞脸。（筆者訳：この人の威を借る犬め。毎日毎日騒ぎを起こしてばかり。なのに大きな顔をして）」とある。犬が人の権力を笠に着ているという意味で、走狗や手先、あるいは悪党が主人の権勢に頼って威張り散らす人を表している。

人間は犬と切っても切れぬ絆で結ばれた当初から、犬の忠実さや従順さ、利口さなどを称えつつ、他方では犬の奴隷性を卑しむという性質もあった。

古代の人が犬を飼う理由は主に番犬の役割のためである。現代に至るまで、番犬ため飼う人がいる（特に農村が多い）が、ペットとして飼う人が増えてきた。現代では、犬は主人に家族のように扱われていることもあるが、中国文化の影響で、犬に関する呼び方で人のあだ名として使われる場合はほとんど狗の奴隷性が強調されている。

5.4.3 結び

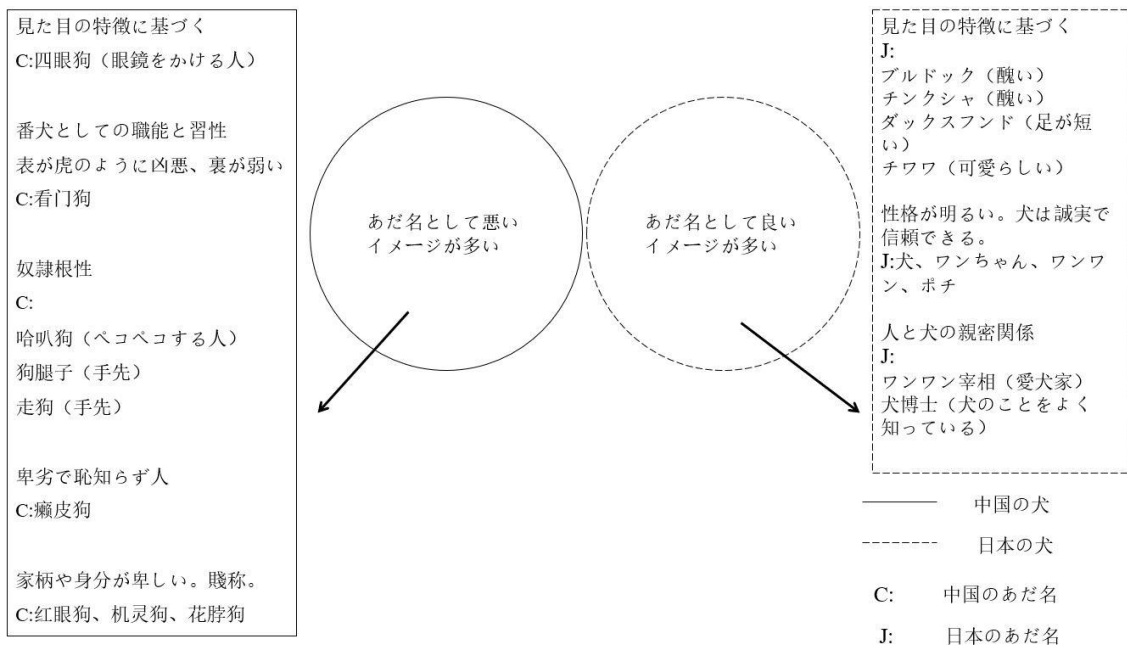


図 19 日中の犬のイメージに関するあだ名の比較

日中両国で犬に対するイメージを比較すると、日本ではいいイメージが多いが、中国では悪いイメージが多い。日本では、人をほめるため「チワワ」というあだ名を使う。犬の可愛らしさを人の可愛い姿に喩え、相手に愛情を伝える。人を揶揄う際は、醜い顔を表す「ブルドック」や「チンクシャ」などがあり、足が短いことを表す「ダックスフンド」というあだ名もある。見た目に因むあだ名には多少悪い意味を含むあだ名があるが、それ以外の、犬の性格に因むあだ名はほとんどほめる気持ちで付けられる。例えば、犬の明るく人懐っこい性格や誠実で頼りになる特徴から付けられる。さらに、人と犬との親密な関係に因んであだ名をつけるのも普通である。愛犬家に「ワンワン」というあだ名をつけたり犬のことをよく知っている人に「犬博士」と付けるなどがある。

一方、中国においては、犬に関わるあだ名をつける場合、あまりいい意味が見つからない。中国語では犬に関するあだ名は犬の見た目、習性、文化の特徴という三つの角度からつけられる。最も表面的な見た目のメタファーの一番典型的なあだ名は「四眼狗」である。一般には「四眼狗」と呼ばれる人はほとんどメガネをかけている。四つの目があるように見える。番犬としての職能や犬としての習性に基づいたあだ名もある。例えば、「看門狗」というあだ名がある。犬のイメージに基づき人にあだ名をつける際に、なぜ悪い意味が多いのか。なぜなら中国独特の文化の影響を受けたからである。犬の奴隷根性に基づいて人にあだ名をつけると、「哈叭狗」「走狗」「狗腿子」などがある。卑劣で恥知らず人に「癩皮狗」というあだ名をつける。「癩皮狗」を日本語に訳す、「禿げ犬」である。しかし、見た目の特徴に関わったことを表すが忌まわしく、恥知らず、下劣で卑怯な奴隷根性が伝わらない。つまり、犬に対する奴隷根性は中国文化だけに存在していると思う。そのほか、家柄や身分が卑しいことや賤称を表す時に、犬のイメージに基づきあだ名をつけられる。例えば、「紅眼狗」、「机灵狗」、「花脖狗」などである。

第6章 あだ名と社会問題

文学作品で比喩の表現を用いたあだ名は、読者のため人物像を生き生きと描く重要な役割を担っている。例えば、中国の『水滸伝』の108豪傑のあだ名、魯迅文学作品の「阿Q」や「孔乙己」、日本における西加奈子著『サラバ!』の「ご神木」「ライアーフォックス」「幽霊」、夏目漱石著『坊ちゃん』の「狸校長」「山嵐」「赤シャツ」など。文学作品ではあだ名は目印のような存在であり、読者が人物像を描くのをお手伝いしている。

戦争映画や刑事もののドラマなどで、チームで協力することが必要な職種の場合、あだ名で呼び合うことが多い。日本でも『太陽にほえろ!』というドラマの刑事たちは、本名の山村誠一からとられた「やまさん」、巡査部長の「長さん」、ごり押しの調査をするから「ごりさん」、貴公子のような甘いマスクだから「殿下」など、役職や本名、または見た目や特徴からとられた、ユニークなあだ名が多用されている。そのため、チームの仲間をより親しく感じ、距離が近づくことになり、チームとしては団結し、信頼関係を築き働きやすくなる。

あだ名は人の特徴を捉え、イメージを十分に伝えるため、日常生活でもよく用いられている。あだ名は本名より覚えやすく、距離間を縮めるというメリットがあるため、広く使われている。

一方、日中両国には、あざけりの感情を持ち、他人を侮って自分の優越感を増すためにつけたあだ名が存在している。例えば、日本における「河童」、「豚」、「ちび」、「アフリカ人」、「巨人」、「メガネ君」、「骨」、「猿」などである。中国には人の身体的欠陥に着目してつけたあだ名(外号)がある。例えば、「歪嘴(歪んだ口)」「斗鸡眼(寄り眼)」「磕巴(どもる人)」「扇风耳(横に張り出した耳)」「小短腿(短い足)」「斜眼(斜視)」「瘸腿(びっこをひいて歩く人)」「独眼龍(片方の目がつぶれている人)」「独臂(片腕)」「光头(坊主頭)」「麻子(そばかすだらけの人)」「蒜头鼻(獅子鼻)」「大象腿(象のような太い足)」などである。あだ名について、中国での定義の中には、「憎悪」の感情を持ち、罵る言葉として扱われるものもある。例えば、「破鞋(破れた靴という意味。ふしだらな女を指す。)」、「人妖(おかま)」、「废物(くずもの)」、「脑残(馬鹿者)」、「大王八(カメという意味。妻を寝取られた男を指す。)」、「不正經(みだらで、いやらしい人)」などである。

これらのあだ名が存在することにより、いじめのような社会問題につながるのである。日本社会にしても、中国社会にしても、いじめ問題は深刻になっている。特に学校でのいじめ問題は近年全国民関心の社会問題になり、よくニュースで見られる。

2009年3月3日に皇学館高等学校に通う男子生徒がいじめを苦しんで自殺した。複数の同級生が自殺した男子生徒の嫌がるあだ名をつけたり、消しゴムのカスを投げつけるなどの行為を日常的に行っていた。あだ名はクラス内に広まっていたが、教師は気付いていなかった。(Wikipedia 掲載)

岐阜県海津市立平田中学校の50代の男性教諭が、生徒にあだ名をつけ始めたのは昨年夏ごろからで、女子生徒に「サル」とつけたほか、授業がわからない不特定多数の生徒に「宇宙人みたいだ」などのあだ名を呼んでいた。学校が事実を確認したうえで学年集会を開き、生徒に謝罪したという。男性教諭は「親しみを込めたつもりだった」と話しているという。(SANSPO 2017年2月18日 掲載)

埼玉県所沢市で2017年に自殺した市立中1年の男子生徒を巡り、市教育委員会はいじめに関する第三者委員会の調査報告書を公表した。侮蔑的なあだ名で呼ばれるなどのいじめがあったと認定。部活動や勉強への苦手意識といった要因も絡み、自殺に至ったと結論付けた。(『埼玉新聞』2019年12月14日 掲載)

日中両国のあだ名(外号)に対する定義や実際の生活の中でのあだ名(外号)の使われ方から見て、あだ名の作用を以下に分析してみる。

① 距離感を縮め、人と親密感を増す

日本語の「あだ名」と中国語の「外号」の定義から、「親しみを込める」という一面があるとわかる。そのため、親しく呼び合いたい心理が働く。親しみが込められていて、呼ぶ方と呼ばれる方の間に共通の認識があるあだ名だからこそ、絆や相手を親しく感じる心理が強くなる。友達からつけてもらった呼び方は、愛情や友情が込められているので、何年経っても忘れられない呼び名である。

ファンがアイドルにあだ名をつけるのも親しみの気持ちからである。前節に挙げた例のように、新垣結衣を「ガッキー」と呼び、張国榮(レスリー・チャン)を「哥哥(お兄さん)」と呼ぶなどで、ファンはアイドルとの絆を築ける。芸能界、スポーツ界、さらに国家の首脳にもあだ名をつける。中華人民共和国を創立した元国家主席である毛沢東を「毛爷爷(毛おじいちゃん)」と呼び、今の国家主席である習近平を「習大大(習おじさん)」と呼ぶなどがある。人民と首脳の間に関係が近づいて、平和な社会を築く助力となるかもしれない。

② 本名よりあだ名は覚えやすい

覚える努力をしても、相手の名前を覚えるのが苦手という人は、特徴や名前の短縮形をあ

だ名にして覚えやすくする。会った時のイメージがそのままあだ名に結び付けられているので、苗字より覚えやすい。覚えにくいならばより簡単に覚えやすい呼び方を求めるというのがあだ名で呼ぶ心理である。

③ 文学作品で人物の個性を際立たせる

あだ名が文学作品の中でよく使われる理由は、鮮明に人物を描写し、読む人に深い印象を与えるためである。本名と比べ、あだ名は人の特徴をより多く表すことができる。現実にいる人と異なり、読む人は、文を通して人物の性格や外貌を読み取る。現実生活にある物をあだ名として付けると、想像しやすく連想しやすい。

④ 他人を侮って自分が優越感にひたる

「あざける」という定義から、他人を侮って優越感に浸ることがあるとわかる。ある人は時には表立って他人を攻撃したくなることがある。あるいは、人に嫌なあだ名を付けることによって、自分自身が満足感を得る。この④番目の心理はいじめ問題を起こしやすいと思う。

⑤ 他人に憎悪の感情を持ち、罵るため

中国でのあだ名の定義から見れば、親しみや、あざけりの意味を込めたあだ名以外に、憎悪の感情を持つあだ名もある。日本における四番目の動機のように同じ悪い意味を持つあだ名であざける感情となるが、中国においてはよりきつく、他人を罵るためつけることもある。

近年、日本にしても中国にしてもあだ名(外号)を禁止するという訴え掛けが増えてきた日本の学校での「あだ名禁止」の動きは、いじめ全盛の1990年代後半から見られ始めた。2013年施行のいじめ防止対策推進法、2017年発表の国のガイドラインを受け、いじめの早期発見のために子どものあだ名や呼び名に気を配ることが重視されるようになった。「あだ名」「呼び捨て」で呼んだり、呼ばれたりすることで親愛の情が深まったり、コミュニケーションが良好になることもあり、「ジャイアン」と「のび太」が「剛田さん」「野比さん」と呼び合うようになったら味気ないなど、「呼び名」に厳しい制約が課されることには賛否両論がある。

中国でも、近年あだ名といじめ問題を関連してみなされることがよくある。以前は、いじ

め問題と言えば、暴力行為だけだと思える人が多かった。この頃では、いじめには行為上と言語上という二つ面があるという声が増えてきた。しかし、日本と比べ、あだ名によって起きたいじめ問題についての関心度はまだ低いようである。インターネットで検索すればよくわかる。「いじめ」や「あだ名」などのキーワードを入力しても、記事はなかなか見つけれない。わずかにでてきた検索結果を見ると、「あだ名の濫用はいじめ問題でしょうか」という討論記事が多い。つまり、あだ名によるいじめ問題は多くの中国人にとってまた初期段階だと思える。幸いなのはあだ名によって起こったいじめ問題を重視する傾向が少しずつ現れてきたことだ。2018年11月12日、広東省教育庁など13の部門が共同で「小中学生いじめ総合対策案強化実施弁法（試行）」を発表し、いじめの分類、予防、対策などの問題について明確に規定した。「小中学生いじめ総合対策案強化実施弁法」では、いじめられた者の心理に軽微な苦痛を与えることは違法行為とみなされないが、いじめ事件に属し、そこには他人に侮辱的なあだ名をつけたり、相手の人格を踏みにじったり、相手の財物を傷つけたり、メディアで他人の人格を貶めたりする言論も含まれている。この弁法であだ名は正式にいじめの一つとしてみなされた。

あだ名について中国語の定義を見ると、中国のあだ名は「憎悪」の感情を持ち、ののしる言葉として相手を攻撃する一面があるが、中国においては大きな社会問題になっていない。その理由を以下に分析する。

①

あだ名は中国文学作品での使用はものすごく多い。中国の小説家趙樹里は自分の作品の登場人物にあだ名をつけることが好きである。あだ名のメリットについて、趙は以下のように述べている。

「外号啊！有人说太多了。不过我想外号这东西很好，它便于人们记忆，譬如水浒传里的人物，人人都有一个外号，黑旋风、豹子头、花和尚、及时雨、浪里白条……这些浑名很容易被读者记住。外号常常是人物性格的标志。……农民差不多都有外号……你听得多了，会觉得农民的智慧的确很富，取的外号挺适合这个人的性格，我不过是把这些人每人配了一顶合适的帽子罢了。」

（『趙樹里文集（四）』趙樹里）

（筆者訳：ニックネームか？多すぎるといえる人がいる。でも、ニックネームはとてもいい物だと思う。水滸伝のような人物誰でもあだ名がある。「黒旋風」、「豹子頭」、

「花和尚」、「及时雨」、「浪里白条」など。これらのあだ名は読者にとって覚えやすい。あだ名はしばしば人物の性格の特徴を表す。農民はほとんどの人があだ名を持っている。色々聞いていると、農民の知恵は確かに豊富だと思う。呼ばれたあだ名はその人の性格によく合っていると思う。私はこれらの人物それぞれにふさわしい帽子をかぶせてあげただけだ。）

古代の文学作品から近現代まであだ名は中国文学の一つの特色だと言える。文学作品の人物のイメージはあだ名を通して、読者に深い印象を与えた。あだ名が文学作品で活躍し推奨されることは現実社会での使用を助長する。

②

中国では古来より色々な名をつける風習があるため、あだ名は日本より数も多く種類も豊富である。中国においては、昔から賤名をつける風俗習慣がある。子どもを健康に成長させるため、「犬」、「羊」、「猪」、「馬」など動物名を名づける親も少なくない。遼代の貴族の中に「驢糞（ロバのくそ）」を賤名として使う人が居た。金朝では、刑部郎中「海狗」、四方館史「李瘤驢」、「唐括狗兒」、「完顔猪兒」等の賤名が存在している。現在、賤名をつけるという風習はまだ中国の一部地域で残っており、特に田舎では賤名を持つ人が多い。よく知られている賤名には、「鉄柱（鉄で作った柱）」、「狗剩（犬が食べ残した食べ物）」、「臭蛋（腐った卵）」等がある。賤名は下品であればあるほど、魔除けの役割を果たすとされる。そのため、言葉としてはあざけり、憎悪し、侮辱するものだが、実際には親が子供の健康を祈るという気持ちが込められている。賤名をつける際は、その子の身体的欠点などを表し、わざと下品な表現を用いる。例えば、「黒臀（黒いお尻）」、「大痣（大きなあざ）」などのあだ名がある。そのため、中国において、汚らしい言葉を使って名をつけることは、ある程度受け入れられやすい。

③

中国人には生まれつきのユーモア感覚があるという民族性格とも関係があるようである。正月の中国の春節聯歡晚会（日本紅白大合戦のようなもの）では相声（漫才）や小品（コント）というパフォーマンスがほぼ半数を占め、大人気である。また、近年、相声や小品を主題にした番組がたくさん出てきた。昔からある相声や小品以外に、脱口秀（一人の漫才）も

新たな形で流行っている。これらの番組は観客を喜ばせるため作られているのである。中国人はユーモアを求める精神が生活の隅々に見える。そのため、この環境で生活する中国人はあだ名に対して寛容である。かなり悪い意味を含むあだ名がつけられても、冗談と解釈して、気にしない人が少なくない。これも中国社会で日本ほどいじめが問題になっていない理由の一つかもしれない。

④

日本と比べ、中国では、他人がどう思うかを気にするより、自分の事や感覚を大事にする気持ちが強い。中国ではバスや地下鉄の中で、お年寄りに席を譲ることは普通なことである。お年寄りも喜んで受け入れる。しかし、日本では、お年寄りに席を譲る時に、年寄りに扱われることで気分を害する人もいるし、そう思われることを心配したりすることもある。日本社会で他人に迷惑をかけないようにという理念が浸透している。他人の立場に立って考える日本人は多い。一方、中国では、一般的には自分の感覚をより大事にする。他人の事が自分と関係がなく、憎悪の感情を込めて悪いあだ名をつけられても、無視する中国人は少なくないと思う。これも中国社会で日本ほどいじめが問題になっていないもう一つの理由かもしれない。

近年、あだ名を禁止する声がどんどん広がっていると同時に、あだ名に関して以下のような出来事もあった。ある小学6年生男子は友人からあだ名「おから」と呼ばれることで苦悩していた。そこで、担任の先生との間で行われていた交換ノートに悩みをつづった。先生はクラスで2時間におよぶ話し合いの場を設けた。そこで、同級生は初めて、その男子が苦しんでいることに気付き、「今度から直そうと思った」という。その後、この男子児童は「どやがおん」という新しいあだ名で呼ばれるようになった。由来は縄跳びを跳んだ時の表情がドヤ顔だからという理由だ。彼は「どやがおん」というあだ名に嫌悪感はないという。嫌がられるあだ名を止め、呼ばれる者に受け入れられるあだ名を呼ぶことで、いじめから抜け出したそうである。

2018年、全国教育問題協議会常任理事である山本豊は「いまどき小学生の呼び名問題」について以下のように述べていた。「こういう禁止は馬鹿げているし、実効性がない。学校がいくら禁止しても、あだ名はなくなる。それは子どもたちのコミュニケーションにとって不可欠なツールだからだ。学校で教師が見ている場所では、あだ名を使わなくても、子

どもたちは、おけいこ事、学習塾、あるいは校外で遊んでいるときには、あだ名で呼び合う。もちろん、あだ名の中には「バイキン」「ゴキブリ」「チビ」「デブ」「ノロマ」など、いじめにつながりやすいものもある。そのような侮辱的なあだ名については、なぜそういうレッテルを他人に貼ってはいけないかについて、丁寧に説明すればいい。そうすれば、子どもたちはそんなあだ名を使うことを止める。児童間で「さん」「くん」と呼ぶことを義務づけるのも間違っている。」

NHK が掲載したあだ名に関する話題には「嫌がったら相手の思うツボ。平気であることを分からせるのがいいかと思います。私も天然パーマをいじられて「焼きそば」って呼ばれてめちゃくちゃ嫌でしたが、「美味しいよ」って言ったら一気に仲良くなりました。」というコメントがあった。人を貶めるあだ名以外には、揶揄うか可愛がるかどのような気持ちで付けたのか、呼ぶ人以外は把握できない。実際あだ名に攻撃性があるかどうか、いじめ問題になるかどうか、これは呼ばれる人が呼ばれた時の気持ちによって判断するのだろう。

あだ名が存在するべきであるか否かという問題については、社会には支持する人もいれば反対する人もいるような状態である。あだ名には二面性が存在する。悪意や侮辱的な意味を持つあだ名を用いず、あだ名を付ける時に相手の同意を得るのであれば、あだ名を付けることは良いことであり、生活の面白みや楽しみを増やすものである。

第7章 結語

本論文では、第1章は序論である。日中両国で現代社会及び文学作品であだ名がよく使用されているという現状を述べた。一方で、欠点や弱点に基づいてあだ名を付ける時もある。そのため、一部のあだ名は嘲笑、皮肉、罵声などの侮辱的な面が存在する。その結果、近年ではあだ名といじめ問題が関連付けられるようになった。

第2章では先行研究について考察を行った。従来の研究では、日中両国ともにあだ名に関する研究が心理学、社会学、認知言語学などの領域からなされていることが分かった。しかし、文化的観点からは日中両国のあだ名についての比較研究はほとんどない。例えば、大野木(2018)の中で、「身体的欠陥を指摘したりするあだ名の使用は差別的で不適切である」と論じられている。日本社会では確かに身体的欠陥に基づいてあだ名を付けることは少ない。しかしながら、中国では身体的欠陥に基づいてあだ名を付けることはよくある。ここに日中両国間において大きな差異が存在している。そのため、あだ名に関する日中比較研究は非常に有意義なことである。

第3章では、まずあだ名(外号)の定義から分析した。あだ名の定義について、日本では、「親しみを込める」「あざける」という2点が提示されているが、中国においては「憎悪」という感情も書かれ、3点が提示されていることを明らかにした。なお、日本のあだ名と中国の「外号」の由来を考察した。

第4章では、日中両国のあだ名のつけ方を考察する上で、以下の13種に分類した。

- ① 見た目からつけられたあだ名
- ② 性格からつけられたあだ名
- ③ しぐさの特徴からつけられたあだ名
- ④ 好み・優れた点からつけられたあだ名
- ⑤ 本名から変形したあだ名
- ⑥ 雰囲気からつけられたあだ名
- ⑦ 身につける物・持ち物からつけられたあだ名
- ⑧ 職業・家業・身分・環境・役割からつけられたあだ名
- ⑨ 出来事からつけられたあだ名
- ⑩ 失言・口癖・独特の口調・話題からつけられたあだ名
- ⑪ 年齢・生年・性別・出身地からつけられたあだ名

⑫ 歴史上の人物や典故からつけられたあだ名

⑬ 親族・長幼関係があるためつけられたあだ名

この中の①から⑪は日中で共通する分類方法である。⑫と⑬は中国特有の分類方法である。

①から⑪は日中両国で共通する特徴として本章の中で探究を行った。全体的な大きな分類方法の中で日中両国は①から⑪は一致しているが、その中における小さな分類では日中両国のあだ名のつけ方に相違点と共通点が存在する。日中両国のあだ名を比較する上で、両言語に反映される日中両国の認知的・文化的共通性と相違性を明らかにした。

⑫と⑬は中国の独特な文化背景における特有のつけ方である。

⑫歴史上の人物や典故から付けられたあだ名では、「小漢卿」「猛張飛」「小諸葛」「二諸葛」「賽諸葛」などがある。『水滸伝』の登場人物のあだ名（外号）を例に挙げると、呂方は温侯である呂布のように方天画戟という武器を使うため「小温侯」と呼ばれる。郭盛は自身の戟の腕が名将薛仁貴にも勝ると標榜していたため、「賽仁貴」と呼ばれる。花栄は空を飛ぶ雁の頭を射抜くほどの弓の名手なので「小李広」と呼ばれる。このようなあだ名は中国人の古人崇拜という思想と関係があると推測した。

⑬親族・長幼関係があるため付けられたあだ名は、例えば家族が三人そろって「老糖餅」「糖餅」「小糖餅」と呼ばれること、また、親子三人が「大積極」、「二積極」、「三積極」と呼ばれることなどがある。『水滸伝』では兄が「没遮拦（さえぎる者がいない）」と呼ばれたために弟が「小遮拦」と呼ばれ、兄が「病尉遲」と呼ばれたために弟が「小尉遲」と呼ばれた例もある。その他、「老不死（死に損ない老いぼれ）」「老東西（老いぼれ）」「小東西（チビ餓鬼）」「这孫子（こいつ）」「那孫子（あいつ）」などのあだ名（外号）もある。中国の文化には「長幼の序」を重んじる儒教思想があり、あだ名（外号）を付ける方法もこの儒教思想の影響を受けている可能性がある。また、中国の昔からの長幼の序列、祠堂の順位、家族に対する複雑な呼び名からも長幼の序を重視していることが分かる。これも中国で親族関係のあだ名が存在する要因の一つであると推測した。

第5章では、範囲を狭め、角度を変えて動物のイメージに基づいてつけられたあだ名を考察し、日中動物の特徴（馬、驢馬、タコ、ガチョウ、鶴、キリン、狼、猿、牛、虫鷄、鴨など）と人のあだ名との関係を明らかにした。その中でも、代表的な動物である日本の狸と中国の狐、虎及び犬を通して、あだ名として使う時の共通点と相違点を分析した。

人のイメージをあだ名（外号）にする時、化けて人間を騙そうとするがどこか間が抜けて

いるユーモラスな姿があり、また裏表がある人を表す方法として、日本の場合は「狸」、「狸みtainな人」「狸親父」という言葉を使うことが多い。

日本の狸は茶色であるため、不細工で服にお茶やコーヒーのシミが付いている薄汚れた中年男と似かよっている。お腹が膨らんで顔の両側に長い毛が生えている姿は、下ぶぐれでビールを大量に飲んでお腹が出てきた中年男性とそっくりで、可愛い一面がある。見た目以外にも、性格からあだ名をつけることがある。狸は変身して人を化かす。表面的には優しく可愛らしいように見えるが、心の中では何を考えているのかが見通せず、裏表がある。中国の場合は「狐狸（キツネ）」「老狐狸（ラオキツネ）」で表し、「狸」は使わない。悪巧みや狡猾さから、日本の「狸」と呼ばれる人よりさらに貶す意味合いが強い。

また、中国では妖艶、美しい、誘惑、淫売、気まぐれなどの特徴がある女性にキツネに因んだ「騷狐狸」「狐狸精」というあだ名をつける。男を誘惑する淫らな女を指す。『聊斋志异』では、たくさんの若く美しく、男の魂まで抜き取る誘惑力がある狐狸精の姿が描かれている。九尾の狐が化けた妲己も自分の美貌を利用して殷の紂王を惑わし、国を滅ぼした。美貌は狐狸精の最大の特徴だと言える。「狐狸精」をあだ名とした女は魅力があり、ほとんどが美人である。一方、日本語には「狐狸精」というイメージを表現するあだ名がない。日本には「女狐」という言葉があるが、意味的には「男を誘惑する」という一面よりもむしろ「女のずる賢さ」を強調しているようである。しかし、中国の「騷狐狸」「狐狸精」は色気で男を惑わし媚びる様子を強調している。

虎というあだ名は、日本と中国は同じように、虎の逞しい体や勇猛な姿などの特徴を豪傑に喩え、日本の武将や中国の英雄などによく使われる。本当は弱いのに虚勢を張っている人を表す時にも、日中両国とも虎に因んで、日本では「張り子の虎」と言い、中国では「紙老虎」と呼ぶ。ただ、元々張り子の虎の形が日本と中国では異なるため、日本では「張り子の虎」で主体性がなく人の言うことにただ頷いている人や、首を動かす癖がある人を指すこともある。また、同様に独特な日本文化の影響を受けた、ひどく酒に酔った人を表す「大虎」という言葉もある。一方、中国において、虎について日本との共通なもの以外に、虎のイメージに基づき人に付けるあだ名は数多くある。迫力があり恐れられる動物のイメージから、怒りやすく凶悪な人に喩えた「老虎」というあだ名がある。女の粗野な姿や凶暴なイメージを表す時には、「母老虎」というあだ名がよく使われる。基本的に虎は凶悪な姿であるが、人の裏と表のどちらの面にそのような凶悪な姿が見られるのかによって、中国ではあだ名が異なる。表面が虎のように凶悪だが内面が弱い人は「紙老虎」と呼ばれるが、逆に内面が

虎のように凶悪だが表面が優しそうに見える人は「笑面虎」と呼ばれる。また、勇敢で大胆であるが、無鉄砲に行動する人を虎に喩えることもある。「虎子」と「虎妞」というように男女によって使い分けられるあだ名も存在している。

日中両国で犬に対するイメージを比べると、日本にはいいイメージが多いが、中国には悪いイメージが多い。日本では醜い見た目を表す「ブルドック」「チンクシャ」、足が短い「ダックスフンド」以外はほぼ人をほめるあだ名であり、可愛らしさや明るい性格を表す。人間と犬の親密関係に基づきつけられたあだ名「ワンワン宰相」「犬博士」などもある。一方、中国では犬のイメージに基づきつけたあだ名にはあまりいいイメージがない。見た目以外でも、可愛らしさを表す表現があまりない。日本と違い、中国文化では犬は奴隷根性がある動物だと思われるからである。したがって、「哈叭狗（ペコペコする人）」「走狗（手先）」「狗腿子（何でもやれる、駆り立てられる卑しいやつ）」などのあだ名がよく使われている。卑劣で恥知らずな人は「癩皮狗」と呼ばれる。文学作品の中でも、家柄や身分が卑しい人を人間より下である犬に喩えた「紅眼狗（目が赤い奴）」「机灵狗（身分が低く賢い人）」「花脖狗（首にあざがある奴）」などのあだ名がある。

第6章では、まず、日中両国には、あざけりの感情を持ち、他人を侮って自分の優越感を増すためにつけたあだ名が存在することにより、いじめのような社会問題につながるということを提示した。日中両国のあだ名に対する定義や実際の生活の中でのあだ名の使われ方から見て、あだ名は人と人の距離を縮め、親近感を増すことが分かる。あだ名は本当の名前よりも覚えやすく、文学作品の中では人物像がより生き生きと描写されている。しかし、自身の優越感を強調するために他人を嘲笑うあだ名もある。また、中国には悪意を表すためのあだ名があり、それを用いて他人を罵倒するという良くない一面もある。

近年、日本にしても中国にしてもあだ名を禁止するという訴え掛けが増えてきたが、日本と比べると中国ではあだ名によって起きたいじめ問題についての関心度はまだ低いようである。あだ名について中国語の定義を見ると、中国のあだ名は「憎悪」の感情を持ち、ののしる言葉として相手を攻撃する一面があるが、中国においては大きな社会問題になっていない。その理由を文学作品での活用、汚らしい言葉を使って名をつける風習、ユーモア感覚があるという民族性格、他人の考え方を気にしない考えという四つの面から分析した。

最後、あだ名が存在するべきであるか否かという問題については、悪意や侮辱的な意味を持つあだ名を用いず、あだ名を付ける時に相手の同意を得るのであれば、あだ名を付けることは良いことであり、生活の面白みや楽しみを増やすものであると論じた。

本論文は、言語文化の視点から見たあだ名についての日中比較研究である。現時点では、日中のあだ名について、文化の角度から分析した先行研究はほとんどない。特に、日中あだ名の比較研究はほとんど存在していない。この点において、本研究が今後の「あだ名の言語学」「あだ名の文化学」の研究と言語文化的な視点に基づく日中比較研究に貢献できれば幸いである。

今回はあだ名に対して共時的な研究を行った。今後はあだ名について通時的な研究を行い、異なる時代におけるあだ名の相違点・共通点と変化を探究したいと思う。なお、今回は主に動物のイメージに基づいてつけられたあだ名を研究したが、他のあだ名も数え切れないほど存在する。今後は食べ物、植物などのイメージに関わるあだ名を研究したいと思う。

参考文献

日本語文献

- 赤尾重樹 (1986) 「あだ名・呼び名について」『言語生活』07:52-54、筑摩書房.
- 天野祐吉・多田道太郎・関沢英彦・山口仲美 (2000) 『たのしいネーミング百科』、学陽書房.
- 淡野将太・前田健一 (2007) 「大学生とニックネーム—ニックネームの由来とニックネームに対する感情について—」『広島大学心理学研究 第7号』、311-314、広島大学心理学研究.
- 嵐山光三郎 (2013) 『徒然草 現代語訳』、47、岩波書店.
- 巖 歌苓 (2015) 『妻への家路』、鄭重 (訳) 563、角川書店.
- 原田龍二 (1996) 「「キムタク」愛称語の許容度について」『音韻研究—理論と実践』、開拓社、93-94.
- 星田晋五 (2002) 『名前の研究』、近代文芸社.
- 濱田陽 (2010) 「日本十二支考〈寅〉」『帝京大学文学部紀要 日本文化学』、41: 177-214.
- 博学こだわり倶楽部編集 (1994) 『なるほど・ザ・「あだ名」——知りたかった博学知識ぴったりの愛称、ニックネームはこうしてついた』、河出書房新社.
- 岩井宏實 (2006) 『「君の名は」の民俗学』、河出書房新社.
- 池澤夏樹訳 (2014) 『古事記』、河出書房新社.
- 加納喜光 (2007) 『動物の漢字語源辞典』、東京堂.
- 河上誓作 (1992) 「ニックネームの言語学」『成田義光教授還暦祝賀論文集』、441-451、英宝社.
- 河合隼雄 (1995) 『日本人とアイデンティティ』、講談社.
- 河合勝・長野栄俊 (2017) 『日本奇術文化史』、東京堂.
- 河合勝・長野栄俊・森下洋平 (2020) 『近代日本奇術文化史』、東京堂.
- 清海節子 (2010) 「名前とネーミングの考察--愛称・会社名・ペットの名前」『駿河台大学論叢』(41)、81-103.
- 森岡健二 (1977) 「命名論」『言語生活』、203-248、岩波書店.
- 森岡健二・山口仲美 (1985) 『命名の言語学—ネーミングの諸相—』、東海大学出版会.
- 森永正裕 (2018) 「第3回 石炭大国・中国のいま」『IDE スクエア -- 世界を見る眼』、

- 1-8、本貿易振興機構アジア経済研究所.
- 牧野恭仁雄（1991）『赤ちゃんの名づけ事典』、株式会社主婦の友社.
- 松村明（2006）『大辞林 第三版』、三省堂.
- 三浦浄心（茂正）（明 39.6）『慶長見聞集』、富山房.
- 三好智子（1999）「女子中学生のニックネームについての探究的研究」『京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要』、03: 128-137.
- 源順（著）・那波道圓（校）（1617）『倭名類聚鈔 20 卷』、渋川清右衛門.
- 野中陽一朗・井上弥（2011）「ニックネームの被呼称時に生起する感情に基づく分類」『広島大学大学院教育学研究科紀要』、60:31-36.
- 夏目漱石（1969）『夏目漱石集』、新潮社.
- 中村禎里（2001）『狐の日本史 古代・中世篇』、日本エディタースクール出版部.
- 中村禎里（2003）『狐の日本史 近世・近代篇』、日本エディタースクール出版部.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会（2000）『日本国語大辞典 第二版』、第 1 巻：299、小
学校館出版.
- 大野木裕明（1996）「あだ名の研究（1）：夏目漱石「坊ちゃん」」『日本性格心理学会発表論
文集』、5(0)：60-61、日本パーソナリティ心理学会.
- 大野木裕明（1997）「あだ名の研究（2）女子学生のあだ名と根拠」『日本性格心理学会大
会発表論文集』、6(0): 30、日本パーソナリティ心理学会.
- 大野木裕明（1998）「あだ名の研究（3）教師のあだ名と根拠」『日本性格心理学会大会発
表論文集』、7(0):76-77、日本パーソナリティ心理学会.
- 大野木裕明（2015a）『呼称の対人的機能』、ナカニシヤ出版.
- 大野木裕明（2015b）「小説『サラバ！』にあらわれた登場人物のあだ名の付け方」『仁愛大
学研究紀要（人間生活学部篇）』、7:73-81.
- 大野木裕明（2016）「あだ名の研究（7） - 『二十四の瞳』 - 」『日本教育心理学会第 58 回
総会発表論文集』、277.
- 大野木裕明（2018）「あだ名の心理学的アプローチ」『心理学の諸領域』、7(1):13-16、北陸
心理学会.
- 荻原祐二（2015）「近年の日本における個性的な名前の特徴とその類型」『人間環境学研
究』、13(2):177-183.
- 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守（2007）『日本書紀』、小学館.

- 緒方隆文 (2011) 「メタファー・シミリ・メトニミー・シネクドキ」『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報』、22:115-129.
- 緒方隆文 (2013) 「ニックネームと語形成：カテゴリー分析による命名プロセス」『筑波女学園大学・筑波女学園大学短期大学紀要』、27-39、筑波女学園大学.
- 李卓 (2001) 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」『日文研フォーラム / 国際日本文化研究センター編』、第 138 回.
- 林語堂 (1999) 『朱門』62、四竈恭子訳、白帝社.
- 老舎 (1982) 『老舎小説全集 4 猫の国・牛天賜物語』155、日下恒夫訳、学習研究社.
- 魯迅 (1955) 『阿 Q 正伝・狂人日記 他十二篇 (呐喊)』106、112、竹内好訳、岩波文庫.
- 杉本つとむ (1987) 「平賀源内と江戸詞—近代語史の視点を定めるために—」、『国文学研究』、93:57-67.
- 佐藤稔 (2007) 『読みにくい名前はなぜ増えたか』、吉川弘文館.
- 佐竹昭広・山田英雄・工藤力男 (2013) 『万葉集』、岩波書店.
- 小学館国語辞典編集部 (2006) 『精選版 日本国語大辞典』、小学館.
- 高槻成紀 (2016) 『タヌキ学の入門』、誠文堂新光社.
- 徳田克己 (2004) 「子どもの名前のつけ方に関する研究—読みにくい名前、読み間違えられる名前を中心に—」『読書科学』、48(3):79-87.
- 鄭高咏 (2004) 「犬のイメージに関する—考察—中国のことばと文化」『言語と文化』、10:175-195、愛知大学語学教育研究室.
- 鄭高咏 (2005) 「虎のイメージに関する—考察—中国のことばと文化」『言語と文化』、12:113-134、愛知大学語学教育研究室.
- 豊田国夫 (1988) 『名前の禁忌習俗』、講談社.
- 田所将之・松田勇一 (2014) 「ニックネームに対する感情についての研究 -命名者・呼称者・理由・由来の違いによる評価-」『宇都宮共和大学都市経済研究年報』、14(0):136-153.
- 田中宣一 (2014) 『名づけの民俗学—地名・人名はどう命名されてきたか』、吉川弘文館.
- 田名部雄一 (1996) 「日本犬の起源とその系統」『日本獣医師会雑誌』、49(4) : 221-226.
- 田名部雄一 (1985) 『犬から探る古代日本人の謎—ヒトとともに生きてきたイヌの遺伝子が日本人のルーツを語る』、PHP 研究所.
- 谷口一美 (2003) 『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』、研究社印刷株式会社

社.

徳田克己 (2004) 「名づけの心理 2: 読みにくい名前の分析」『日本教育心理学会総会発表
論文集』、46(0): 623.

塚本真紀 (2014) 「きつねとたぬきの潜在的印象」『尾道文学談話会会報』、(5): 1-8、尾道
市立大学芸術文化学部日本文学科.

上野和男・森謙二 (1999) 『名前と社会—名づけの家族史—』、早稲田大学出版社.

ウンサーシュッツ ジャンカーラ (2016) 「現代日本における名付け事情とその変遷—男性
名と女性名の変化に着目して—」『立正大学心理学研究所紀要』、14:89-99.

吉田兼好 (著)・橘純一 (校) (1951) 『徒然草』、朝日新聞社.

山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』、くろしお出版.

山梨正明 (2012) 『認知意味論研究』、研究社.

山梨正明 (2015) 『修辭的表現論 認知と言葉の技巧』、開拓社.

山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄 (2007) 『新明解国語辞典』、三省堂.

山田悟郎 (2000) 「ゴボウ考」『北海道開拓記念館研究紀要』、28: 27-38.

山東京伝 (刊年不詳) 『近世奇跡考』大坂屋茂吉.

安井真奈美 (2014) 『出産の民俗学・文化人類学』、勉誠出版株式会社.

中国語参考文献

蔡智彬 (2013) 「中西“狗”文化差异探究及其高校外语教学启示」『南昌教育学院学报』、
28:12.

邓道君・刘来兵 (2016) 「中学教师绰号现象的调查与分析」『教师教育论坛』、06:60-62.

戴圣 (2017) 『礼记』、中华书局.

丁润生 (2003) 「伏羲虎文化与彝族八卦初探——兼谈伏羲文化是全球最古老的文化」『周易
研究』、06:36-40.

范晔・李贤 (1965) 『後漢書』、中华书局.

郭雪敏 (2015) 「浅析学习外号类新词」『巢湖学院学报』、02:96-99.

侯晓玲 (2009) 「学生给我起外号」『思想理论教育』、16:91.

侯广旭 (2001) 「绰号的社会语用分析」『语言教学与研究』、03:28-33.

韩宁 (2010) 「从中西方狗文化差异视角看狗习语翻译策略」『赤峰学院学报(汉文哲学社会科
学版)』 31(05):148-149.

- 贺佳颖 (2009) 「宽容也是教育——回应《学生给我起外号》」『思想理论教育』、20:92-93.
- 黄文范 (2012) 「赛珍珠及其「水浒传」中的外号翻译——赛译《水浒传》漫笔之一」『东方翻译』、02:78-79.
- 靳卫卫 (2004) 『走进日本—透视日本语言与文化』、北京语言大学.
- 贾崇柏 (1989) 「赵树理小说人物外号的艺术性」『山西大学学报』、03: 82-85、34.
- 姜子龙 (2005) 「《红楼梦》人物绰号漫谈」『沈阳工程学院学报(社会科学版)』、03.
- 金霞 (2005) 「英汉语中的“狗”文化差异」『边疆经济与文化』、10:71-72.
- 老舍(1999) 『老舍全集 第二卷』、新华书店.
- 孔庆东 (1999) 「十八天大楼的外号」『英才』、08:56-57.
- 刘向 (2019) 『列女传』、文物出版社.
- 刘永志 (2015) 『日汉双解 学习词典』、外语教学与研究出版社.
- 刘代容 (2008) 「中日姓名之比较」『重庆工学院学报(社会科学版)』、03:140-142.
- 刘桂敏 (1996) 「日本人的姓名观」『日本研究论集』、00:331-338.
- 罗树林 (2012) 「汉语鬼称谓与鬼文化」『琼州学院学报』、03:130-131+129.
- 吕不韦 (撰)·陆玖 (訳) (2011) 『吕氏春秋』、中华书局.
- 李浩 (2017) 『流声—中国姓名文化』、三联书店.
- 李娜 (2010) 「浅谈狐狸文化的历史流变和现代解读」『文学界(理论版)』、06:184-185.
- 李金斗 (2007) 「英汉语“狗”文化差异的比较」『现代企业教育』、10:194-195.
- 李顺祥 (2017) 『中国姓名学』、中央编译出版社.
- 李群群 (2014) 「略谈中日姓名的比较及其历史成因」『传媒与教育』、01:70-73.
- 李静 (2010) 「《水浒全传》人物绰号研究」、山东大学.
- 孟子 (2017) 『孟子』、中华书局.
- 南志刚 (1999) 「中国上古虎文化」『渭南师专学报』、06:18—23、92.
- 宁佐权 (2010) 「汉语成语中“狐狸”文化义生成机制浅析」『邵阳学院学报(社会科学版)』、04:64-66.
- 孙绪武 (2015) 『汉字与姓名』、暨南大学出版.
- 苏雪婷 (2012) 「中华狗文化的对外汉语教学策略研究」、苏州大学.
- 施耐庵·罗贯中 (2019) 『水浒传』、人民文学出版社.
- 司马迁 (2016) 『史记』、上海古籍出版社.
- 束定芳 (2009) 「绰号的认知语言学分析——以《水浒传》中 108 将绰号为例」『外语学

- 刊』、02:29-32.
- 唐锋、梁循、赵晓磊、张旋、程恒超（2019）「长文本武侠小说外号识别研究」『中文信息学报』、08:132-142.
- 王秋云（2008）「用“逆向刺激法”杜绝学生给别人起外号」『教书育人』、13:46.
- 王吴军（2012）「动物名成雅号 植物名为外号 地域名做绰号 清朝的十三个省都有外号」『中国地名』、03:26
- 王宗云·王文姣（2007）「中西方狗文化对比」『双语学习』、12.
- 王俊（2017）『名字与别号』、中国商业出版社.
- 王志成（2010）「虎文化的象征意义」『资源与人居环境』、03:73-75.
- 王泉根（1995）『中国姓氏考』第一書房.
- 王治理（2008）「中日姓名预测学漫谈及比较」『海外华文教育』01、71-78。
- 王充（著）·周丹评（訳）（2017）『论衡』、北京联合.
- 王同亿（1996）『高级汉语词典』、海南出版社.
- 吴敏（2000）「“狐狸”的文化差异」『英语学习』、12:46.
- 汪玢玲（2001）「中国虎文化探源」『广西民族学院学报(哲学社会科学版)』、01:65-69.
- 许慎（2015）『说文解字』、吉林美术出版社.
- 夏目漱石（2013）『哥儿』、林少華訳、中国宇航出版社.
- 萧遥夫（1970）『中国人名的研究』、槟城教育出版公司.
- 徐先高（2011）「话“狗”文化」『湖北函授大学学报』、06:155-156.
- 杨莉莉（2016）「“学 X”类学习外号的认知文化解读」『新余学院学报』、05:64-68.
- 杨雪峰（2009）「并不可怕的外号——回应《学生给我起外号》」『思想理论教育』、20:92.
- 颜师古（2019）『匡谬正俗』、中华书局.
- 晏建怀（2013）「宋朝士大夫的外号」『时代青年(悦读)』、08:62.
- 周密（1989）「“比喻性外号”修辞手法试析」『四川师范学院学报』、哲学社会科学版、02:76-80.
- 张晓艳（2012）「狐狸在中西文化中的象征意义对比」『青年文学家』、08:144.
- 张高领（2019）「“外号”与“取外号”——论汪曾祺小说创作的流变」『文艺理论与批评』、06:96-108.
- 张婷婷（2015）「文化视角下的中日狐狸形象研究——以儿童文学作品为中心」『东北亚外语研究』、03:69-73.

- 张畅（2013）「论古代文学作品中狐狸意象的性文化意义」『湖州师范学院学报』、04:12－15.
- 张朝阳（2006）「论《水浒传》人物绰号的艺术特色」『商丘师范学院学报』、06:35－37.
- 张敏（2009）「中日姓名之比较」『商业文化(学术版)』12:244.
- 朱积孝（1994）「中国的狗文化」『赣南师范学院学报』、3.
- 翟燕妮、尹庆华、孙倩（2019）「“外号”拉近班主任与学生之间的距离」『中国校外教育』、27:133.
- 赵瑞民（2016）『姓名与中国文化』、中央编译出版社.
- 钟冰（2013）「“外号”引出的教育」『北京教育(普教)』、04:41.
- 赵翼（2019）『陔余丛考』、中华书局.
- 中国社会科学院语言研究所（2005）『现代汉语词典 第五版』、商务印书馆.

コーパスの資料

『日中对訳コーパス』（北京日本学研究中心）小説、エッセイ、伝記、政治評論・白書、法律関連文書・条約文書、詩など各ジャンルの日中对訳テキスト合計2千万字余りの対訳データを収録している。

『北京大学 CCL コーパス』（北京大学中国言語学研究中心）書籍全般、雑誌全般、新聞、教科書などのジャンルにまたがって7億8346万語超えのデータを収録している。その中で、現代中国語のデータは5億8179万語余りである。

『北京語言大学 BCC コーパス』（北京語言大学）書籍全般、雑誌全般、新聞、教科書などのジャンルにまたがって150億字超えのデータを収録している。

『KOTONOHA 現代日本語書き言葉均衡コーパス』（国立国語研究所）書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などのジャンルにまたがって1億430万語のデータを収録している。

インターネットの資料

文献：

萩原義雄（1999）「酒の異名「竹葉」と酒飲みの異名「上戸」他」、補筆、駒澤大学総合教育研究部日本文化部門 情報言語学研究室.

https://www.komazawa-u.ac.jp/~hagi/Ko_sake_nomi.html (20200802)

漆原次郎（2019）「なぜ日本人だけがゴボウを育て文化に発展させたのか—世界で唯一の発展を遂げた根菜の物語—」（前篇）、食の研究所.

<https://jbpress.ismedia.jp/articles/-/56064> (20200119)

こだわりアカデミー教授対談シリーズ「犬の起源を探る」

https://www.athome-academy.jp/archive/biology/0000000267_all.html (20200119)

江戸時代 Campus 「江戸時代の人には渾名のつけ方がとても上手だった？」

<http://www.edojidai.info/unenchiku/adana.html> (20201015)

調査・アンケート及び取材：

2014 年掲載 マイナビニュースによる学生時代のあだ名アンケート

<https://news.mynavi.jp/article/20140618-a247/> (20201015)

2015 年掲載 先生につけたあだ名についての「高校生実態把握調査」

<https://news.merumo.ne.jp/article/genre/3720648> (20201015)

2016 年掲載 「日本全国サラリーマン実態調査」

https://www.tfm.co.jp/abe/answer/surveydata_s10.php?id=509 (20201015)

2017 年掲載 SANSPO 「女子生徒に「サル」と不適切なあだ名 岐阜の中学で教諭」

<https://www.sanspo.com/geino/amp/20170218/tro17021813370007-a.html> (20201015)

2018 年掲載 「いまどき小学生の呼び名問題を問う」 全国教育問題協議会

<https://www.zenkyokyo.net/assert/appeal/1362> (20200320)

2018 年掲載 『朝日新聞』「鼻高・長面・芋…あだ名から見える幕末大名のユーモア」
<https://www.asahi.com/articles/ASLB474Z7LB4PGJB00H.html> (20201015)

2019 年掲載 「職場での呼び方についての調査」
<https://prtmes.jp/main/html/rd/p/000000090.000045126.html> (20201015)

2019 年掲載 『埼玉新聞』「所沢中 1 自殺、いじめ認定 学用品壊され、侮蔑的あだ名も…市教委が報告書公表 教職員の問題も指摘」
https://www.saitama-np.co.jp/news/2019/12/14/05_.html (20200320)

皇学館高校いじめ自殺事件 (Wikipedia)
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%9A%87%E5%AD%B8%E9%A4%A8%E9%AB%98%E6%A0%A1%E3%81%84%E3%81%98%E3%82%81%E8%87%AA%E6%AE%BA%E4%BA%8B%E4%BB%B6> (20201015)

NHK 「いじめについて語り合おう」
<https://www.nhk.or.jp/ijimezero/mail.html> (20201125)

ホームページの情報：

和歌山県警察ホームページ「自転車用ヘルメットを着用しましょう」
https://www.police.pref.wakayama.lg.jp/02_koutsu/jikoboushi/bicycle_helmet/index.html
(20201015)

香川県三豊市観光交流局のホームページ
<https://www.mitoyo-kanko.com/%E5%BC%B5%E5%AD%90%E3%81%AE%E8%99%8E-2/>
(20201015)